
尋獄E1 (DEGAUSS JAIL)

砂上 巳水

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

尋獄E1（DEGAUSS JAIL）

【Nコード】

N7261G

【作者名】

砂上 巳水

【あらすじ】

水憐島。そこは巨大な水族館としての面を持つ人口島だった。ここでアルバイトをしていた沖田悠樹は、ある日双子の弟である敏と父大助と数年ぶりの再会をした。だが、彼は知らなかった。それが自分たちの運命を大きく変えてしまうことに……。これまでの尋獄とは違う、全く新しい感染生物。新たな敵。セカンドブラックドメインの存在。バイオハザードが発生したこの島で、果たして彼らは生き残ることが出来るのだろうか。イミューニティーの国鳥友も参戦し、ストーリーは大きく進んでいく。尋獄2と同時に起きていたも

う
一
つ
の
尋
獄
、
是
非
御
覧
下
さ
い
！

＜第一章＞地獄へ尋ねる（前書き）

このお話は尋獄¹、2を呼んでからでないと理解出来ない面が多々あると思います。

できればそちらからお読み下さい。

<第一章>地獄へ尋ねる

<プロローグ>

上、右、左……周囲の大部分を強化ガラスの水槽で囲まれた廊下。一人の妙齡の女性がそこを歩いていた。誰もが憧れるような綺麗な長い髪。

通り過ぎる異性が目を奪われるような大きな二重の目。

新品のフランス人形のような美しい女性だ。

彼女は廊下を出ると一つの扉を開け、その中に入った。職員用通路であるその場所には人の気配は一切ない。まるで彼女だけがそこに残り残されたと錯覚するくらい静かだ。

普通ならば寂しく思うだろう。

心細くなるだろう。

だが、彼女は平然とその廊下を歩き続けた。一切怖いものなど無いというように。

しばらく歩くと彼女とはある部屋の前に止まった。

彼女の私室だ。

彼女は部屋に入ると直ぐに、中央に陣取っている化粧台の前に座った。

そしてそのまま正面に設置された大きな楕円形の鏡を見つめる。

鏡には自分の顔が映っていた。

綺麗にかたちどられた絶妙なラインの顎。

はつきりと開いた瞳^{まつげ}。

艶やかな細い唇。

顔のパーツ一つ一つが光を放っているように見える。

しばらくの間、彼女はずっとそうして自分の顔に酔いしれていた。まるで愛すべき恋人を見つめるように。

数千万円の宝石を見つめるように。

それが彼女の日課だった。習慣だった。

そう、その時まで。

「？」

ふと、彼女は鏡に映っている自分の頬に一筋の線を見つけた。薄く良く近付いて見なければ分からないような線を。

それは皺しわだった。

日頃の仕事の疲れが溜まっていたのだろうか。

それとも心労の所為か。

理由は何かは分からないが、とにかく其処には一本の短い皺が形成されていた。

ガタンッ！

彼女は勢い良く椅子から立ち上がった。その顔はまるで悪夢を見た後のように汗ばみ、呼吸が荒くなっている。

自分の美しさに、神々しさに、その美貌に絶対的なプライド、いや 自己の存在の全てを見出していた彼女にとって、その一筋の線の存在は絶望的なものに見えた。

この世の終わりだと思った。

憎むべき最大の悪に見えた。

彼女は椅子を持ち上げると、腕力の全てを活かしそれを鏡に叩き付けた。

その線を認めないと。

まやかしだと言うように。

そして……彼女は崩れ落ちた。

瞼まぶたから大量の雫を垂らしながら。

どれだけそうしていただろうか。

彼女は突然立ち上がった。

先ほどまでの涙が嘘のようにすっかりとした足取りだ。

彼女の顔は笑っていた。

美しくではない。

気高くでもない。

不気味に歪んだ笑い方だ。

その笑みを浮かべている姿を見れば、おそらく誰も彼女を綺麗だとは言わないだろう。

きつところ思っている筈だから。

「悪魔」と。

尋獄E1（DEGAUSS JAIL）

<第一章>地獄へ尋ねる

水憐島。

数十年前に突如作られた巨大な人工島の名前。

元々は地下資源をくみ上げる施設として作られたものの、その敷地の広さと交通の利便さから、今では一部を改築し巨大な水族館としての名を全国に轟かせている。

その人気は上々で、国内テーマパーク施設人気投票第二位に君臨してすらいた。

廊下廊下の端に小さな川のような水路が設置され、天井や壁が水槽となっているその光景は圧巻だ。多くの人間がまずそれだけでこの島に魅了されてしまう。

また建物自体の外観もすばらしく、一見すればSF映画に登場するドーム型の宇宙ステーションにも見える。

だが人気の秘密はその構造だけではない。

この水憐島が絶大な人気を誇る最大の理由は、その所有している魚の美しさと寿命の長さだった。

どういうわけか分らないが、水憐島で使役されている魚や哺乳類は妙なことに他の水族館よりも三倍は寿命が長い。

餌がいいのだから、環境がいいのだから色々とファンの間では語られているが、その秘密は明らかにはなっていない。

言えることは、ただ普通とは何かが違うという事だけだった。

「すみません。この魚ってどこに居るんですか？」

クリクリの巻き毛の女性がつつ立っている警備員に呼びかけた。

警備員は気だるそうに応じる。

「ああ、この魚ですね。この先を真つ直ぐに行つて右に曲がつてく
ださい。大きなマグロ用の水槽があると思いますから、それを目印
にしてさらに右に曲がつた所に有ります」

「そうですか、ありがとうございます」

女性は笑顔で礼を言つと、直ぐに言われた場所へ向かつた。

警備員の男はその後姿をしばらく見つめると、ポケットからライ
ターを取り出しタバコを口に咥える。勿論こんなことをしていいわ
けが無い。これは男の完全なルール違反だつた。

「ふう……めんどくせえ。自分で地図見て確かめろよ」

女性の姿が消えると、男は口から煙を吐きながらそう呟いた。

この男の名前は沖田^{おきた}悠樹^{ゆうき}。

二十二歳のフリーターで水憐島のアルバイトの警備員だ。

今時珍しい金色に染めた立てた髪に高い鼻、気だるそうに垂れた
目つきの悪い瞳。まるでそこら辺にいるチンピラのような顔をして
いる。

そんな外見や態度の所為か、一体どうやって悠樹がこの大人気テ
ーマパークのアルバイトに受かつたか不思議がる人間は多く居た。
いや、悠樹自身ですら最初は自分が採用されたことが信じられ
なかつた。

「……変人避けねえ」

悠樹は思わず苦笑いを浮かべる。前に上司から聞いた、自分が採
用された本当の理由を思い出したからだ。

『この水憐島のアルバイトはみんなボンボンだからな。いざしつこ
い客や迷惑な客に絡まれるとビビっちゃうんだ。お前ならそうなの
らないだろ?』

それは簡単に言えば使い捨ての存在ということだつた。

どうやらこの水憐島では悠樹のようなガラの悪い人間を定期的に雇う事で、施設内の治安を強引に守っているらしい。もしクレームが来ても、悠樹をクビにすれば水憐島自体に責任が問われる事が無い。実にずるく都合のいい話だ。

「そっちがその気ならこつちも十分に今の地位を利用してやるよ」

これは悠樹の口癖だった。

悠樹は水憐島から与えられている権限を自分がクビになるまでに使いまくることを考えた。定住地を持たない悠樹は寝泊りや食事の全てを水憐島のまかないで補った。アルバイトは関係者とみなされ出入りが自由なため、勤務日以外も一日の殆どを水憐島で過ごした。関係者サービスで配られ手に入れたチケットを手当たりしだい集め、双子の弟の敏や友人に半ば強引に売りつけたのも勿論それが理由だ。

「ふう、早く終わんねーかな。ダリイ……」

先ほど開園したばかりだということにも関わらず、人目を気にすることもなく悠樹は大きな欠伸をした。

今彼が立っている場所は水憐島の水族館区域一階の廊下だ。廊下の右側が小さな水槽で彩られ、熱帯魚が自由気ままに泳いでいる光景を見る事が出来る場所である。一応魚を見やすいように外の光を遮り壁で囲んではいるものの、地上であるためか所々に気分転換用の小窓が取り付けられている。

悠樹はタバコを吸いつつ、何となくその窓から外の明るい世界を見た。

陸地側のためか真つ青な海を挟んで直ぐ近くに静岡県町の町並みが見え、その空は眩しいくらいに太陽が笑い燦々と光を放っている。

「……うざってえ光だ」

普通の人ならば「気持ち良い」と言う様な暖かな日を片手で遮ると、悠樹はその小窓の日よけを下ろした。

本当に迷惑そうに。
素早く一瞬で。

水憐島入口。

静岡県の陸地から大きな金属製の橋を渡ってすぐの、アーチ状の丸っこい改札のある場所だ。

「お父さん、まだ？」

小学生くらいのおさげの女の子が父親の腕にぶら下がり、その入口の前ではしゃいでいる。

実にほのぼのとした幸せそうな光景であつた。

茶色のズボンに白いノースリーブのシャツと黒いロングTシャツを重ね着した、メガネをかけた短い茶髪の男性。

おきたとし 沖田敏は優しいような笑みを浮かべ、列の前に居るその親子を何となく遠目に見つめた。

「水憐島か……まさかあの兄貴がこんな立派な所で働いているとはね。意外じゃない？ 父さん」

敏は真横に無表情で立っている、ジーパンに白いYシャツ姿の中年の男に呼びかけた。

「どこで働こうが知ったことか。あの悪ガキ、長い間音信不通にしておいて。まったく、お前が俺に教えてくれなかったら永遠に顔を見る事が出来ないと思ってたぞ」

悠樹と敏の実の父、大助が目の奥に憤怒の炎を燃やしながら言った。

「兄貴は黙れって言ってたけど、流石にこう何年も親と会わないの

は頂けないからね。俺もこんな形での再開はさせたくなかったけど、この際は仕方ない」

敏は溜息混じりにそう言った。

兄の悠樹からある日突然電話をかけられ、強引に水憐島のチケツトを売りつけられた敏は、最初はすぐにそれを送り返そうと思っていた。

だが直前になって思いとどまり、しばらく会っていなかった父、大助との再会にそれを利用しようと考えたのだ。だから大助が来るなどとは勿論悠樹は知らない。チケツトを送ったのも金目当てで、精々敏とその彼女が使っただろうとしか思っただけだった。

「あ、父さん。次だ、チケツト出して」

悠樹はとうとう入口付近まで進んだことに気づき、大助に呼びかけた。

「悠樹を見つければ次第直ぐに連れて変えるぞ。あの馬鹿息子に溜まりに溜まった説教をしないといけないからね」

「父さん、頼むから水憐島の中で騒ぎを起こさないでくれよ。俺はテレビに顔を出すのも父さんの顔が映るのも嫌だぞ」

気合入りっぱなしの大助を見て、若干引き気味に敏はそう言った。

「あ、あれ知ってる、確かアロワナだよな！」

「そうそう、熱帯雨林に住んでいる奴な」

左右に大きな水槽のある地下二階。その水槽をカップルのような

若い今風の二人が仲良く眺めている。

「ねえ、健ちゃんも下次の場所へ行こうよ。あ、私鮫みたいな。確か鮫を自由に泳がせてる大きな水槽があるんでしょ？」

高そうな服に全身を着飾った、明るい茶髪の女性が言った。

「そうだな、もうここも飽きてきたし……そろそろ行くか」

その女性の彼氏だろうか。健ちゃんと呼ばれていた、ズボンを尻の付近にまで下ろした鶏冠頭の男性が頷いた。

「痛ってっ!？」

鶏冠頭の男が水槽から離れようと振り返った瞬間、廊下を歩いていた野球帽子を被った男とぶつかった。男はよほど早く歩いていたのか勢い良く転ぶ。

「ああ、すいません。大丈夫ですか？」

鶏冠頭の男は申しわけなさそうに男に手を伸ばした。

だが転んでいた男は無言で立ち上がると、さつさと二人を無視して先へ進んでいく。

「何だよあいつ」

その後ろ姿を見ながら鶏冠頭の男は舌打ちした。

「行こうぜ、マリ」

「……ねえ、今の奴あそこから出てきたんだけど、この水憐島の関係者なのかな？」

男の引つ張る腕を押さえ、マリと呼ばれた女性は廊下の先にある開け放れたままの扉を指差した。そこには「関係者以外立ち入り禁止」、「水槽管理区域」という札が掛かっている。

「さあな、そうなんじゃん？ どうでもいいし。行こうぜ」

鶏冠頭の男は興味なさそうにマリの腕を取ると、何事も無かったかのよに歩き出した。

だが腕を引かれながらも、マリはその扉からしばらく視線を離すことが出来なかった。

まるでその扉が地獄の入口のように見えていたのだから。

暗い、冷たい、恐怖と絶望に満ちた世界のように。

水憐島総合管理室。

ここは主に水憐島の監視や、水質状況、魚や哺乳類の管理などを行う場所だ。

壁一面に並んだ数十台の大型画面を前にして、扇形に無数にパソコン付きの机が並んでいる。

今、その中でも一際大きな半円形の机の上にとある人間が座っていた。

柳加奈子三十三歳。

水憐島の殆どの管理を館長から任されている人間だ。

凛々しい目つきに、ポニーテールに結んだ長い栗色の髪。唇は薄く鼻は魔女のように鍵爪状になっている。

誰が見ても気が強く話しかけ難いといった雰囲気を持つ女性だった。

「柳管理長、ちょっと良いですか？」

部下の一人が恐る恐る彼女に呼びかけた。

「何？」

ギョロリと目だけを動かしてその部下の女性を見つめる柳。

「あ、あの、お知らせしたいことがあります……実は先ほどから水質に奇妙なシグナルが出ているんです」

「奇妙なシグナル？ 何？」

「はい、現在調査中で詳しくは分かりませんが、どうも何かの粉末のような物が水憐島中の水槽に拡散しているみたいなんです」

「粉末……一体どこから？」

「それがどうやら地下の『あの場所』からのようで……」

その時だけ部下の女性は僅かに周りを気にし、声を落としてそう言った。

「普通の音量で話して構わない。今ここにいるメンバーは全員イミユニティーの関係者だから」

柳は女性の心配を一笑するように言った。

「あの場所からってことは、何が原因にしても行ける人間は限られるわ。ちよつと待って、私の端末であそこの映像をしてみるから」

柳はタッチタイピングで素早く手前の画面に一つの映像を出した。

「時間を戻すわよ」

誰も居ないためそのまま画面の右上をクリックする。

「大体十分前でいいでしょ。ほら、誰か居た。これは……」

そこで柳の手は止まった。予期しなかった映像を見てしまったから。

そこに映っていたのは野球帽子を被った若い男だった。

「な、何故『あの人』が……一体何をパイプに流しているんですか？」

部下の女性が不思議そうに尋ねる。

だが、柳は答えなかった。ただ放心したように画面を見つめている。

「柳管理長？」

女性は心配そうに顔を覗いた。

ガッ！

その瞬間、柳が女性の襟を掴んだ。その速さにビクと震える女性。

「すぐにもう一度水質を調べて、AS計測器が赤になっているかどうか見て！」

「は、はい！ただ今」

女性は柳の剣幕に押され、慌てて自分のデスクに戻った。

彼女が調べている間、柳は落ちつかないように何度も一指し指を机にトントンとぶつける。

「柳管理長、赤です、赤になってます！」

自分のデスクから女性が大きな声で言った。それを聞いた瞬間、柳は最悪の状態になってしまったことを悟った。

大きなショックと頭の中で何度も暴れる絶望感を押さえ込み、柳は勢い良く立ち上がると全ての部下に聞こえるように張り詰めた大声を出した。

「全員、作業を中断！ 緊急事態よ。水憐島の全水槽にイグマ細胞活性剤が散布された。すぐに客を避難させて全ての水槽をロックして！」

その言葉に誰もが信じられないといった表情で動きを止めた。口を大きく開け、啞然とした表情で柳を見ている。冗談だとも思っているのだろうか。

「何してるの！？ 早く作業に取り掛かって、バイオハザードが起きるのよ！ イミユニティー本部にも連絡を入れて！」

柳は再び叫んだ。

ようやく事態を飲み込めたのだろう。職員たちは時間停止から解き放たれたように、一気に揃って動き出した。

「ち、地下一階ロック開始！」

「そつちじゃない、ファイルが別だ！」

「それは俺がやるからお前はあつちをやれ！」

「ちよつ、邪魔、どいて！」

先ほどのまでの落ち着いた職場が嘘のように一瞬で騒然となる。まるでテンションの高い飲み会の会場に居るかのようだ。

その混乱具合を横目に、頭を抱えながら柳は呟いた。
「お願い……間に合って！」

「兄貴の奴、一体どこを警備してるんだ？ 中々見つからないね父さん」

半径十メートルほどの大きな円柱型の水槽がある広間で、敏は周囲の人間を見回しながらそう言った。

「あの性格だからな。もしかしたらもうクビになってるかもしれないぞ。ちよつとあの警備員にでも聞いてみるか」

大助はそう言つと、同時に大型水槽の向かいの壁、階段の前に立っている警備員に声をかけようとした。

だがあと数メートルという所で、目の前を野球帽子を被つた若い男が早足で通り過ぎたため、それは適わなかった。

体と体がぶつかるまさにギリギリの距離だ。

「 危なっ！？」

こういつた事に関して我慢できない大助は、そのまま注意をしようと男の肩に手を置いた。

「 ひっ！？」

その瞬間、男は素つ頓狂な声をあげ、ビクリツと大助を見上げた。まるで何かに怯えているというような神経質な反応だ。

「 ああ？」

訝しげに大助が見ていると、そのまま男は逃げるように走り去つ

ていった。

「今の人がどうかしたの？」

後ろに居たため男の状態を知らなかった敏が、不思議そうに大助に聞く。

「いや……何でもない。 ん？」

大助は男から視線を動かし、警備員に向き直ろうとした。その時、偶然さっきの男が降りてきた階段の上に立っていた人物と目が合った。

 んん？

何となく見つめる大助。同じようにその男も大助を見つめた。

「あつ！？」

大助と悠樹は同時に相手の正体に気づいた。

「 つ悠樹いつ！」

周りに多くの人がいるというのに、大声で息子の名を叫ぶ大助。

「な、何でオヤジがここに居るんだよ！？」

それを耳にした途端、大助は全力疾走を開始していた。

「待て！ 逃げるな悠樹い！」

閻魔大王のような顔でその追跡を始める大助。もう結構な年に関わらず、その動きは盛った黒豹のようだ。

「父さん、兄貴、ちよっ……待てって！」

いい年こいて、しかもこんなテーマパークの中で鬼ごっこを始めた二人の後を、溜息を吐きながら敏は追った。

「何あの人たち？」

そんな三人の様子を、中央の大きな円柱水槽の前に陣取っていた女子高生たちが迷惑そうに見た。

「あんなの放つところ。それよりこれ見てよ。さっきから何か形が変わってきてるんだけど、新種の魚なのかな？」

「えゝどれどれ？ あ、ホントだ何かネズミみたいな魚じゃん！

こんなの居たっけ？」

「さっきまでは普通の魚だったよ。けど何かいきなり暴れだしたら

こんな形になっちゃった」

「あはは、何それ？」

水槽の中の奇妙な魚を見て、面白そうに笑う女子高生の面々。

その顔を水槽の「内側」から憎らしげに眺めると、その奇妙な魚は自分の頭を水槽にぶつけだした。何度も、何度も、何度も……

「悠樹、待て 逃げるな！」

先ほどの階段を上りきった所で、大助は悠樹の肩を鷲掴みにし怒鳴りつけた。ここは円形のホールのような場所で今は人が全くない。

「離せよ！」

悠樹はそれを強引に振りほどくと、大助を睨みつける。

「何であんたが来てだよ！ 敏が呼んだのか！？」

「そんなことはどうでもいい。悠樹、何故今まで連絡一つよこさなかった。お前にもし何かがあつたら母さんに何て言えがいいんだ？」
「俺がどうしようとおんたには関係ないだろ！」

悠樹は本当にうざったそうに言った。

「……もういい大人だ。別に俺の家に帰って来いとは言わない。ただ、連絡くらいは入れろ」

「誰が母さんを殺した奴の所に連絡なんてするか。俺はあんたとは縁を切ったんだ。もう構わないでくれ！」

「母さんを殺した」その悠樹の言葉に、思わず大助の腕から力が抜ける。

「兄貴、それは言いすぎだ。父さんは悪くない」

いつの間に追いついていたのだろうか。少しむっとした表情で敏が悠樹を睨んだ。

「敏 …… 何でオヤジを呼んだんだよ。お前一体何のつもりなんだ？」

「兄貴が全く父さんの話を聞こうとしなかったからね。どうしても会わせなかったのさ。……ここじゃ何だし、場所を移そう。バイト早退出来る？」

「話す事なんてねえよ、今すぐ帰れ」

悠樹は尚も変わらず迷惑そうに、手をヒラヒラと振った。

「兄さん……」

そんな兄の行動に失望するように溜息を吐く悠樹。

だが、幾ら悠樹が拒絶しようとも敏は引き下がる気はなかった。

この機会を逃したらもう二度と、本当に悠樹は父と会わないと思ったから。

しつこい事は承知で敏は尚も説得を試みようとした。だが
パリーンッ！

その瞬間、階段の下でガラスの割れるような不快な音が鳴り響いた。

ガンガン、ガンガン……

数秒前。

半径十メートル程の大きな円柱状の水槽から、突然奇妙な音が響

きだした。

その音に注意を引き付けられた人間は誰もが水槽内の光景に驚いただろう。

圧倒的な不気味さと恐怖。

すぐにそういった感情に囚われた筈だから。

「な、何なのよこれ!？」

「みんな、もつと離れよう……!」

水槽を食い入るように見つめていた女子高生たちは、既にその前を離れ、壁際で怯えたように密集している。

それは実に当然の反応だ。こんな光景を見てしまつては怯えない方がおかしい。

水槽内の様子はまさに異常そのものだった。

さつきまでは普通の姿だったはずなのだが、今では水槽中の魚が化け物のような形になり、奇声を鳴り響かせて水槽のガラスに体当たりをしている。

化け物の姿を簡単に言えば、魚の下半身にネズミの上半身をくっ付けたような形だ。その口からは長いパイプのような舌が伸び、耳が上に逆立ち、腕の側面からは尾びれのようなものが生えている。

また目は真つ赤に充血し、まるで悪魔の目のように見えた。

「一体何なんだ?」

一人の係員が水槽に歩み寄り、こう呟いた。

何が起こったのか一応調べて見るつもりらしい。慎重にガラスの前まで来ると、係員は顔を押し込むようにガラスに当て、水槽の中を覗き込んだ。

毒物みたいのは見えないしな……

特に変わった所はない。化け物かした魚を省けば何時も通りの水槽だ。係員は肉眼では原因説明は不可能だと諦め、引き返そうとした。

パリーンッ!

しかしその直後、耳障りな鳴き声と共に無数のネズミ魚が水槽を

突き破り、一気に飛び出してきた。

「ヂイイイイイッ！」

耳を劈くような鳴き声が溢れかえる。

「うおおおおお！？」

洪水のように足元に広がる水に構う暇も無く、係員はネズミ魚の大群に覆われた。無数の歯がその身に突き立てられる。

「ぐあああああつー！？」

高く舞い上がった血飛沫と共に、咆哮のような絶叫が広間に響く。その声を合図にして、一気に周囲はパニックになった。

「きゃあああああああ！？」

「に、逃げろおお！」

「うわあああああ……！？」

その声は当然、広間の真上に位置するホールに居た悠樹、敏、大助の耳にも聞こえた。

「何だ！？」

悠樹は素早く階段の下に視線を這わせた。そしてその瞬間、この世の物とは思えないような阿鼻叫喚の光景を目にした。

夥しい数のネズミ魚が飛び跳ね、片っ端から逃げ惑う人間に襲い掛かっていたのだ。

ある者は首に咬みつかれ、あるものは無数のネズミ魚に押し掛かれ、口の中に長い舌を突っ込まれている。もはやそこには美しい水憐島の姿などなく、ただ悪夢のような光景だけが広がっていた。

「どけっ！」

「うおっ！？」

悠樹は階段を上がって逃げてきた数名の一般客に押され、後ろに吹き飛んだ。そのままその人間たちは悠樹に構うことなく、猛烈な

勢いで廊下を走っていく。

「悠樹、どうした？ 何が起きた！？」

まだ現状をよく理解していない大助は、悠樹に駆け寄りながら怪訝そうに聞いた。

「下を見る、何かすげー事になってる！」

「すげー事？」

その言葉の通りに階段から下を覗く大助。下は地獄絵図のような陰惨な光景になっていた。

「これは……一体？」

あまりの状況に頭が追いつかない。大助は呆然とその光景を見つめ、目を見開いた。

「デイイイイイヤー！」

上にも獲物が居るという事に気がついたのだろうか。ネズミ魚たちの一部が階段を駆け上りだした。数が多い所為か、ガサガサとゴキブリのような音を鳴り響かせている。

「と、父さん逃げよう！」

続々と上がってくるネズミ魚を目にし慌てて叫ぶと、敏は階段と逆方向に走り出した。直ぐにそれに続く悠樹と大助。

「あいつらは一体何なんだ？ どこから出てきた！？」

「今はとにかく走れ！ どこかに隠れないとやられるぞ！」

焦る敏とは裏腹に、大助は辛うじて保っている冷静さを活かしそう判断した。

「デイイイウウアアアッー！」

続々と三人に迫り来るネズミ魚たち。

「真後ろまで来てるぞ！ 逃げ！」

背後の様子を見た悠樹が大声で怒鳴った。

目の前にまだこの事態を知らない一般客が何人か見えてくる。周囲の壁にも長方形の水槽の窓が目につくようになってきた。

「逃げろ！ 死ぬぞ！」

悠樹は走りながら水槽を眺めている客たちに向かって叫んだ。

だが、突然そんな事を言われても今の日本で素直に逃げ出す人間はめったに居ない。殆どの客が不思議そうに走ってくる三人を見つめるだけだった。

「あそこだ、あそこに隠れよう！」

廊下の先右方向にある関係者用の扉を指差し、大助が声をあげた。

「え、おい、ちょっと待てあそこは倉庫……」

悠樹が何か言いかけたが、構わず大助と敏は足を進める。そして、瞬く間にその中に入った。

「つくそ！」

悠樹は逃げ場のない倉庫に入る事に躊躇いを持ったものの、仕方がなく二人と共に扉の反対側へ足を踏み入れた。

「悠樹、これを　！　扉を閉める」

大助が倉庫に入ってすぐに、中にあつたポールを渡してくる。悠樹はそれを受け取りそのまま扉の取つてに通し、扉が開かないように固定した。

「待つて兄貴、他の人が襲われてる！　中に入れよう！」

ようやく緊急事態に気がついたのだろう。扉の前では先ほど通り過ぎた客たちが折り重なるように逃げ惑っている姿が見えた。それを見た敏はポールを抜こうと手を伸ばす。

だが、悠樹はその手を跳ね除けた。

「　　っ！？」

「馬鹿かお前。今ここを開けたらあのネズミ魚軍団も入ってくるだろうが。今更もう間に合わねーよ」

「兄貴こそ正気か？　今開ければまだあの人たちは助かるんだぞ！？」

「危険が大きすぎる。あいつらは見捨てろ。残念だけどな」

全く残念そうではない顔で悠樹はそう言った。

「そんな……！」

敏としてはそんな事出来るわけがない。

悠樹の言葉を見無視し、扉を強引に開けようと敏は前に進んだ。

「ぎゃあああああ！」

しかしその瞬間、叫び声と同時に扉の窓ガラスに大量の血が付着した。まさに目の前で誰かが殺されたらしい。

「…… もう無理だ。危ないから下がれ敏」

呆然と立ち尽くしている敏の肩を引くと、大助は暗い顔で呟いた。

「何でこんな事に……まるで地獄じゃないか……」

敏は頭を抱えながら座り込む。

悠樹と大助はその姿をただ無言で見つめ続けていた。

一体誰がこんな事になると予測出来ただろう。

敏の願いだった家族三人の再会の日は、人生最悪の日となった。

<第一章>地獄へ尋ねる（後書き）

2本同時連載で執筆している為、次の更新はかなり遅れるかもしれません。

<第二章>光赫の水牢

<第二章>光赫の水牢

午前十二時三十分。バイオハザード発生から三時間と二十分が経過。

水憐島正面入り口前は無数の大型トラックや青いシート、半透明の隔離テントなどで塞がれていた。その範囲は橋の上を静岡県本土の陸地の目の前まで続き、もはや完全封鎖といった状態だ。

どこを見渡しても忙しそうに紺色の軍服を着た関係者が口論しており、中でも水憐島本島のアーチ状の改札の前には一際多くの人間が集まっていた。施設内から何とか脱出してきた面々や、事態の収拾のために中に踏み込む用意をしている国の特殊部隊の人間などだ。「正面入り口は水憐島の中から完全にロックされています。強化ガラスのためこちらから開けるのは時間が掛かりますし、今となつては鼠魚ねずみうおが出てくるので、寧ろ開けない方がいいでしょう」

軍服のような服を着た三十代前後と思わしき女性が言った。ミドルヘアの薄い茶髪に、つり上がった目が印象的だ。

「ではどこから侵入すんですか？」

五十人近く立ち並んでいる同じ服装のメンバーの中から、若いマングロ顔の男が聞く。

「正式な出入口はどこも鼠魚が飛び出す可能性があるんで、侵入するとしたらやはり汚水廃棄水道からしかないですね。あそこならめったに人間も通らないので鼠魚も居ない筈です」

「……汚水層ですか、臭そうっすね」

別のメンバーが嫌そうに呟いた。

「文句を言わないで下さい。私だって嫌ですから。でも、事件解決

のためには仕方がないですよ」

「分かってますよ、西川さん。これも仕事ですからね」

年齢の割には子供っぽい表情で睨みつけてくる西川に対し、そのメンバーは溜息交じりの笑みを浮かべた。

「それでは、中に入ります。調査隊メンバー計二十人、用意して下さい」

西川は無理やり絞り出したような不自然な大声で、周囲の面子に呼びかけた。

「では下田さん。私たちは中に侵入します」

そしてそのまま背後の仮設大型テントを振り返り、そこに居る若い中年の男に向かって気合の入った声をかける。腕を組んだまま男は黙って頷いた。

汚水廃棄水道は正面入口から丁度水憐島の中心から反対側にあった。

元々は「汚れた水槽の水を海に吐き出す」という目的に作られた道だ。そのため何の扉もなく、ただトンネルの入口のように暗い穴を覗かせている。

西川率いる政府の調査隊はゆっくりとその中を進んでいった。

「いいですか？ もう一度確認しますね。私たちの目的は生存者の救出と事件発生の原因究明です。もし中の情報を持ち出そうとしている人間が居た場合は、迷わず処理して構いません。あとあと面倒なだけですから」

水道内を歩きながら淡々と機械的に決められたセリフを吐く西川。自分たちの居る組織、国家非確認生物対策機関通称「イミュニテ

「イー」では一切の個人的感情を仕事に持ち込むことが許されない。例え本心では人道に反すると思っけていても、それを押し隠して話す必要があつた。

「西川さん、ここから上に出れるみたいですよ」

マグロ顔の若い男が天井を指差した。西川の話の聞いていたのか疑いたくなるような、間を置かない発言だ。

そのままマグロ顔の男は壁に括り付けられていた梯子を昇つていき、天井のマンホールに手を伸ばした。

ガッ！

「うおっ！？」

マグロ顔の男の手元に小型ナイフが勢い良く叩きつけられ、高い金属音を鳴り響かせた。

「な、何すんだ！？」

男は慌てて梯子を掴みなおし、下に立っているナイフの持ち主を睨んだ。

「良くそのマンホールを見る。血が滴り落ちている。……まだ新しいようだ。もしかしたら、真上に鼠魚が居るのかも知れない」

「口で言えよ！ 何でわざわざナイフを使う？」

「口で言っていたら間に合わなかつた。俺は確実にお前を止められる方法を取っただけだ」

自分の行動に間違いは全くない無いとでもいうように、下の男は平然とこう言つてのけた。

「友 お前、調子に乗るなよ？」

「調子に乗ってなんかいない。感情的になるな。早くマンホールの上を確かめろ」

セミシヨートの黒に近い茶髪に、一般的な男性としては細長い眉と目、国鳥友こくとりゆうは感情の籠らない声でそう言つた。

「田代、国鳥の言う通りにやってください」

西川が無駄な争いを避ける為に友の言葉に同調する。田代と呼ばれたマグロ顔の男は渋々頷いた。

「ちえつ、分かりましたよ。西川さんは友びいきだからな」

ぶつぶつと文句を言いながらマンホールを少しだけずらし、その向こう側に視線を走らせる。そこには数体の一般人の死体の横に、確かに二匹の鼠魚が徘徊していた。

友の言う通りだったため、舌打ちしながら田代は下に降りた。

「上に鼠魚が二匹います。どうしますか？」

「二匹なら問題は無いでしょう。では、田代がいる一班五名はここから侵入してください。残りは私と共に別の侵入経路の搜索です」

「分かりました」

田代たちは静かに返事をした。

「鼠魚は水憐島の代表、横谷晶子が独自の研究で生み出した生物です。情報漏えいを防ぐため、本部にもその生態の詳細は知らされていません。気をつけて下さい」

「はい」

頷くと同時に田代らは上に登りだした。それを確認すると、西川は歩行を再開する。

「国鳥、さつきはありがとうございます。田代は長年イミユニティに居るにも関わらず、注意力が無いですからね。助かりました」
歩きながら横にいる友にこう言った。

「いえ、俺は仕事を確実に成功させ、こちら側の被害を減らせる選択をとっただけだ。別に田代の身を案じたわけじゃない。気にしないで下さい」

敬語で話す事が嫌いな友は、溜め口と敬語が入り混じったような奇妙な喋り方でそう返す。

「……相変わらず、感情の無い機械人形みたいな性格ですね」

「感情に囚われていては、任務を成功させるどころか救える命も救えなくなる。俺はそういう状態に遭いたくないだけです」

「まるでそういう状態に遭った事があるみたいなセリフですね。あなたの事は詳しくは知りませんが、確か……まだ組織に入ってから

三年目でしよう？」

「個人的な事はあなたには関係ないだろ？ 俺とあなたは今回の仕事のただの共通調査員であって、それ以上でもそれ以下でもない。仕事以外の事はあなたにはどうでもいいはずだ」

興味津々そうな西川の質問を、友はあっさりと切り捨てた。

「……そうですね。すいません」

その友のあまりの無感情さ、自分に対する冷たさに、西川は僅かに悲しそうな素振りを見せると、前に向き直った。

「もうこの部屋の前には居ないぜ」

倉庫の扉の下の際間から周囲を見渡しながら、悠樹が言った。

「居ないって言っても部屋の前だけだろ？ 兄貴はここから出る気なのか。助けが来るまで待とう、危険だよ」

目を血走らせ服を冷汗で濡らしたまま、敏が扉を開けようとしている悠樹に呼びかけた。

「こんな所に閉じ籠っていても助かる保障は無いだろ。俺はじっとしてるのが苦手なんだ。お前らは残りたいなら残れ。俺は行くぞ」

「正気か兄貴！？」

全く恐怖を感じていないような悠樹の異常な態度と、あまりにもむっ鉄砲な行動に敏は我が目を疑った。大助も同様の視線を悠樹に

投げかけている。

「こういう状況って、ゲームや映画だと動かない奴らから死んでいくんだよな。俺はここに閉じこもって奴らに囲まれるくらいだったら、自分から出て行つて脱出してやる」

「これは現実なんだぞ、少しは頭を使え！」

事態の酷さ、恐ろしさに全く気がついていないような悠樹の態度を見て、大助は怒鳴りつけた。

「オヤジこそ冷静になれよ。そんなデケー声だしたら奴等が寄つてきちまうだろうが」

溜息をつきながら悠樹は扉の方に向き直り、取っ手を回転させた。「ガチャッ」という音と共に大きく開け放たれる扉。

大助と敏はその瞬間僅かにビクついた。

「じゃあな、折角の再会もここまでだ。また今度機会があつたら会おうぜ。お互い生き残つてればだけど」

ニツと微笑みながら、ズンズンと悠樹は廊下を進んでいく。敏と大助は啞然とした表情でその背中を見つめた。

へ、腰抜け……！

悠樹は心の中でそう呟きながら、まるで恐怖心を母親の胎内に忘れてきたかのように力強い足取りで歩き続けた。

「ここから入り口に一番近いのは……こつちか」

一階の北側、先ほど上がってきた階段とほぼ逆方向に顔を向ける。その視線の先には水のトンネルと呼べるような、床以外の全てが水槽で作られている長い廊下が見える。その廊下を越えて御土産エリアを抜ければ正面入り口があるのだ。

迷う事など、怯えることなど、己には存在しないとも言つように、悠樹は何も考えずいきなりその廊下を歩き出した。横や上を向けば水槽の中では鼠魚ねずみうしな化していない魚が元気に泳ぎ回っている。どうやら全ての魚が鼠魚になるわけではないらしい。何か特殊な感染病にでもかかったのだろうか。

悠樹は何となくそんなことを考えていた。

「……うつうつ……」

突然、足元からそんな声が聞こえた。

「何だ？」

あまりの異常な事態に恐怖感が麻痺してしまっているのか、悠樹は全く驚くことなくその声の主を見る。それは下に横たわっていたスーツ姿の男性の口から漏れた声だった。

これまでも幾つか倒れている人間は居たが、悠樹はそれら全てを死体だと思っていたため殆ど気にはしていなかった。だが、今そこに倒れている男からは確かに声が聞こえた。運良く軽症ですんだのかも知れない。

「おい、あんた。生きてんのか？」

悠樹は男の頬をペチペチと撫し付けに叩いた。

「あ、あああ……たっ……助けてくれ……！」

悠樹の足に縋るように腕を伸ばしてくる男。悠樹はあまり優しい、他人思いとは言えない部類の人間だったが、かといって鬼でもない。助けを求められればそれを無視せず素直に応じる男だった。

「ああ？ 足をやられたのか？ っち、仕方ねーな。ほら、肩貸せ」

悠樹は男の腰に腕を回すと、その体を持ち上げ肩を組んだ。

「たっ……助けてくれ……！」

よほど怖かったのか、男は尚もそう呟き続ける。

「助けて……助けて……！ はあ、はあ……！」

「助けてんだろぅが、黙れよ！ 大の男がいつまでも喘いでるんじやねえー！」

悠樹は男の情けなさにイライラして怒鳴った。

「ちっ、違、助け……！」

「血が？ 大した量は出てねーよ。お前は女か！」

「う、グふっ……がっ、あああああ……！」

いきなり男が大声で叫んだ。同時に暴れだし悠樹の体を突き放す。
「っ！？」

悠樹は横の水槽に体をぶつけ、尻餅をついた。

「つてなー、何しやる!?」

ドスの利いた声で男を睨み付ける悠樹。だが、男はそんな事に一切構うことなく自分の服を破り去り、お腹を押さえのたうち回っていた。

「あ、ああ?」

流石に異常に気づいた悠樹は立ち上がると、心配そうに男に近付いた。

「お、おい。お前大丈夫か? 下痢か?」

そのまま覗き込むようにして男の顔を見つめる。男の顔は油汗が滲み出し、口から血を滴らせ鬼のような形相を作っていた。

さらに近付こうとした瞬間、悠樹の目の前が突然赤一色に染まった。大量の血だ。

「うおおっ!? な、何だつてんだ!？」

悠樹は血の付着した目を服の袖で拭いつつも、無意識の内に後ろに飛びのき、男の方へ視線を向けた。

「あががが、がががああ……!」

男は口や全身の毛穴から血液を吐き出し、痙攣したように震えている。しかもそれだけではなく次第に体が変化を始めていた。

目の瞳以外の部分が全て放射線を浴びたように黄色く染まり、頭の毛が抜け落ち荒地を作り出している。さらに鼻はこそぎ落とされたかのように陥没し、耳が長く伸び口が左右に裂けだしていた。その口の中からは長いパイプのような穴の開いた舌が覗き、顎は漢字の凸^{でこ}を逆さまにしたかのように角ばっている。

え……!?

声にならない声をあげ悠樹が見つめる中で、「それ」はゆっくりと立ち上がった。

「デiiiiiiiiiiii……!」

全身のあばら骨や頬骨が浮きでて、皮膚が鱗のように変化したその元人間の男は、鼠魚のような鳴き声をあげ悠樹を睨み付けた。肌

は強引に水色に染めたような色をしており、まるで魚人のようだ。

魚人はそのまま水掻きのある腕を悠樹の頭へと伸ばしていく。

「な、何だこの野郎！」

悠樹はメンチを切りながらその腕を叩きとばした。「バシッ」といういい音を響かせて、魚人の腕が遠ざかる。しかしその行動は魚人の怒りを買うという結果をもたらしたただけだった。

「ヂユウウォオオオオー！」

魚人は両腕を天地に拝礼するかのように大きく広げ、口内のパイプ型舌を伸ばし顔の前で暴れさせると、一気に悠樹に飛び掛った。

「っおおおおおおああ！？」

幾ら恐怖感が麻痺してしまっても、流石に身の危険を感じたのだろう。悠樹はその魚人の攻撃を慌てて避けると、出口に向かって走り出した。勿論魚人もすぐに悠樹を追走する。

「くそっ、どうなってるんだ！？」

必死にこの水槽で囲まれた廊下の出口を目指し、足を前後に動かした。六メートルほど先の位置に廊下の終わりが見えてくる。

「あと少しだ！」

悠樹はあまり走るのが速くない背後の魚人をチラ見すると、飛び込むように足に力を込めた。

宙に浮く悠樹の全身。跳び箱を飛び越えたかのような大きな放射線状の軌道を作り、廊下と御土産広場の境界を超えようとする。その力強い瞳には水色の鼠魚が映っていた。

「っ……鼠魚！？」

悠樹は前方から飛び出してきた三匹の鼠魚に体当たりされ、空中で彼らと衝突しながら水槽廊下の床に押し戻されるように、激突した。

「デiiiiiiiiii！」

倒れこんだ悠樹の上で、嬉しそうに三匹の鼠魚が舌を伸ばし始める。

ヤバイ、囲まれた！？

前門の狼、校門の虎よろしく、前には鼠魚、後ろには魚人。悠樹はこの状況に愕然とした。

「このクソつたれ！」

まだ追いついていない背後の魚人を確認し、両腕を振り回すことで、胸の上で自分の体に歯を突き立てようとしている鼠魚を殴り飛ばそうとした。

だが、流石にそんなに甘い生き物ではない。それほど簡単に遠ざけられる生き物ならばここまで多くの死人は出てはいないだろう。

拳が体に直撃しても、鼠魚たちは爪や歯を悠樹の服や体にひっかけ、中々離れなかった。その内の一匹がどんどん悠樹の顔に近づいていく。

と同時にとうとう魚人が追いついた。

「デユオオオオオー！」

魚人はまるでキスをするかのように悠樹の頭の前にひたひた跪くと、口から長い舌を伸ばしてきた。顔に近付いていた鼠魚も同様の行動を取る。

悠樹はその瞬間、何だか分からないが物凄い嫌悪感と嫌な予感に支配された。目と鼻の先にまで迫った舌の穴から、小さなビー球ほどのゼラチン状の卵が見える。

悠樹は数時間前に口の中に舌を突っ込まれていた一般客を思い出し、身の毛もよだつ推測をした。

「ま、まさかこの卵を植えつけられると魚人化するのか!？」

ふ、ふざけんな！ 冗談じゃないぜ!？」

悠樹は首を必死に後ろに反らすことで魚人と鼠魚の舌から頭を遠ざけようとする。しかし、その行動の効果は殆ど無かった。

見る見るうちに迫ってくる、グロテクスな気味の悪い二本の茶色い舌。

「あががががつ!？」

今その内の一本、鼠魚の舌が悠樹の口内に侵入した。

あ、俺終わったな。

悠樹はあっさりと死を覚悟した。

ドコンッ！

「ぐお！？」

突然小気味良い音と共に眼前の鼠魚が吹き飛んだ。綺麗さっぱり姿が消えている。魚人の姿も同様だ。

「悠樹！ 大丈夫か！？」

悠樹が混乱していると真後ろから大助の声が聞こえた。

「お、親父　！」

振り返ると、水槽の壁に激突している魚人と仁王立ちしている大助の姿が眼に入った。同時に横では敏が倉庫に有ったポールで鼠魚をゴルフの玉のように打ち飛ばしている姿も見える。

「兄貴、走れ！ 出口まで急ぐんだ！」

敏は汗だらけの顔でポールを握り締め、悠樹を見つめた。その腕と足はプルプルとアル中のように震えている。

「ヂュウオオオオオオウ！」

魚人は怒りに満ちた表情で飛び起きると、まさかり鉞の用に腕を振り、大助の頸動脈を挟ろうとした。

「　っ親父！」

悠樹はその刹那大助を全力で自分の方へ引き、同時に渾身の力を込めて回し蹴りを、魚人の腹部へとめり込ませた。

「ヂュフンッ！？」

変な声を響かせ、再び体を水槽に衝突させる魚人。

「今だ　！ 父さん、兄貴！」

魚人と鼠魚が離れたこの時を逃がしてなるものかと、敏が大きく叫んだ。

三人は脱獄するように水槽廊下から出ると、御土産広場のコーナーを無視し、ただ真っ直ぐに水憐島の出入口、改札へと繋がる扉を目指してダッシュをかけた。

この広場と出入口は同じ一つの大きな空間にある。死ぬ気で走ればすぐにでも脱出できるはずだ。

床の所々に転がっている、赤い光を放っているかのような血だらけの死体と、数匹の鼠魚を敢えて意識の外に追い出すと、三人はようやく前方に見えてきた　大きなガラス張りの両開き扉だけを瞳に捕らえた。

「助けてくれ！」

大助が扉の向こう側に見える数十人の紺色の軍服を着た男たちに向かつて救いを求める。男たちは素早くその声に気づき、大助らを見つめた。だが、それだけで全く何かの行動に入ろうとはしない。

「おい、何してんだテメーら、扉を開けるよ！」

悠樹は扉の前まで来ると力一杯それを引きながら叫んだ。

「つて、開かねえ！？」

しかし幾ら力を込めようと全く扉はビクともしなかった。

「おい何で開けねえ？　俺らを見殺しにする気か！？」

血走った目で扉の向こうに居る男たちを睨む悠樹。それにも関わらず、男たちはいやに落ち着いた声でこう言った。

「この扉は内側、つまり水憐島の中から電子ロックされている。特殊な強化ガラスだし、開けることは不可能だ。他の出口を探すんだな」

「な、何言ってるんだ？　それでもあんたら警察か！？」

自分のことなどどうでもいいと言うような男たちの態度に、敏は我が目を疑った。

「悠樹、敏、来たぞ！」

背後から迫り来る先ほどの魚人と、逃げている途中に無視してきた他の魚人や鼠魚の集団が広場に溢れてくる。

「おい、開けろつて！」

悠樹は扉をバンバンと強く叩きながら大声で叫んだ。しかし外の男たちは興味深そうに自分たちと魚人を見るだけで、全く動こうとはしない。まるでこれからサーカスのショーが始まるのを待っているかのような表情だ。

「……　仕方が無い。父さん、兄貴。こっちだ！」

敏は生き残るために素早く頭を切り替え、歯を噛み締めながら出入り口付近の階段を上りだした。

「くそっ！」

悠樹と大助も仕方が無くそれに続く。

何でこんなことになった？ 何が起きているんだ？

悠樹はあまりに日常とかけ離れた今の状況に絶望感と驚き、そして 僅かに心のどこかでスリルを感じながら、敏の背中を追い階段を駆け上っていった。

その階段の壁にはポツンと看板が掛かっていたが、焦っている三人の目には何一つ入らなかった。例えば目に入っただとしても何かが変わるわけでは無いのだが、少なくとも心の準備くらいは出来ただろう。残酷な運命が待ち受けているという事実に対する準備を。

誰も居なくなつた階段で、その古い看板は不気味に笑っていた。その身に書かれた文字を見せびらかせながら。

この先、鮫のショー用大型屋外水槽。

<第二章>光赫の水牢（後書き）

どうでもいいかもしれませんが、尋獄2からの第二章の題名は元々副題になる予定だったものです。

尋獄2 修羅の園

尋獄E1 光赫の水牢「じつかくのすいろう」

尋獄E2 玄衣の踊り手

って感じで。

ですが、何か日本名がズラーと続いているのは読みにくいし、かつこ悪いと思ったので、あえて今の形を取りました。

今の副題は実は全てパソコン用語が入っています。これは、人間の集団を一つのネットワークとみなし、感染をコンピューターウイルスに例えて思いつきました。

BLOCK DOMAINは普通に黒い領域という意味ですが、他の3つは分かり難いと思うので説明します。

尋獄2（SURGE GARDEN）は断絶された園という意味で、尋獄E1（DEGAUSS JAIL）は地磁気の影響を取り省く牢獄。尋獄E2は血の記憶装置という意味です。

かなりこじつけですが、僕的には気に入っているのでご理解下さい。さて、次の更新は尋獄E2になります。基本的にE1とE2を交互に更新していくので一個一個の更新はかなり遅くなってしまうかも知れませんが、どうか飽きずに見ていただけると嬉しいです。

それではまた次回……。

<第三章>水中の悪夢

<第三章>水中の悪夢

水憐島総合管理室。

扇状に並んだ無数のPCやその前に座っている職員を見ながら、柳は戦国時代の武将のような切羽詰った表情で必死に電話をかけていた。

「ええ……それが、連絡がつかないんです。……はい。……はい。私どももずっと探しているのですが……ええ、なるべく努力致します。はい、それでは……」

本部との電話を切ると、柳は疲れたようにドカッと椅子に座り込んだ。横に立っていた骸骨のような細長い男性職員が、その様子を心配そうに見る。

「まだ館長は見つからないの？」

柳は魔女鼻に垂れた汗を袖で拭いながら、その職員に尋ねた。

「監視カメラなどはフルに使っているのですが、どこにも姿が無いんです。まさかとは思いますが、既に鼠魚に殺されたか、この水憐島から出たかどうかの可能性も有ります」

「館長か鼠魚ごときに殺されるわけはないでしょ。それにあれを置いてここから離れるとも思えない。きっとまだこの島のどこかに居るわ。水族館エリア以外の場所も探してみた？」

「地下の採掘ドームや実験施設まで細かく見てみましたが、やはり目撃はされていません。勿論職員用エリアや浄水施設もです」

「だとしたら 可能性は一つしか無いわ」

「どこですか？」

骸骨顔の男は不思議そうに聞いた。

「カメラの無い部屋、館長の私室よ。あそこしか考えられない。すぐに水憐島に入った本部のメンバーに繋いで。そいつらに館長の保護をさせるわ」

「分かりました。直ちに手配^{ただ}いたします」

骸骨顔の男は一礼すると素早く自分の机へと駆けて行った。

「館長の気を害さなきゃいいけど……」

その後姿を見ながら、柳はぼそりと呟いた。

誰にも聞こえないような小さな声で。

「急げ、急げ、急げえー！」

洪水のような汗を撒き散らしながら大助が叫んだ。その横を悠樹と敏も必死になって追走している。

水憐島二階のこの廊下は、最上階だけあり他の階よりも日の光が多く入り、殆ど水槽などが無い。中央は吹き抜けになっており、一階の入口前広場を見渡せような構造だ。だから直ぐ後ろに迫ってくる無数の魚人や鼠魚の姿をはつきりと目視することが出来た。

「あそこだ、あそこに走り込めっ！」

目の前、丁度吹き抜けの北側に見えてきた両開きの大扉に向かって、大助は指を指した。

魚人に倒されたのか看板のようなものが地面に転がっていることから考えると、普段は何らかの出し物がある場所らしい。だが、死と隣り合わせの恐怖に緊張し、余裕の無い三人にはその看板の文字

を見る暇など無かった。

大助、悠樹、敏は甲子園の決勝九回裏に逆転ホームインするような勢いと激しさで、一気にその扉の向こう側へ踏み込んだ。

「扉を閉めるんだ！」

荒い意思使いのまま大助が言葉を絞り出す。

それと同時に、悠樹と敏がシンクロしているかのようなピツタリの動きで扉を閉めた。

「敏、そいつを取れ！」

悠樹が扉を背中を押さえたまま、敏の横にある整列用のポールを顎で示した。

勿論敏は直ぐにそれを手渡した。

ガンッ！

そのほぼ直後、大きな音を響かせ扉が激しく揺れた。魚人たちが扉に体当たりを食らわせたのだ。

「あ、兄貴　早くポールを！」

扉を押さえながら、敏がかなりてんぱった様子で言う。

悠樹は急いでポールを二つの取手の間に通し、扉を開かないように固定した。

ガンッ、ガンッ、ガンッ……

大音響で不快な音を演奏しているのも、どうやら扉を開ける事は不可能のようだ。魚人たちがこちら側へ来る事は無かった。

「はあっ、はあっ……はあ……」

「ふう　これで少しは休めるな」

大きく深呼吸をしている敏の姿を見ながら、不自然なほど落ち着いたあっけらかんとした態度で悠樹が呟いた。

表情からは分からないが、まるでこの状況を楽しんでいるかのような声だ。

「此処もいつまで持つか分からない。今のうちに他に出口が無いか探すぞ」

大助は悠樹の異常さに気づいていたが、あえてそれを無視し二人

に声をかけた。

この場所はまるで小さな競輪場のようだった。

今三人が立つてる扉から見て扇状に客席のようなものが広がり、その真正面には大きなプールのようなものがある。その中には水が引いてあったものの、生き物の姿は見えなかった。

「イルカのショーとかで使われる場所みたいだな」

悠樹は周囲を一望しながらそう感想を漏らした。

「はぁ……これで兄貴も分かっただろ？ 出歩くのは危険だ。どこか安全な場所ですつとしていよう」

敏はもうこんな目に会うのは御免だとも言つのように重い息を吐いた。

「まだそんな事言つてんのかよ。さっきの連中を見ただろ？ 助けが来るならとつくに来ていてもおかしくないはずだ。俺たちは見捨てられたんだよ。自分たちで脱出するしかない」

「出口が開かないのにどうやって脱出するんだよ？ 今度こそ死ぬぞ！」

「何とかなる」

何故か悠樹は自信たつぷりにそう言つた。それを見た敏は諦めたように頭を抱える。

「元はと言えば、兄貴がチケットなんか送つてくるからこんな変な事件に巻き込まれたんだ。こんなことなら……あのチケットを受け取るんじゃなかった……」

「何だよ、俺の所為か？」

この言葉に力チンときた悠樹は、怒りの籠つた目を敏に向けた。

「お前ら止めろ、ケンカなんかしている場合じゃないだろ？」

いつの間にか最前列の椅子付近まで行っていた大助が、見かねたように呆れ顔で二人を振り返つた。

「うるせーよ！ そもそも俺がこんな所で働く事になったのも、話をややこしくしたのも全部親父が原因だろ？ 親父が母さんを殺したりしなければ、俺も、敏も、こんな場所には居なかったんだ！」

「おい、いい加減にしろよ！ 何でいつも父さんの所為にする？

兄さんだつて本当は分かつてるだろ。母さんは心の病気だつた。どうしようもなかったんだ。父さんは悪くない」

「いや、親父の所為だ！ 親父が酒に溺れてなければ 親父がもっと親身になつて母さんの事を見ていたら、あんな事にはならなかった。敏、お前だつて知つているだろ？ あの時の母さんの様子を…… 親父が母さんを自殺に追い込んだんだ！」

「兄貴っ！」

敏は悠樹を扉横の壁に勢い良く押し付けた。

「いつまで子供みたいな事言つてるんだ！ 兄貴は卑怯で臆病だよ。父さんの所為にすれば自分の力の無さを正当化出来る。あの時俺たち二人の目の前で死んだ母さんの悲しみから逃れられるんだろ？」

「俺が卑怯だと！？」

悠樹は敏の首の裾を驚掴みにした。丁度腕をクロスさせてお互いの首に手を置いているような格好だ。

「違うのか？」

敏は馬鹿にするような声で悠樹に尋ねた。

その瞬間、悠樹の眉間の皺が深く刻まれ周囲の空気が一気に寒々となる。まさに一触即発の雰囲気だ。

「おい、いい加減にしないか！」

このままでは殴りあいになりそうだったので、大助は二人の方へ行こうとプールを背にし、体を反転させようとした。

だがその時、突如耳障りな声が辺りに鳴り響いた。

「チイイイイイイイー！」

「な、何だと！？」

思わず大助はどきもを抜かした。

津波のような水しぶきを撒き散らしながら、プールから一体の魚人が飛び出してきたのだ。先ほど大助が覗き込んだ時には確かにプールには何の生き物の姿も無かった。一体どこから現れたと言うのだろうか。

「父さん！」

大助の居る客席の最前列付近へ駆け寄ろうとした敏だったが、それは既に手遅れだった。魚人は大助の体を掴むと、抱きかかえるようにしてプールの中に飛び落ちたのだ。

「バシャンッ」と豪快な水の爆音を轟かせ、大助の姿は瞬く間に二人の視界から消えた。

あの魚人みたいな体……！　まずい、水中に引き込まれたら父さんに勝ち目は無い！

その様子を見て敏は顔面を蒼白にした。

「くそ、あの馬鹿親父！」

突然耳横からそんな声が聞こえた。物凄い速さで何かが敏の肩をかすめ走り抜けていく。

悠樹だ。

「止める兄さん！　兄さんまで殺されるぞ！」

本能的に、無意識の中に、気がついたら敏はそう叫んでいた。

しかし悠樹は敏の言葉には全く構わず、警備員用の上着を脱ぎ捨てると、何の迷いも無く果敢にプールの中へ飛び込んでいった。

「くそっ！」

敏は齒軋りしつつも、プールの淵まで急いで身を躍らせた。

このままじゃ二人とも死んで居しまう。何か無いのか……何か……！？

そのままプールの周囲を探す。だが、そう簡単に起死回生の道具が見つかるはずも無い。パニックを起こしてしまっている事もあり、敏は何も見つけることが出来なかった。

この魚め！　離せっ！

大助は水中で必死にもがいたが、水を得た魚状態の魚人の力と、服が水を吸って体の重さを数倍にしたこともあり、ほぼその抵抗の効果は無かった。実にあっさりとプールの底にまで連れてこられてしまう。

「チュウアアアアアッ！」

全く物音の無い水の中で魚人の嬉しそうな歡喜に満ちた声だけが伝わってくる。大助は眼前に迫る魚人の鰓えらのある口を、恐怖に怯えた目で見つめた。

腕が、足が、水の重みで上手く動かない。

耳や鼻が冷たい壁に塞がれ感覚を遮断される。

視界すらもおぼろげではつきりとはしない。

今の太助の状態を例えれば、水と言う名の拘束を掛けられたただの新鮮なエサとしか言えないだろう。

死を目前にして太助を深い後悔が襲った。

妻を救ってやれなかった後悔。

悠樹を傷つけてしまった後悔。

敏に苦勞を掛けてしまった後悔。

考えてもキリが無いほどの無数の後悔が、心臓を針金で締め付けたかのようにきりきりと心を責める。

綾……！

心と体の苦しみに悶えながらも、太助は先立った妻の顔を思い浮かべた。

五年前。

太助は長年就職していた会社を首になり、酒びたりの生活を送っていた。

その荒れぶりは凄まじく、妻である綾や息子の悠樹と敏に暴力を振ることは日常茶飯事だった。その時の傷は、今でも悠樹や敏の体にはつきりと残っている。

この日もいつものように安い日本酒の瓶を片手にぶら下げ、覚束ない足取りで家に向かっていた。もはや日常となったパチンコからのご帰還だ。

「クソツたれえい！」

会社への不満、上司への不満、家族への不満……まるで愚痴に取り付かれたかのように、大助は毎日こうして独り言の文句を言っていた。

しばらく歩いていると、目の前にごく平均的な日本家屋の一軒家が見えてくる。

「おい、帰ったぞ！ 出迎えしろ！」

大助はその扉を潜るとすぐに、酒臭い口でこう叫んだ。

いつもならば嫌々ながらも怯えた表情で綾や敏が迎えに来るはずだ。だが、今日に限っては何故か誰一人玄関に姿を見せなかった。

「おい、帰ったって言ってるだろ？」

赤い顔で大助は壁を叩いた。しかしそれでも誰も来る気配はない。

「は、何だ？ 俺を置いて逃げたのか？」

持っていた空の瓶を正面の廊下に憎憎しげに投げつけ、憤った表情でズンズンと廊下を進んでいく。

途中で居間や台所を通りすぎたが、やはりどこにも人の気配はない。それが一層大助の気分を害した。

「へん、勝手にしろ ん？」

汚く濁ったような目がある場所で止まった。自分と綾の寝室だ。

普段は閉じている事の多いその部屋が何故か僅かな隙間を作って開いていた。

ここに隠れてんのか？

訝しがりながらもその扉を勢い良く開ける。だが、部屋の中は真っ暗で何一つ肉眼では状況が分からなかった。

「ウイ……」

心なしか僅かに鉄臭い臭いがしたものの、気にせず意味の無い声を漏らしながら、大助は壁を叩くように部屋の電気をつけた。

途端にパツと明るくなる視界。

すると大助の目に奇妙な光景が入ってきた。

真っ赤なペンキを塗りたくったように赤く染まっている自分と妻のベット。その前には敏と悠樹が足の壊れた人形のように膝をついている。

「何だデメーら？ 俺の寢床で何してやがる」

大助は一番近くに居た敏の背を蹴りつけ、床に這い蹲らせた。

しかし敏は黙ったままだ。じつと心を失ってしまったかのように一点を見つめている。

「ん？ うごっ！？」

大助は敏の様子を変に思い、距離を詰めようとしたところ、何かぬるつとしたものに足を滑らし思いつ切りベットに倒れてしまった。丁度顔面から飛び込んだ形だ。

アルコールの所為でふにやけた顔は、ベット中に広がっていた赤いペンキのような液体で真っ赤になった。

「どあぁっ！？ くそっ、何だこりゃ？」

顔を拭くため引いてあったシートをベットから剥ぎ取る。

すると目の前に、何故かベット以上に真っ赤に染まった妻の綾が寝ていた。その心臓には深々と包丁が突き立てられており、そこから血の池のように赤い液体が広がっている。

この状況を見て、霞がかかっていた頭は一気に酔いが冷めた。

「あつ 綾！？ な、何で！？」

驚きと悲しさが、流れ込むように頭の中を支配始める。

「誰がこんなことを……！？」

大助は問い詰めるような顔で背後の二人を振り返った。

悠樹と敏はそれでも先ほどと全く変わらない様子で、放心したようにじつと綾の亡骸だけを見つめていた。

「お前たちがやったのか！」

悲しみも冷めないままに大助の頭は火に包まれた。

二人が何も答えない事を肯定の意思表示だとも判断したのか、

顔面に迷路のような血管を走らせながら、拳を近くの敏に叩きつける。

敏はまるで体の中に綿が詰まっていたと錯覚されそうな勢いであつさりと壁に体を打ち付けた。しかしそれでもその表情は何の変化もない。

大助は再び殴りかかろうとした。

「止めろ！」

だが、敏の様子を見て我を取り戻した悠樹が、直前でその腕を掴み取った。

「……俺たちがやったんじゃない。母さんは……自分で……こうしたんだ」

目の下に熱いものを溜めながら言う。

「自分でだと？ そんなわけがあるか！」

「本当だ。警察が来れば、分かる……」

「そんな馬鹿な……！ 何で綾がそんな事……」

夢から覚めることを期待しているのか、大助は頭を左右に振った。
「お前ら……何で止めなかった？ 何で見殺しにした？」

そのまま気持ちを発散させるために、怒りの矛先を悠樹に向ける。
「止める暇なんか無かった。話があるって言われて行ったら、いきなり意味わかんないこと話し出して……気づいたらもう包丁を握ってたんだよ」

「言いわけをするな！」

大助はいつものように悠樹の顔を殴ろうとした。

だが、悠樹はそれを自分の腕で弾いた。

「こんな時にまで暴力か？ なんで……母さんの事を考えないんだ。あんたは、いつもそうだ。自分、自分、自分……自分の事しか考えてない」

「煩い、お前に俺の何が分かる！」

先ほどとは逆の拳を打ち出す大助。悠樹はその手も軽く払い退けた。

「このくそ親父……！ 母さんはあんたが殺したんだ。あんたがもつと母さんのことを考えていれば」

「俺の所為だつていうのか？」

「あんたの所為以外の何の理由があつて、母さんがこんな目に会わなきゃ行けないんだ！」

悠樹はこれまで生まれてから十七年間、一度も暴力を振ったことがなかった。ずっと優等生、絵に描いたような真面目な好青年だった。例え幾ら大助から暴力を受けようとも、幾ら蔑まされようとも、決して父を恨まず、会社を首になった所為だと割り切っていた。いずれ元のいい父に戻ると信じていた。

だが、母が死んだこの状況で相も変わらず、自分たちに当たろうとする 母のことを考えず自分のことしか考えない大助の態度に、悠樹の中で何かのスイッチが切れた。何かの一線を越えた。

大助の目の前で悠樹の手の平が鉄球のように固まっていく。そして再び大助が腕を突き出そうとした直後、それは打ち出された。

「ごばあっ！？」

大助は腹を抱えて腰を崩した。悠樹の掌打がめり込んだからだ。

「お前……親に向かつて……！」

「あんたなんか親じゃない。あんたなんか……」

悠樹は底なし沼のような真っ黒な目を血走らせ、何度もそう呟いた。

沖田綾の葬式後、悠樹の姿を見るものは居なくなった。

敏にはそれが直ぐに、父とのあの時の争いが原因だと分かった。

「兄貴……」

母の墓の前で遠くを見つめるように呟く。

悠樹が居なくなつてから、大助は酒やタバコ、遊びを絶ち、まるで人が変わったように働き出した。

最初こそ敏も長続きするとは思っていなかったが、意外にもその努力はもう一年以上も続いている。少し前までは自分も悠樹のように家を出ようかと考えていた。だが、この大助の頑張りとは決意、意識の変化を見て敏は踏みとどまった。今ここで父を一人にしておけないと思つたから。

それから敏は仕事の片手間に何時も悠樹を探した。戻つてきて欲しい。今の太助を見て欲しいと考えて。

その気持ちは大助もおなじだった。自分勝手だとは分かっている。都合がよすぎる事も分かっている。でも、それでも大助は悠樹に会いたいと思つていた。謝りたいと思つていた。

自分のしてしまった過ちについて。

親の責任を果たせなかった罪について。

だから敏が悠樹からチケットを送られたと聞いたときは心底嬉しかった。

階層状に並んだ無数の歯が視界一杯に広がる。

水中に居るこの状態で嗅覚は機能を持たないはずなのだが、大助は鼻一杯に血と肉と死の臭いを嗅ぎ取ることが出来た。

生命の危機、生まれ持ったの生物としての本能が、そう感じさせたのかもしれない。それは鼻ではなく心で、細胞の奥深くに刻まれた記憶による根本的な恐怖だった。

やっと立ち直れた。

やっとまともになった。

やっと息子たちにちゃんと謝ることが出来る。

大助は今日悠樹に会うことに心配し、緊張していたが、それでもどこか懐かしさ、嬉しさを感じていた。自分と綾の身と心の結晶。大切な息子の顔を再び見ることが出来ると。

何も伝えられずに……終わるかよ。

死の刹那、大助の心は恐怖よりもただ深い後悔だけが満ちた。

ズブツ！

魚人の鋭い歯が肉を貫く。信じられないような痛みと苦しみ、断続的にリズムに乗って体中を暴れ回る。先ほどまでは魚人の顔しか見えなかった視界は、今度は瞬く間に真っ赤な霧に覆われた。

さよなら……悠樹、敏……

ゆつくりと、大助は目を瞑った。

「

」！

何かが聞こえた。

酸素と水素の絡み合った液体の幕が妨害するため、それが一体何の音なのかは分からないが、確かに何かが聞こえた。

声？

事実なのか、幻聴なのか、はたまた自分の望みだったのか、人の声のような音だった。

「え？」

突如、魚人の体が自分から遠ざかる。と、同時に目の前に一人の男の顔が浮かび上がった。

「親父いっつー！」

悠樹は細胞一つ一つをフルに稼働させ、その力をただ一点、足先へと溜め、一気に魚人の首に蹴りという名の矢を突き刺した。幾ら水中と言えども、これほど接近した状態で押されれば流石に体は大きく動かされる。

魚人はもぎ取られるように大助の体から離れ、プールの水槽側面に激突した。

驚いたような顔で自分を見つめる大助。

「早く上がるぞ、水ん中じゃ勝てっこねえ！」

悠樹は聞こえないと分かっているのにそう呟き、大助の体を上に向かって加速させた。意思は通じたのか大助も素直に従う。

それを見送ると、今度は自分もと悠樹は両腕を左右に開き、足を交互に振り上昇を開始した。

「ヂュウウウオオオオオ！」

だが、あともう少しと言う所でようやく体勢を立て直し、追いつ

いてきた魚人に足を掴まれてしまった。

「離せよ！　　離せっ！」

もう片方の足で何度も魚人の頭を蹴るも、全く効果はない。

魚人は今度こそ逃がすものと、悠樹の足に歯を突きたてると、ワニの必殺技とも呼べるデスロールのような動きに入り始めた。もしこれが成功すれば、悠樹の足はもぎ取られてしまうだろう。そうなれば逃げることも戦うことも出来なくなってしまう。

だが、悠樹は冷静だった。というより全く魚人を恐れてはいなかった。逃げられないと悟った時点で悠樹は逆に魚人の体に近付き、抱きつくと同時にその首を絞めだしたのだ。勿論足はかまれたままで、悠樹が魚人に肩車してもらっているような格好だ。

「デユウアツ!？」

思わぬ獲物の攻撃に魚人は焦った。突然襲ってきた強い首への圧迫に思わず回転に入る前に悠樹の足を離してしまう。

それをいい事に体勢を立て直し、悠樹は本格的に魚人を「落とす」にかかった。

「死ねえええー！」

幾ら魚人　鰓呼吸の生物と言えども、元が人間でありしかもその鰓が頭に付いている以上、首を絞められれば息は出来なくなる。悠樹の攻撃は意外にも結構効いていた。

「お前と俺、どっちが先に息切れするか勝負だ！」

悠樹は根拠もなく自信たっぷりそう叫んだ。

「はあ、はあ、はあ……！」

「父さん、兄貴は!？」

水中から飛び出してきた大助に向かって、敏が安堵したように呼びかけた。

大助はプールの淵に身を横たえながら、息も絶え絶えに言葉を搾

り出す。

「悠樹は……はあ、まだ中に居る。早く 助けないと……」

「父さんはそこで休んで、俺が何とかするから！」

父の無事な姿を見たことで敏は辛うじて冷静さを取り戻した。もう一度、今度は慎重に周囲を見てみる。すると、先ほどは気がつかなかったが、プールを挟んで反対側にあるショー用の台に、消火器のようなものが見えた。

あれを使えば目くらましくらいにはなるかもしれない。

敏は淵づたいに反対側まで走ると、消火器を取りその栓を抜いた。「待つてろ、兄貴！」

そして意を決して走り出した。

ヤバイな……こいつ、体力あるじゃねえか。

悠樹は魚人よりも自分の方が先に空気の所要量が切れてしまったため、多少不安になっていた。これ以上は自分の意識が危ない。

仕方がない。一か八か上に上がるしかねえな。こいつも当然追っかけてくるだろうけど、そんなときはそんな時だ。

そうして突き放すように魚人の首から両腕を解き、その後頭部を蹴り飛ばすと、一気に全速力で上に上がろうとした。

こう何度も同じような事を繰り返されては流石に気が高ぶる。首を絞められていた苦しみと、先ほどから寸前の所で獲物に逃げられていることもあり、魚人は怒り狂ったような表情を浮かべ、これまでに最大の速さでくると体を反転し、瞬く間に悠樹に追いついた。「ヂュウアアアアッ！」

真っ先に悠樹の首元へと口を近づける。どうやら感染よりも殺傷本能の方が勝ったようだ。

「ヤベえっー！」

悠樹が目を瞑りかけたその時。突然周囲が白い霧に包まれた。まるで雲の中にいるかのよな不思議な光景になる。このおかげで、悠樹と魚人はお互いに相手の居場所を見失った。

チャンスだ！

この機会を逃すわけにはいかない。わけが分からなかったものの、悠樹は深く考えず、一心不乱に上を目指した。そしてようやくプールの上に濡れた頭を開放する。

「兄貴、手を！」

目の前に自分を真面目にしたような、真面目だったときの自分の顔が映る。悠樹は迷わずその手を掴んだ。

<第四章>”人魚”

<第四章>人魚 クレプシュドラ

「早く上がるんだ！」

敏が水浸しの悠樹をプールから引き上げ、喉を振るわせた。

悠樹は咳き込みながらも、その声に導かれるように水中から這い出る。

「お前ら下がれ、来たぞ！」

二人の背後、プールから少し下がった位置にいた大助が、大きく盛り上がった水面に注意し、叫んだ。

風船が割れるように水面が弾け、鰓えらのある水色の顔を見せびらかそうと魚人が飛び出す。元々醜いその顔は、重ね重ねエサを取り逃がした悔しさでさらに醜く歪んでいた。

「うおおあつ！」

相手のあまりに強い殺気に驚いた敏は、魚人が飛び出すと同時に思わず先ほど使用したばかりの消火器を掴み、それを思い切り魚人の側頭部に叩き付けた。

「ヂュウオアツ！？」

陸に上がった途端いきなり頭を強打された魚人は、何の抵抗も出ずに客席の上に体を打ちつける。

それを見た大助は一世一代のチャンスに挑む時のような鋭い、覚悟のある目つきで、悠樹が水中にいる際に用意していたゴム製のホースを、魚人の首へと素早く巻きつけ引っ張った。

「うごおおおおおおおー！」

これまでにこれほど力んだ事が無いのではないかと言っくらい腕

と肩に力を込め、足を地面に踏ん張らせる。筋肉一本一本の筋を限界まで引き締め、ホースを捻り上げる。

先ほどは水中で、しかも素手で首絞めを行っていた為若干力も締める範囲も限られたが、今度はゴム製のホース、しかも地上だ。呼吸管は限りなくゼロに近いくらい塞がれている。流石に魚人の顔も赤みを帯びてきた。

「さっきはよくもやってくれたな！」

ようやく息の落ち着いた悠樹は、大助に客席の間で拘束されたままの魚人に突っ込むと、素手でその腹を殴りだした。格闘ゲームでコンボ攻撃を行う時のような連打、連打といった攻撃だ。普通の人間に対してこれを行えばリンチと言えるのだが、今はそんな場合ではない。相手は人外でありその身体能力は人間を遥かに超える。何の武器も持っていない悠樹らにとって、生き残るにはこうするしかないかった。

「ヂュウウウアアアッ！」

何とかしてホースを振りほどこうと、体を前後左右に激しく揺らす魚人。だが、幾ら体を周囲に打ちつけようと大助は決して腕をホースから放すことは無く、悠樹の妨害もあり魚人の望みが叶うことは無かった。

「兄貴、どけ！」

敏が再び凹んだ消火器を上に掲げ、連打をしている悠樹に声をかけた。先ほどは一瞬の反射反応だったためあまり力は籠っていないかったが、今度はしっかりと「溜め」を作ってから振り下ろす必死の攻撃だ。

悠樹は横にダイブするように離れる。

「くたばれ！」

それを確認すると、敏は一気に消火器を振り下ろした。

水憐島地下一階、大型円柱水槽前。一番最初にパニックが起きたこの広い場所の前に、三人の人間が平然と歩き回っていた。いつどこから鼠魚が出てもおかしくないにも関わらず、実に堂々とした態度で探索をしている。その中の一人、セミショートの今風な茶髪に、一般的な男性としては細長い眉と目をした若い男　友が周囲の死体を悲しげに見つめた。

「犠牲者の数はかなりのものだ。まさかイミユニティーの重要拠点であるこの水憐島で、こんな事件が起きるとは……」

それに対し、横に立っている茶髪の女性が答える。友の上司西川だ。

「水憐島はイミユニティーの拠点となってますが、殆ど横谷晶子館長の個人的な組織と言って過言は無いですからね。本部はここで何が行われているか、どういう体制を取っているのか、詳しくは知りません。本部が完全に支配していたらこんな事件なんて決して起きませんよ。恐らくテロか、事故の線が強いでしょうね」

「何で本部は水憐島にそこまで自由にさせているんですか？　他の支部ならこんな事考えられませんよ」

二人の後ろ、丁度割れた水槽の前に腰掛けていた、まだかなり若い角刈りの男が目を細めて聞く。

西川は学校の先生のように丁寧に説明を始めた。

「横谷晶子は元々、イミユニティーの幹部の一人なんです。私たちのような使い捨ての兵士とは違う完全なキャリア組み。一時期は六角行成と共に多大な功績を残し、イミユニティーに貢献していました」

「元腹心ですか。なるほど　それなら中途半端な上の人間は手を出せないでしょうね」

若い男が頷く。

「ただの腹心ではありません。イミユニティーの上流階級、生まれた時から地位が約束されていた家の出なんです。横谷家は先々代のイミユニティー総合代表の家系ですから」

「確かに権限はありそうですけど、そんなに水憐島を本部の管轄から遠ざけることが出来るんですか？」

「出来ますよ。何せ横谷晶子の父がこの水憐島を作ったのですから」
「へ？　作った？」

若い男は不思議そうな表情を浮かべた。

「あなたも知つての通り、この水憐島は当初、地下資源を汲み上げるための拠点として建設されたことになっています。しかし実は、それはただの建前です。確かに汲み上げているものはありますが、資源なんかじゃありません」

「じゃあ一体何を？」

若い男は身を乗り出して耳を傾けた。

「それは　」

「しっ！　何か聞こえたぞ、上の方からだ」

西川が続きを言う前に友が声を上げ、空気を張り詰めさせた。鷹の目のように鋭く上の階を睨んでいる。

「　見に行きましょう。実験施設から逃げ出した兵器かもしれない」
「　」

突然の友の言葉にも、西川はイミユニティーの高官としてクールに勤め、直ぐにそう言った。

先ほど倒した魚人の体を壁際に蹴飛ばすと、悠樹は水に濡れべつたりとした金髪を掻き上げ、プールを覗き込んだ。

「何してるんだ？」

その様子を奇妙に思った敏がメガネのズレた顔のまま聞く。

「いや、あの魚人何も無い所からいきなり出てきただろ。どっかに抜け道があるんじゃないかねえかと思つてさ。……ほら、やっぱりあったぜ」

悠樹はプールの端の一点を顎で示し、満足げに微笑んだ。

敏が視線を向けると、そこには蛇口のような形をした太い、大きなパイプがプール横から伸び、その先を水中に沈めていた。水を入れるための物にしては太すぎる。まるで元々魚人をこの場所に排出するために作られたような不自然な物体だ。

「あれから出てきたつて言うのか？」

「他に可能性がありそうな所はねえだろ。あれしか考えられねえ」

「……はあ、一体何がどうなってるんだか」

苦笑いするように小さく口元を歪めると、敏はズレたメガネを上 に掛けなおした。

「おい、二人ともこっちに来い」

ステージの奥、職員用の控え室らしき場所の扉から顔を覗かせ、大助が呼んだ。二人が何事かと思いながらそこに行くと、部屋の中に一体の死体があった。紺色の軍服　丁度先ほど水憐島の改札を封じていた連中と同じ服装を着ている死体だ。

「こいつの懷に二本のナイフが入ってた。お前から使え」

そういつて大助は何の特徴もない普通の大型ナイフを悠樹と敏に渡した。

「あと、こんな物も持ってた。お前……どういうことか分かるか？」

悠樹が水憐島に詳しいと思い、死体から取った日記のようなものを手渡す。悠樹はそれを胡散臭そうに流し読みした。

1 / 19

ここ数ヶ月、全く館長の姿を見ることが無くなった。俺はあの美しさに憧れてこの水憐島所属を選んだのに、これでは意味が無い。指令も殆ど柳管理長が取るようになった。どうしたんだろう？

1 / 22

今日柳管理長から館長が病気だと聞かされた。何でもかなり重症らしい。もう人前に出ることも出来ないそうだ。まだ三十という若さなのに可哀想だな。どうにかして治してやりたいが……

2 / 10

最近ディエス・イレの動きが活発化しているらしい。どうやら奴らそろそろ一勝負仕掛ける腹のようだ。俺としてはイミュニティーに奴等が抵抗するなんて、象に蟻が挑むようなもんだと思うのだが。もしこの水憐島にすれば俺がこの手であっさりとひねり潰してやる。奴らはきつと頭のだ真ん中に尻の穴が出来て泣き叫ぶことになるさ。

2 / 15

今日はちよつとした騒ぎになった。館長の夫である横谷操のくそやる……いや、操さんが突如行方不明になった。この水憐島から出て行く姿を誰も見ていないのに消えたとは思議な話だ。館長の部屋に籠ってるのか？ もしそうだったら俺が引きずり出してやる！
夢の中で。

2 / 19

操のクス……操さんが消えてから館長の弟の横谷広くんの様子がおかしくなった。話しかけても妙に他所他所しいし、まるで何かに怯えているかのようだ。他の人間に対してならまだしもこの俺にそんな態度を取るとは……未来の兄として後でしっかりと話を聞いてやるう。

2 / 23

最近不祥事やミス続きで、本部から柳管理長の元に何度も脅しの電話が入るようになった。館長の姿が見えないという噂が届いたのか、どうやら本部は俺たち水憐島の人間がディエス・イレと手を組んで反乱を起こすとも考えているらしい。全く馬鹿馬鹿しい考えだぜ。そんな事して一体俺たちに何の得がある？ 館長と結婚できるか？

出来ないだろ。

3 / 1

イミユニティー本部が黒服に横谷館長の暗殺を依頼したとの情報が入った。真偽は不明だが、我々館長の部下としては見逃すことは出来ない。これから信用できる者と共に調べにかかる。

3 / 2

今日ここで原因不明のバイオハザードが発生した。俺も……傷を受けてそう長くは持たない。恐らくもうすぐ死ぬだろう。最後にやっぱり一目、館長のあの美しい姿を見たかった。さよなら館長……あの世で再会しよう。俺ずっと待ってるから……。

「どうだ？」

大助はそのガテン系の古風な顔を命一杯近付け、真面目な顔で聞いた。

「どうだつて……この日記から分かることと言えば、こいつが館長のストーカーって事だけだろ？ それ以外に何が分かるんだ？」

悠樹は面倒くさそうに答えた。

「……そうか」

黙りこむ大助。

「父さん？ どうしたんだ？」

父の様子がおかしいので、敏は心配するように大助の肩に手を置いた。

「いや、このイミューニティーとか言う名前……」

「ああ、聞いたことがないね。文面から考えると、水憐島を含んだ政府の組織みたいだけど この死体やさつき改札の前に居た連中の事かな？」

「いや、そうじゃ無くて……俺はこの名前をずっと前に聞いた事があるんだ」

「へ？ どこで？」

敏は意外そうな顔をした。悠樹も興味を持ったのか顔を大助の方へ向ける。

「母さんの仕事していた会社だよ」

大助は一気に、息を吐き出すようにそう言い放った。

「つ てめえーふざけんなよ！ そんなわけがあるか！ なんて母さんがあんな怪しいやつらと仲間にならなくちゃいけねえーんだ！？」

「信じたくない気持ちは分かる。でも俺は確かに何度もこの名前を見た。間違いない」

「もしかして……母さんが死んだのって……」

敏がハツとしたように顔を上に向け、言葉を漏らす。

「母さんが死んだのは親父の所為だ！」

しかしそれを言い切る前に、悠樹が核爆弾が炸裂したような大声で怒鳴った。

沈黙が三人の間に流れる。氷河期さながらの冷たい空気が控え室の中に満たされた。

「と、とにかくあまりこの日記は今関係なさそうだから、深くは考えないで逃げよう。もう大分この場所に居るし」

場の雰囲気を変えるようにワザと明るい声をだし、敏は職員用の裏口の扉に手を掛けた。残り二人もお互い視線が合わないように顔を背けながらその後が続いた。

「っ？」

急に心臓の音が高鳴り、悠樹と敏は立ち止まった。そしてまさに今、誰かを殺そうと狙っているかのように呼吸が静かになり、体中から強烈な、押さえ切れないほどの殺意が溢れてくる。

「兄貴！ くそ、しばらく離れてたから無いと思ったのに……！」

敏はその感覚を感じた途端、キツと悠樹を一瞥した。しかし悠樹は若干戸惑った様子で敏の茶色の短髪の頭を見返す。

「こ、これは俺じゃないぞ！？ お前の感覚じゃ無いのか？」

「何で俺がこんな殺意を出すんだよ、兄貴だろ？」

「俺じゃ無い！ 俺だったらこんな、気配を隠すような感じになるわけねえだろ。隣にいるんだから」

「じゃ、じゃあ一体この感覚は？」

「どうした？」

いつまでも裏口の向こう側に来ようとはしない二人を不思議がり、大助は扉を左手で押さえたまま振り返った。背後の光が強いためか、嫌にその姿がはっきりと見える。

「またあの感覚か？ 今更気にするんじゃないだろ。久しぶりで驚いたのか？」

そのまま二人の変化がどういうものなのか、前から知っていたよ

うに溜息を吐く。

大助はもう何度もこれと同じような光景を目にしていた。

悠樹と敏は生まれつき、お互いの痛みや感情、感触、状態を常に知ることが出来た。双子独特の同調作用のようなものがそうさせているらしい。なぜそんな風に感じるのかは医者でも分からず、二人はテレパシーのようなものだと思っていた。悠樹が家出してから全く感じることは無かったものの、どうやら再会した影響でこの感覚がぶり返してしまったらようだ。だが、今回のように自分たち意外の誰かの感覚を感じたことは初めてだった。

「何かが……近くに隠れてるんだ。もしかしたら、そいつの感覚がもしれない」

悠樹はナイフの柄に指をガッチリと絡ませながら、半信半疑の表情でそう言った。

「何か？ 兄貴意外の存在の感覚を感じたのなんて初めてだ。」

「……一体何だつて言うんだ？」

「知るか！ とにかくこっから離れようぜ。嫌な予感がする」

珍しく悠樹は弱気に言った。

控え椅子から裏口を抜けた先は、大きな立方体の水槽のある場所だった。百平方メートル近くはありそうな部屋のほぼ全てを水槽が満たし、その上に控え室から続く細い歩道が十字路型の道橋のように掛けられ、次の部屋や部屋の隅にある物置のようなスペースに繋

がつている。恐らくショーをしていない時の鮫用の控え室のようなもののだろう。

殺したい、殺したい、殺したい、殺したい、殺したい……
鬼気迫る感覚が、この場所に入っですぐに体に流れこんでくる。自分たちを狙っている何かの身体感覚を、悠樹と敏が共感しているのだ。

「あ、兄貴。これマジでヤバイ、早く行こう」

先ほどもよりも強くなった殺意を感じ、敏は今すぐ走り出したいような衝動に駆られた。

「これ見ろよ。どうなっでんだ？」

感覚による強制的な恐怖に負けパニック気味になっている敏を無視し、悠樹は細い道の上から下の水槽を覗きこんだまま目を見開いた。

「鮫が、五匹とも死んでいる？」

水槽の下を見ようとしない敏に代わって、大助が目の前の状況を口に出す。水槽の中は赤く染まり、僅かに見える下にも鮫の死体らしき無数の肉片が沈んでいた。

「こんな事を出来る生き物が居るのか？」

鮫は海の王者と言っても過言ではない。しかもここに居た鮫は鮫の中でも最強クラスのホオジロザメだ。五匹も居たその王者をここまでバラバラに分解できる生き物なんて、ありえる事ではなかった。「きつとさつきから感じてるのはこれをやった奴だな。鉢合わせしたら間違いなく殺されるぞ」

まったく物怖じすることなく平然と言っでける悠樹。もはや頭のネジがどこか緩んでいるのか、既に精神が火星の住人になっているのかと思えない。

「だから逃げようって言っでるだろ！俺は先に行くぞ！」

殺されると言いながら全く逃げる素振りもなく、悠樹は面白そうに血の池地獄のような、暗然とした水槽の奥深くを注視している。そんな兄にしびれを切らし、敏は憤慨した様子で十字路型通路を一

黄金色の魚類を思わせる尾びれ。その姿はまさに人魚そのものだった。勿論、山姥やまんばのように広がった長い深緑色の髪と、細く華奢な腕の指先から伸びている、一メートルはありそうな五本の鋭い爪、そしてその脇下からスレンダーな腰に渡って広がっているモモンガのような膜を無視しての意見だが。

> i 1 6 3 1 — 2 2 4 <

一般的に人魚は上半身が完全に人間で、下半身だけが魚というイメージがある。しかし、今敏の前に立っている人魚は全身魚人と同じような水色だった。その肌の色を見ながら、敏は場違いにも小学生の頃に悠樹とした会話を思い出す。

「俺……人魚って懂れるよ。本当に居るなら会って見たい。きっと可愛いんだろぅな」

教室の隅、自分の椅子に腰掛けながら、敏は呆けるように言った。しかしそれを聞いた悠樹は異常なほど覚めた目つきで振り返った。敏の前の席に腰掛けたまま無表情で言い放つ。

「人魚？ あれ ただの化け物じゃん」

敏は目の前の人魚を引きつった顔で見つめながら、そのどうでもいい過去の悠樹の言葉に今更ながら納得した。

「……本当に化け物だな……！」

瞬間、人魚の尾びれに体を強打され、勢い良く細い通路から下の水槽へ転落した。

「敏っ、くそ！」

大助は息子が人魚の独壇場とも言える水槽、食料で言えば鍋の上のような場所に落とされた姿を目にし、慌てて左に走り出した。どうやら左端のスペースに置いてある長い竿のようなもので敏を救出する気らしい。

「親父、俺があの人魚の注意を反らす。その間に敏を拾ってくれ！」
一人だけ冷静だった悠樹は、血相を変えて十字路を左端に駆けて行く大助に呼びかけた。そして手に持ったナイフを眼前に構え、普段だらけきっていた目を大きく見開き、口を間一門に結び、僅かに笑みを浮かべながら数メートル先の人魚を睨み付けた。

「シヨヨオオオオオ……」

人魚はたった一人自分の前に残った悠樹を一瞥すると、足の無い体にも関わらず、銃弾のような速度で飛び出した。

咄嗟に悠樹は右側の通路へと転がった。十字路の丁度ど真ん中に陣取っていたのが幸いし、何とか攻撃をギリギリで避ける。もし少しでも後ろや前に居れば、避けた途端水の中に落ち、直ぐに死を迎えることになっていただろう。

「ん？」

左足に僅かな痛みを感じ、悠樹は素早く視線をそこに走らせた。左足は先ほど魚人に噛まれた傷があったが、それとは別に何か鋭い物で切ったような細長い線が浮かび、真っ赤な雫をつたわらせていた。

避けきれなかった？

傷は浅いものの、あの距離で傷を負ったという事実、人魚の素早い動きと攻撃範囲の広さに舌打ちする。どうやらまともに戦って勝つのは厳しそうだ。

チラツと大助の方を向くと、まだ敏を引き上げている最中だった。

「俺、今度こそ死んだかもな」

まるで他人事のように一人呟くと、十字路のど真ん中に立ち、体勢を立て直した人魚と視線を交差させた。もう逃げられる場所はない。あの攻撃範囲では後ろに下がっても無事に避けられるとは考えられないし、横に飛んでも水の中に落ち、自分から罠に掛かるような格好になってしまうだろう。

「げほっ、げほっ …… 父さん、兄貴が……！」

大助の太い腕を掴み、室内左端の半円柱状のスペースに上がると、

敏は直ぐに悠樹のピンチを目撃した。

「　　敏、あいつを何とか水槽に落としてくれ、俺に考えがある」
「考え？」

「いいから行け！」

大助は敏を通路に押し出すと、何故か身を自分から水中に躍らせた。激しい水音が響く。

「と、父さん！？　……くそっ！」

「乱心したのか？」と敏はあせったが、今更引き戻すことは出来ない。仕方がなく竿を抱えて、人魚の背後へと走った。

「この野郎、嬉しそうにしゃがって！」

人魚の表情は全く変わっていないが、共感感覚を持つ悠樹は相手の感情の動きや体の動悸をはっきりと感じ、悔しそうに歯ぎしりした。

「シヨヨヨヨオオオオオー！」

人魚は長い十本の爪を同時に振り上げると、威嚇するように悠樹の前に突き出した。そしてそのまま空気を切り裂くような速さで突撃してくる。この攻撃の早さに、悠樹はなす術が無かった。

肉が裂け肋骨は砕かれ、血が弾け飛ぶ。背中からは串刺しにされた証を示す十本の爪が高々と天に向かってそそり立つ。そんな悲惨な状態になるはずだった。そう　もう少しの所で。

「兄貴、こっちだっ！」

敏の声が聞こえ、悠樹は人魚の攻撃が命中する前に反射的に横に飛びのいた。間一髪ので人魚の攻撃は外れ、自分が立っていた地面を深く抉り削る。悠樹は水中に落ちることを覚悟したが、何故かまだ体の大部分は水面の上に浮かんでいた。怪訝に思い下を見ると二本の竿のようなものが橋のように十字路のと三角形を作り、自分の体を支えている。敏が入り口付近の地面と右端のスペースに架けたらしい。

「ナイス！」

悠樹は敏の機転に感謝すると、そのまま体をゴロゴロとローリン

グさせ、入り口の方へと移動した。しかしあともう少しと言う所で、人魚が爪を竿に叩きつけた。その所為で悠樹は、入口前の目と鼻の先で水中に沈んでしまった。間を置かず人魚は敏に向かって跳躍し、その右腕を突き出す。

「うわぁあああつ!？」

敏は目を瞑り両手を前に交差させた。肩、太もも、脛をそれぞれ浅く爪に貫かれる。体を突き抜けなかったのは掲げた手に持っていたナイフが爪先を僅かに反らして防いだおかげだろう。しかし、勢いは当然殺せず、血を漏らしながら敏は悠樹とは十字路を挟んで反対側の水中に落ちてしまった。これで三人全員が水槽の中に入ってしまったことになる。

そのことを分かっているのか、人魚は口を大きく開き、爪を左右に伸ばして勝利の声を発した。

「シヨヨヨヨオオオオオー!」

そして再び獲物を地上に上げないようにと、十字路の中心を一心不乱に攻撃し始める。

「あいつ、まさかつ!？」

敏は人魚の考えを察知し、顔を青くした。

ドゴゴゴと激しい騒音を撒き散らし、十字路が崩れ落ちる。連続で繰り出された爪の攻撃で壊されてしまったのだ。これで敏たちはますます不利になってしまった。

「ぶはぁー!」

大助が水中から顔を出した。

「親父、一体どこに行つてやがった!？」

悠樹がクロールで近寄りイラだった声で尋ねる。しかし大助はその質問には答えず、開口一番こう叫んだ。

「直ぐに水中から出る、通路に上るんだ!」

「はぁ!? 良く見てみる! どこに通路があるんだよ」

「な、何だこれは 通路が沈没している!？」

今初めて気がついたように大助は大いに驚いた。

「早く上れ！ どっちのスペースでもいい。死ぬぞ！」

そしてかなり焦ったような表情で怒鳴り出した。

「何だよ！」

こんな状況にも関わらず再び大助に突っかかる悠樹。大助はその面を引っぱたきたい気持ちを抑え、まくし立てるように説明しだした。

「水槽の『栓』を抜いた。時間式で排出口が開く仕組みのようだったが、もう上らないとまずい。かなり大きな穴なんだ。水流に巻き込まれるぞ！」

今の不利な状況を打破するには栓抜きは確かにいい案だ。この水憐島の作りは少し奇妙で何故かパイプも、排出口も通常の大きさの数倍はある。栓を開ければ数分と経たずに全ての水が無くなるだろう。だが、それは自分たちが十字路の上に居ることを踏まえての話だった。身体的に軽く、人魚より泳ぎも力も劣る自分たちが水中に居ては、どう考えても人魚より先にお陀仏になることは明白だ。悠樹はカツとなったが大助に突っかかるよりも早く、体が何かに引っ張られるような感覚を覚え下を向いた。

「おい、渦が出来てるぞ やべえ！」

急いで右のスペース、唯一残った足場二つの片方へ向かって手を漕ぎ、足を上下に振る。間に合う確率は半々だが、生き残る可能性があるのに死を覚悟する人間は居ない。悠樹と敏は無我夢中で体を動かした。泳いでいる途中で、部屋中央から段々と曇った音になっていく人魚の悲鳴が聞こえる。渦に巻き込まれたようだ。

一方、十字路の沈没にいち早く気がついていた敏は、爪を突き刺された痛みには耐えながらも、一足先に何とか左のスペース、足場の上にへと辿りついた。完全に濡れてしまい体に張り付いた服を擦りつつ、何とか足場の上に登る。だが、思っていたよりも傷の痛みと出血が激しく、それ以上動けなくなってしまった。水に漬かっていたため、圧力の関係で血が余計に流れたようだ。当然元々傷が重症という理由もあるのだが。

目の前には水槽で見ることなどめつたに無い、巨大な渦がぐるぐると回っている。その速度は流れるプールの比ではなく、かなり速い。

「兄貴　父さん……！」

敏は部屋の反対側で今だ泳いでいる二人の人間を心配そうに見つめた。

「はあ、はあ、はあ　！　親父、掴まれ！」

悠樹は強い水の流れに強引に逆らい、足場の上に身を転がせた。足場から伸びているプラスチック製の　円柱が連続して出来ている綱を掴んだおかげで、何とか水中に引きずり込まれずに済んだのだ。綱を腕に巻きつけながら大助の腕を引く。もう少しで無事に水中から上れそうだった。しかし、そう上手く事は運ばなかった。

「シヨアアアアアアア！」

水中の深いところから爪が伸び、大助の脚を刺し貫いた。計三本のも鋭利な爪が見事に縦に並んで肉を串刺しにしている。

「なにいいい！？」

大助は右足の激痛と既に水槽の下に沈んでいると思った人魚の登場に驚いた。強烈な力で体が下に引かれ、その度に激痛が酷くなる。「親父いいい！　踏ん張れえ！」

悠樹は綱を自分の体に巻きつけると、両腕で大助の腕を掴んだ。

こんな所で大助に死なれては堪らない。自分を探すために来てくれたのに、これでは自分が大助を殺したようなものになってしまう。口では反抗し、罵り、怒りをぶつけていた悠樹だったが、いざ父の身に危険が迫ると、流石に必死の形相になり、全身全霊を込めて救おうと踏ん張った。

しかしその効果も虚しく、徐々に大助は段々と下に沈んでいく。悠樹はそれでも諦めずに力を込め続けた。力み過ぎて口内を切ったのか、その口元からは一筋の血が流れている。

「うおおおおあああああー！」

死ぬな、死ぬな、死ぬな、死ぬな、死ぬな、死ぬな

！

何度も頭の中でその単語だけを木霊させる。

これまで大助が見たことのないほど、悠樹は真剣で切羽詰った表情をしていた。

その必死の形相を見て、大助はとある言葉を思い出す。

『大助さん、この子たちが生まれたら、しっかりと守れる良い父親になってね』

ずーと昔、それもたった一度聞いただけのこの言葉が、ふと何故か今頭に浮かんだ。視線を前に動かすと、悠樹の体は先ほどよりも水槽に近付いている。このままでは悠樹も巻き添えにして水中に沈んでしまう。悠樹の顔をじっと見つめ、大助は覚悟を決めた。

「……悠樹。今まで本当にすまなかった。敏を……頼んだぞ」
悔しそうな、残念そうな、悲しい微笑みを浮かべる。

「なっ！？ よせっ、親父！」

父の意図を察し、悠樹は心の底から叫んだ。

「じゃあな」

その瞬間、大助は悠樹の腕を離した。

<第五章> 深遠の悲痛

<第五章> 深遠の悲痛

「大助さん。見て 私たちの赤ちゃんよ、ほら！」

純白の手術室。その中央に置かれている大きなベットの上で、沖田綾は幸せそうに微笑んだ。

皺くち^{しわ}ゃの真つ赤なトマトのような顔をした二人の赤子を丁寧に抱え、大助の目の届く高さに上げる。

「おお、ふてぶてしい顔してるな！ こいつはどっちだ？」

大助は目つきの悪い、じっと自分の目を見つめて離さない赤子を受け取り、胸に抱えながら聞いた。

「その子は悠樹。こっちが敏よ」

敏の頭を優しく撫でながら、綾は答える。

「そうか、双子っていうから同じ顔かと思ったが…… ははは、こんなに目つきが悪いと、直ぐに区別が出来るな」

「その目つきの悪さはあなた譲りなんじゃない？ そっくりよ」

「……俺こんなに目付き悪いか？」

「寧ろそれ以上だと思っけど？」

含み笑いをする綾。つられて横に立っていた若い看護師の女性も顔を反らして口元を押さえた。

「か、看護師さんまで……」

大助はショックを受けたのか、がっくりと肩を落とす。

「落ち込まない、落ち込まない。大丈夫よ。成長すればきっと悠樹の目つきの悪さは治るから。心配しなくて大丈夫」

「フオローする場所違うかい？」

「そんなことより、あなた会社はどうなったの？ 手術直前までは当てがあるって言ってたけど……流石にもう本当の事を言っても良いわよ？」

「それって、俺がお前の身を案じて嘘ついてたってことか？ 馬鹿にするなよ。ちゃんと決まったさ。篠原さんって知ってるだろ？ 俺が学生の時にお世話になった あの人を紹介してくれた。本当に心配はないって」

「そう、それなら良かった。あなたここんとろずっと疲れたみたいな表情してたから……ちょっと心配になっちゃった。もうただの遊び人なんかじゃなく子を持つ父親なんだし、しっかり私たちを守ってよ？」

「ああ、分かってるよ。悠樹も、敏も……お前も必ず俺が守ってやるさ。お前たちは俺の全てなんだから」

自分の覚悟を確認するように大助は力強く答えた。その表情はどこか照れくさげで恥ずかしそうだったが、優しさと暖かさと愛に溢れていた。

再び自分と綾の腕の中でもぞもぞと動いている双子に目を移す。悠樹は相変わらず「クワツ」と見開いた白目で自分を睨みつけ、敏はかわいらしい顔で笑っている。

こんな幸せを……失って溜まるかよ。俺が守るさ。必ずな……
そう再度心に刻み付けた。

耳元を轟音が駆け抜け、爆流のごとき流れの中に己の身がある事を知らせる。瞼を開けば視界一杯に水色の幕が掛かり、ここが地上とは別の世界ではないかと錯覚させられる。手足には無数の死者の手のような水が絡みつき、重く、意思に反して垂れ下がる。

足は三本の地獄の槍に貫かれ、命そのものとも言える赤い水を吐き出しながら、色を己を包んでいる世界と混じり合わせていく。

段々と目の隅に真つ黒な穴が見えてくる。ブラックホールを思わせるような、地獄の入り口を思わせるような暗く、無感情で冷酷さに満ちた穴が。

どう考えても助からない。

大助は他人事のようにその穴を見つめ、思った。あそこに巻き込まれれば体はグチャグチャに碎け、ぼろ雑巾のようになってしまうだろう。いや、もしかしたら、上半身だけを上に残し地獄の苦しみに耐えなければなくなるかもしれない。

……地獄の苦しみか……はっ、笑えるな。

苦しみと考えた途端、自分の暴力を受けていた時の綾の顔が浮かぶ。

「大助さん、止めて……！　お願い！」

力なく床に座り込み、まだ幼い悠樹と敏をその背に隠しながら、必死に訴えていた彼女の青痣の付いた顔。

幸せにすると、自分を守ると誓ったはずの相手につけられた傷。

どれほど辛かっただろう。

どれほど悲しかっただろう。

あの時の綾を思い出すだけで体を深く、深く、底無しに挟りまわしたくなるような後悔と恥ずかしさ、苦しさが襲い掛かってくる。

俺は誓いを破った。綾を、悠樹を、敏を守れなかった。苦しめた。一生直らない深い傷をつけてしまった。今更こんな俺が自分の身可愛さに恐怖するなんて……そんな権利があるわけがない。

大助は体中に残った力を振り絞り、足に刺さっている長い爪の主を見る。

「シヨヨオオオオオオ！」

その人魚のような怪物は、既に尾びれの一部を排水溝の中に巻き込まれつつも、まだしぶとく水の流れに抵抗していた。これほどの勢いのある流れに歯向かえるとは信じられない力だ。

『あんたが母さんを殺したんだ』

悠樹の言葉を思い出す。

成績優秀で、運動神経抜群、誰もが認めるような優等生だった悠樹。他人思いで明るく、人望の厚かった敏。

自分のエゴ、くだらない意地の所為でその全てを壊してしまった。綾を死に追いやり、悠樹を墮落させ、敏の笑顔を奪ってしまった。

もうこれ以上……あいつらから何かを奪うなんて……させて
たまるか。

大助は流れを上手く利用し、水槽の底に人魚が爪を食い込ませて
いる、自分の足を貫いている腕とは逆の腕の前に、身を躍らせた。
人魚はこの腕の力で何とか流れに逆らっている。この底に食い込ん
でいる爪さえ外せば、もう体を支えることは出来無い 排水溝
に飲み込まれるはずだ。

既に大分水も減り、渦の勢いも弱くなってきた。これ以上長
引けば例え人魚の爪を底から外せても、排水溝に引きずり込まれる
ことは不可能になる。今を逃して人魚を倒すチャンスは無かった。

相手の腕にしがみ付き、大助は精一杯カッコつけて最後のセリフ
を吐いた。

「一緒に地獄に落ちようぜ」

「ガブリ」とその腕に歯を突きたてる。顎の骨の間接が外れるよ
うな勢いで、全身の力を乗せて噛み締めた。

「シヨアアッ!？」

人魚は腕を突き抜ける痛みにも耳を劈くような悲鳴を響かせ、思わ
ず底に食い込ませていた爪を引き抜き肘を折り畳んだ。同時に体を
支える全ての支点を失い、暴れ狂う水の流れに逆らう術を失う。

「ぐっ!？」

こちらの腕で体を支えようとしたのか、奇跡的に大助の足を
貫いていた爪が抜けた。血の線路を引きながら人魚の腕が遠のき、
はつきりと移っていた姿が水の壁に阻害さればやける。それでも辛
うじて全体像は見る事が出来た。

初めは尾びれ、次は腰、その次は胸……順序良く体を排水溝に食べられていく。

「アアアアアアア ……！」

そしてとうとう、最後の声と共にその姿は闇へと消えた。

「親父いいいいい！」

「父さん！」

悠樹と敏はそれぞれ部屋の両端の足場から身を乗り出し、水槽の中に顔を突っ込んだ。

焦りか、悲しみか、恐怖か、怒りか、後悔か、何ともいえない複雑な、二人ともこの世の苦しみ of 全てを体現しているかのような表情をしている。

全ての水が消え、ただの広い凹みとなったその水槽の中に、光の速度で血走った両眼を走らせる。

自分の生みの親。

憎むべき母の仇。

そして命の恩人である父を探して。

「何だ悠樹。俺を心配してくれるのか？ らしくないな」

排水溝の直前、まだ僅かに水溜りが残っている水槽の中央で、ずぶ濡れの姿のまま大助は嬉しそうに笑った。

「と、父さん！」

敏は我が目を疑い、父の生存に安堵の溜息を吐く。

水の方が先に全て飲み込まれたためか、底の爪跡に手を引っ掛けていたためか、人魚が排水溝の蓋になったのか、大助は強運なことに生きていた。

「心配なんかしてねーよ！ あんたがやられたか確認しただけだ」

潤んだ目を拭いながら、悠樹はごまかすように声を荒げた。しかしどこかその声は嬉しそうだ。

あれほど憎んでいた相手なのに、あれほど嫌いだった相手なのに、不思議な事に今は全く負の感情を抱く事が出来ない。ただ、安心と、

生存してくれたという喜びだけが胸の中に満ちていた。

「ははは、そういうことにしておいてやるよ」

大助は息子のあからさまな演技に可笑しさと親しみを覚え、笑った。数年ぶりに、心の底から。

今だけは、何の隔ても余計な感情もない親子に戻れた気がした。まだ綾が生きていた、家族仲良かった頃の様に。

ドスッ

鈍い音が響いた。

厚く弾力のある何かを、鋭い刃で貫いたような鈍い音が。

バラを溶かしたのかと錯覚させられそうな、鮮やかな色の液体が流れ落ちる。

ゆっくりと、時間が止まったかのごとくそれは水槽の底に広がり、水と混じりあい大きな円を作った。

大助はそれを不思議そうに見つめた。

一体この液体は何なのか。

どこから出てきたのか。

何故自分の足元に広がっているのかと。

遠くの方で悠樹と敏が血相を変えて何かを叫んでいる。

何をそんなに慌てているんだ？

二人の必死な悲痛に満ちた顔を穏やかな顔で見上げる。

やっとわだかまりが解けた。心を通じることが出来た。

その嬉しさだけが頭の中を支配し、年甲斐もなくはしゃぎたいほど気分が高揚している。

どうしてか段々と視界がぼやけてきた。

敏の凛々しい顔と、目つきの悪い悠樹の顔、自分とそっくりだと綾が笑った顔が見える。

その顔に真つ黒な霧が掛かっていく。

そこで初めて大助は、自分の胸から伸びている五本の鋭い刃に気がついた。そして足元の赤い液体がそこから流れている事にも。

「あ……………」

やっと事態を理解し、目と口を大きく開いて再び悠樹と敏を見上げる。

そして短く呟いた。

「……………」

それが 沖田大助の、この世での最後の言葉だった。

「……………」

「……………」

自分が何を叫んでいるのかは分からない。ただ、大声を上げている事だけは理解できた。

串刺しにされた大助の姿を眼球の三百六十度全てに焼付け、とにかく無我夢中で声を上げる。

そうしなければ耐えられなかったから。

頭がどうにかなりそうだったから。

心が壊れてしまいそうだったから。

体の全てが一体となり叫び声になってしまったかのような、そんな感覚を覚える。

喉が傷つき、血を吐き出そうとも、手を固く握り締め、血がにじもうとも、悠樹は叫び続けた。

家族の死を悲しんでるからでも、後悔からでもない。そんな複雑な感情を抱けるほどの余裕なんか無い。

ただシヨックだった。

それだけだ。

それだけの精神的衝撃が悠樹の喉を、体を、意思を、震わせ続けた。

「シヨヨオオオー」

人魚は大助の亡骸を腕の一振りですべて壁に投げ捨てると、上半身だけでなく尾びれまで体の全てを排水溝から出した。そしてそのまま遺体に構うことなく、近くに居た敏の方へと向き直る。

「……ああうあああ……！」

生まれたての 自分の意思を言葉で表現できない赤子のような音が漏れる。ボロボロの尾びれで床を蹴り、近付いてくる人魚を、敏は一心に見つめた。

何故排水溝から出てこれたのかとか、あれに巻き込まれて無事だったのかとか、そんな理性的な考えは全く浮かばない。ただ恐怖と、なんとも表現のしようのない張り裂けそうな心の痛みだけが、頭を支配している。

それほど今日の辺りにした光景は衝撃的だった。

「止める……！ 止めてくれ……」

僅かに我に帰った悠樹は震える声を吐き出した。

「母さん、親父……二人とも死んだんだ。もう……止めてくれ、敏まで奪わないでくれ……！」

精神的なダメージを受けた所為で体を動かす事が出来ず、敏へ歩を進めていく人魚の背中に、死人に等しい青白い顔で訴える。もはやこの水憐島に来てからずっと余裕ぶっていたあの顔は毛ほども見

えない。だが、それは至極当然の反応だった。

悠樹のあの余裕は諦めから来ていたものだった。

家庭内暴力を繰り広げる父、絶望の中で死んでいった母、それを止めることの出来なかった自分。平和な生活を、平和な家族を、まともな人生を、全てを諦めていたからこそ、いつ死んでも構わないという、どこか自分の命を軽視しているような態度を生み出していた。

しかし、それは大助や敏と行動を共にする間に変わっていた。お互いの命を助け合い、本心をぶつけ合う。幼少の頃には決して叶わなかった本当の意味での意思の疎通を繰り広げた。

大助の変わりよう、謝罪の言葉、久しぶりに見る弟の元気な姿。それらの要素が絡み合い、悠樹に生きたいという感情を知らず知らずの内に作り出していた。その感情が大助の死によって今、表に出てきてしまったのだ。

悠樹はもう、この状態をゲームのように楽しんだり、簡単に死ねるような覚悟を持つ事が出来なくなった。恐怖で足が震え、体に力が入らない。

もう、まともに動く、逃げることは叶わないように見えた。

「……この……」

だが、生まれもつての才能はそれを許さなかった。

人魚の怒りと痛みを感覚により共感し、ショックで放心していた頭の中が流れ込んでくる新たな感情に支配される。

次第にそれは、悠樹の全てを憎しみに染めていった。

気がつくと、悠樹はナイフを逆手に持ち立ち上がっていた。先ほどの状態が嘘のように堂々とした態度で仁王立ちしている。

「ぶっ殺してやる……！」

鬼のような形相で、足場から水槽の中へ飛び降りた。

「あ、兄貴 来るな！ 逃げてくれ！」

悠樹の憤怒を感じ取ったのか、敏も多少の自我を取り戻し叫んだ。だが悠樹は完全に我を忘れ、ナイフを腰に抱えたまま真っ直ぐに

突っ込んでくる。あのナイフでは大した傷を与えることなんか出来ないし、たとえ出来たとしても悠樹が返り討ちに会うのは目に見える。

敏は体中に開いた穴の痛みにも耐えながらも、何とかして兄を助けようと腕を背後の壁に伸ばしたが、そこには大きな水バケツが置いてあるだけだった。

「つくつそつたれ！」

こんなもの、とても役に立つとは思えない。敏は足場の床を伸ばしたままの右腕で激しく叩くと、絶望したように涙を流した。

「この魚がああ！」

水槽の左端、悠樹は大声を撒き散らしながらピッチャーのように肩を大きく振りかぶり、渾身の力を込めて振り下ろした。敏に氣を取られていたのか、悠樹が手を出さないと思っていたのか、人魚は完全に油断していたようだ。その刃は彼女の滑らかな腰に深々と刺さり、赤い火花を真一文字に打ち上げた。

「シヨオオオアアアア！？」

驚いたような苦痛の悲鳴を放ちながら、回れ右をしてこちらに向き直る人魚。その速さに、悠樹はナイフを引き抜く事が出来ず、相手の体に刺したまま手を離してしまった。うつぶせに、顔面から倒れて込む。

俺は何て間抜けなんだ！

どつと全身から冷や汗が溢れ落ちる。

「畜生……！」

悠樹は悔しさと情けなさに襲われながら、自分の命を奪う事になるであろう、頭上の端正な顔を見上げた。父を殺した仇の顔を。人魚は見下しながら片腕を曲げ、強靱な筋肉に力を溜める。

「シヨアアッ！」

そして、それを怒りの籠った満足そうな瞳のまま打ち出した。

死ぬ！

悠樹は咄嗟に恐怖から目を閉じた。

「　おおああ！」

父を殺した爪が、悠樹の金髪に隠された額を刺し抜く直前。敏は最後の力を振り絞って足場を飛び降り、ダークシユートをするように人魚の頭に水バケツを被せ、ぶら下がった。

急に視界を塞がれ人魚はパニックを起こし、大きく体を仰け反らせた。そのおかげで悠樹を狙っていた爪の軌道がずれ、悠樹の真横の床を砕く。間髪おかず、敏は叫んだ。

「兄貴　頭を力チ割れ！」

大助が命と引き換えに水を排除したおかげで、水槽に水は一切ない。つまり自由に動く事が出来る。

悠樹は飛び起きると、地面を強く蹴り人魚の体を駆け上った。

「　これをつ！」

同じ高さになると、待っていたとばかりに敏が自分のナイフを投げ渡す。それを掴み、悠樹は人魚の髪を鷲掴みし、その鼻の頭に突きつけた。

「地獄で親父に土下座しな！」

そして、力いっぱいそれを相手の顔面に決り入れた。

＜第六章＞万象を使役する鳥

＜第六章＞万象を使役する鳥

壁に自分の体が激突したのを感じる。

口から体液が飛び出すのが見える。

浅かった……！

悠樹は齒を噛み締め血の味を感じながら、喉で唸った。

ナイフは確かに人魚の頬を傷つけた。だが、それ以上の効果は無かった。

体中が薄い粘膜のような物で覆われている人魚の体は、あらゆる刃物を滑らせる効果がある。地に足を着け振りかぶるように刺すならともかく、元々脂肪やら油でナイフの切れ味が鈍っていた事もあり、空中で、しかもあの不安定な状態での刺突は簡単に反れてしまった。

直ぐ近くに倒れているはずなのに、遠くの方に居るように敏を感じる。敏は傷だらけの体の状態で動いた事に加え、あの高さから落下した所為で意識を失ってしまったようだ。

まさか家族揃ってこの場所で心中する事になるとは思ってもいなかったと、悠樹は自虐的な笑みを浮かべた。水槽中央の底に倒れたまま、起き上がるうともせず、に全てを諦めたように空ろな眼で人魚の顔を見上げる。

こんな姿になる前は一体どんな姿の女性だったのだろうか。細い眉毛に高い鼻、二重のある水晶のような眼。膨らんだ豊かな双胸。
「……は、厳ついオッサンに見下されて殺されるよりは、幾分マシか」

悠樹はそう呟くと、そっと目を閉じた。闇に包まれながら大助と

綾の顔を浮かべる。

これで良かったのかもしれない。もう二度と会うことはない
と思っていた親父に、敏に再会出来た。……ある意味　これが俺
の人生のハッピーエンドなんだろう。

絶対に理想的な死でも満足できる最後まで無いのに、人生の終わ
りを認めるために、肯定するために、悠樹は強引にそう考え全身の
力を抜き、最後の瞬間に備えた。

「シヨオオオアアアア……！」

遠くの方から人魚の声が聞こえる。

それはまるで鎮魂歌のようにも、葬送曲のようにも聞こえた。

芸術のような美しい声が終わった。

いや、突然止められた。大きな衝撃音によって。

一向に自分の体に痛みがやってこない。悠樹は恐る恐る瞼を開い
た。既に大助も、綾の姿もどこかへ消えてしまっている。

水色の水槽のど真ん中、自分と人魚の間に一人の男が立っていた。
紺色の軍服の裾がひるが翻り、視界一杯に広がる。

「大したもんだな。一般人がここまで独力で生き残るとは……」

男は関心したように呟いた。声の響きが、どこか何かを懐かしん
でいるようにも聞こえる。

耳まであるその男の茶髪を後ろから眺めながら、悠樹は現状が理
解出来ずにただ呆然としていた。

「だ、誰だ？」

何とか言葉を搾り出し聞く。男は直ぐに機械的に答えた。

「こくどりゆう国鳥友 非確認生物対策機関『イミュニティー』の者だ」

「イミュニティー……？」

「シヨアアアアア！」

人魚の苦しんでいる声が聞こえ、悠樹は男の奥へ視線を向ける。すると目を閉じる前とは打って変った姿の人魚が見えた。

狂ったように体をうねらせながら暴れている。水槽の壁に何度もぶつかる事もお構い無しだ。

「な、何だあれ？ 何をしたんだ！？」

驚いて悠樹は直ぐにその男 友に聞いた。

「側線器官と脳の上生体に強い衝撃を与えた。しばらくは平衡感覚や触覚が暴走して上手く動けないはずだ」

「側線器官？」

「魚類の体の皮膚表面にある外界の圧力感知器官だ。ここを麻痺させた」

「麻痺させたってどうやってだよ？」

「魚は側線器官によって圧力や水の動きを感知する。つまり振動に關して異常に敏感なんだ。後ろの壁を見てみる。凹へこんでいるだろ。そこにあいつの頭を直にぶつけさせた」

さっきの衝撃音はそれか？ でも一体どんな方法で……！？

悠樹は友の言っていることが信じられず、壁を凝視する。考えていることを読んだのか、友は話を続けた。

「生物は突然目の前に得体の知れない障害物が現れると、反射的に回避行動を取る。あいつはお前を殺そうとした直前、急に俺が目の前に降り立ったから、咄嗟に俺を避けて自ら壁に激突したんだ。簡単な原理だな」

普通あれほどの奇怪な化け物の攻撃の真っ只中に飛び出す人間は居ない。悠樹は友のことを自分以上の怖い者知らずだと思った。あっさりと今の行動を言っただけの友に、関心すると共に恐怖を覚え

る。

「友、早く止めを刺しましょう！ 普通の魚じゃないんですよ、直ぐに平常の感覚を取り戻します」

いつの間はこの部屋に入って来たのだろうか。鮫のショー用の広場とこの部屋を繋いでいる扉 正面の足場の上に居る、釣り上がった目のミドルヘアーの茶髪の女性と角刈りの若者が、心配そうに暴れ狂う人魚を見つめた。

「ワスプナイフ 西川さん、WASPKNIFEのマガジンは残っているか？
貸して下さい」

友は努めて冷静な声で聞いた。

ワスプナイフ WASPKNIFEとは冷却したガスを刃の先端から放出する特殊なナイフで、元々は熊などの大型生物を仕留めるために、外国の小さな会社を作り出した護身用装備だ。一発仕様することにガスの入っているマガジンを変える必要があるが、その威力は凄まじく、この刃を受けた対象は一瞬で凍りつき爆砕する。最近イミユニティでは官位の高い者は皆、これを基本装備として仕様するようになっていた。だから勿論西川もこれを持っている。

「マガジンはあと三つしか残っていません。大切に使って下さいよ」

ワスプナイフ 西川は名残惜しそうに、WASPKNIFEを水槽の中に居る友に向かって投げ落とした。友はそれをパシッと軽やかに掴むと、水槽中の壁に己が身を打ち付け暴走している人魚に向けて構える。

「自分から壁にぶつかってくれるとはな。これなら永遠感覚の麻痺は解けそうに無いが、早く仕留めるに越した事は無い」

「おい、一人でやる気かよ！」

悠樹は人魚に向かって歩いていく友を見て、咄嗟に叫んだ。しかし友はそれを無視して突き進む。

「シヨオオオウウウ……」

人魚は友の気配に動きを止め、震える体をこちらに向けようとしたが、やはり平衡感覚が狂っているらしく、大きな音を響かせて水槽の底に倒れた。

「哀れだな」

友はナイフを人魚の眉間目掛けて突き出した。それは確実に命中するかに思われた。

だが、人魚は最後の力を振り絞りナイフをかわした。同じ動作のまま、これまでもっとも速い速度で、円を描くように尾びれを自分の周囲一体に叩きつける。

轟音が激しく轟いた。辺り一面が埃で濁る。

「お、おい!？」

死んだか!？

悠樹は冷や汗を流した。何者なのかは知らないが、自分を助けるために死なれるのは後味が悪い。死ぬ姿を見るのはもう親父だけで十分だと思った。

「心配ない」

前を凝視すると、冷静そのものを象徴するような声が聞こえた。

「シヨオアアア!？」

人魚の尾びれは友の顔の真横で止まっていた。別に友が超能力を使ったわけでも、人魚が自分で止めたわけでもない。二人の間に障害物があつたのだ。

それは十字型の足場だった。先ほど人魚自身が破壊し、水槽の底に沈めた物だ。

友は人魚の尾びれが動いた瞬間、一步後ろに下がり、右側に足場の大きな残骸が来るように立った。そうなると当然友を狙った攻撃はここに衝突する事になる。

地形を利用するのが上手い！

悠樹は思わず感心した。

「終わりだ」

友は一気に踏み込み、ナイフを人魚の体に差し込んだ。深々と中へ、中へと銀色の光が消えていく。

「シヨオオギヤアアアア!？」

悶絶し、人魚は左腕を友の頭目掛け振り下ろした。鋭く長い爪が

友の首と胴体の分断を狙う。

ほぼ同時に友の手の中の刃が振動し、小さな霧を一瞬で作り出す。周囲の温度が僅かに下がり、人魚の腹部が凍った。

その途端、人魚の爪は友の顔の鼻先で動きを止めた。ゆっくりと、骨の抜けた贅肉のようにだらりと地面を目掛け垂れ下がる。

爪が地面に着いた瞬間、友の勝利が確定した。

水憐島総合管理室。今ここにある重大な情報が入っていた。

「『紀行園』でバイオハザード発生ですって!？」

部屋の中央、半円上の机の前にある自分の椅子から勢い良く立ち上がると、柳は悪夢を見た直後のように叫んだ。

「は、はい、それももう数時間前から発生しているようです。ここへの連絡が遅れたのは恐らくこちらの状況を考慮しての本部の判断だと思われますが……」

骸骨のような細長い職員が恐る恐る言った。

「くっ、不味いわよ。同時にこんな大きな事件を二つも相手にしないといけないなんて……本部でも対処しきれない。間違いなくここへの対応は雑になるわ」

「雑に？ 厳しくなるのではないのですか？」

細長い職員は聞き返した。

「事件が一つだったらそうでしょうよ。でも今は同時にしかも二つも大きな事件が起きてしまっている。イミューニティーがもつとも苦

労して人員を要する仕事は何か、あなた知っている？」

「イグマ細胞の流出阻止……でしょうか？」

「はあ、脳味噌をちゃんと使いなさい。そんなものは抗イグマ剤をばら撒いておけば何とかなる。人員を裂く最大の敵は情報制御よ。マスコミ、野次馬、情報屋……彼から総力を尽くして事件の秘密を隠さなければならぬ。幾らイミュニティーが政府組織といつても、隠蔽工作できる内容には限度があるのだからね。ここや紀行園は国内最大級の娯楽スポットよ。何かが起きれば注目する人間の数はとてつもなく多くなる。それが同時に二件もだなんて……分からないなら教えてあげるけど、現状はかなり最悪よ」

柳は深く溜息をついた。魔女のような鼻を擦り、忌々しげに細長い職員を見下す。

「それで、本部からよこされた応援部隊は一体何をしているのかしら？」

「は、はい。ただいま生存者の確保と感染者の排除、事件の原因究明のための探索を行っています」

「それだけ？」

柳は呆れたように呟いた。

「生存者の救出なんて……らしくない。一体本部はどういうつもりなの？ まさか、事件に乗じてここの調査を……？」

最近の横谷晶子館長とイミュニティー本部の不仲は柳も良く知っている。当然のように本部に対する懸念の気持ちが浮かんた。

横谷館長が人前に姿を見せなくなつた理由をしつかり話せば、本部も手荒な真似はしないだろうが、それは余りに『むごい』。横谷館長はほぼ確実にこの水憐島の所有者たる地位を奪われ、本部かどこかの施設に幽閉されてしまつたろう。そもそも、今この水憐島には本部には見せられない研究資料や実験媒体が数多く保管されている。例え何があつてもそれらを本部に見せるわけにはいかない。

言葉とは別の場所で本部との壁が生まれるのは必然だった。

「柳管理長、今本部の部隊から連絡が入りました。館長室内に横谷

館長の姿は無かったそうです」

部屋の左端に座っていた女性が残念そうに言った。それを聞いた柳は思わず溜息を吐く。

「そう、仕方ないわね。彼らにはそのままここへ来てもらって、私たちの警護をしてもらいましょう」

「分かりました」

女性は言われた通りに通信機に呼びかけた。

「あ、もしもし　こちら総合管理室です。柳管理庁からの指示で……」

ガシャ！

この総合管理室の入口がいきなり開いた。

「ん？」

ロックを掛けていたこの扉が開くはずが無い。開けられるとすれば、柳かそれに近い地位を持つ者だけだ。中に居た職員たちは一斉に扉の方を向く。

そこには一人のスーツ姿の人間が立っていた。

赤毛に近い長く美しい髪。凜とした芸術のような瞳。まるでフランス人形のような顔をした女性だった。

「横谷……館長……」

誰もがこの横谷の不意打ちの登場に驚いている中、柳はすぐに我に帰り、静かに相手の名前を呼んだ。

横谷晶子は無言で柳を見る。

それを怒りだと捉えた柳は慌てて説明を始めた。

「こ、こんな事態になってしまい、申しわけございません。今職員一同全力で事態の收拾に努め、本部から応援部隊も呼んでいます。イグマ活性剤が散布された原因は今だ不明ですが、直ぐに犯人を見つけますのでどうか館長はここで報告をお待ち下さい」

まくし立てるようにそう言った。

「隠さなくていいわよ。広ひろでしょ？」

晶子は最初から事件の全てを知っているかのように、あっさり犯

人を言い当てた。この言葉に柳は驚愕する。

「はっ、はい。弟さんの広くんが今朝、地下のあの場所でイグマ細胞活性剤をパイプに流している姿が確認されました。で、ですが……どうしてご存知なんですか？」

「どうしてもこうしてもね……いずれ何かするとは思っていたから」
柳は晶子の言葉を理解出来なかった。魔女鼻をひくつかせ晶子の説明を待つ。

晶子は直ぐに口を開いた。

「私、考えたんだけど……この館長を辞めさせてもらうわ。こんな事件が起きた以上もうここには居られないもの」

「え！？　ちよっと待つてください！　何を突然……」

あまりにも予期していなかった言葉に耳を疑う柳。聞き耳を立てていた他の職員も、それぞれ混乱の色を見せている。

「だってこうなった以上、私はどうせお終いでしょ？　元々本部から目をつけられて居たんだし……丁度いい機会だから止めるわ」

「そんな勝手な　大体止めたって水憐島からは出れませんよ？

あなたの顔はみんな知っているんですから。責任放棄したと分かれば、すぐに応援部隊に拘束されてしまいます」

「されないわよ。あなたなら分かるでしょ。柳……」

晶子はそこで言葉を止めた。前を向いたまま片手を後ろに伸ばし、部屋のロツクを入れなおす。

その意図を柳は直ぐに悟った。

「そ、そんな……私が何年あなたに使えたと　それにここに居る者たちはみんなあなたの忠実な部下なのに……」

「私じゃなくて私の外見にでしょ？」

晶子は柳の言葉を一笑すると、狂気を含んだ表情でこう言った。

「さよなら、柳。いままで良くやってくれたわ」

大助の遺体は火葬された。

そのまま置いていれば鼠魚や魚人に卵を植えつけられる恐れがあったからだ。

水槽の底でオレンジ色の光を放つ父親の姿をひたすら見つめ、悠樹と大助はただずっと無言で立っていた。

自分に会うために、謝るためにここまで来てくれた、あの逞しい姿はもうどこにも無い。もう殆ど灰になってしまっている。

敏はゆっくりしゃがむと、炎から離れた位置に崩れ落ちていた灰を救った。愛おしそうにそれを自分の財布の小銭入れに詰め込む。

遺体を持って帰る事が出来ない以上、そうするしかなかったのだろう。

「行くぞ。あまり同じ場所に長居するのは危険だ。魚人のことは詳しくは知らないが、元がイグマ細胞である以上、必ず人の気配がある場所に集まってくる」

悠樹の肩を叩き、友は無表情でそう言った。

「もう少しだけ、待ってくれ。何年も会っていなかった。再開したばかりの家族なんだぞ？」

悠樹は声を洩り出すように、炎を見つめたまま呟いた。しかし友は引き下がらない。

「この手の事件に『死』は付き物だ。悲しみたい気持ちは分かるが後にしろ。今悲しんでいても何の利点も得もない」

「利点とか得とか、そんな簡単に割り切れるわけねえだろ！ お前らと俺たちは違う」

悠樹は友を睨みつけた。

しかしその行動を全く意に介さず友は言葉を続ける。

「そういう問題じゃない。生きたいか死にたいかだ。これ以上ここに留まる気なのなら俺たちはもう行くぞ」

悠樹は感覚から友のこの言葉が本気だと知った。友の感情はまるで死人や氷のように冷たく、機械のようだった。

「ああ？ 上等だ。勝手に消えろよ」

悠樹はガンを飛ばし、手首を友たち三人に向かって振った。

「おい、お前いい加減にしろよ？ こつちが優しく言ってるや付け上がりやがって！ 誰がお前を助けたと思ってる？」

頭にきたのか、友の仲間の若い角刈りの男が悠樹の前に出てその襟を掴んだ。

「さあな？ 少なくとも何もしないで傍観していたどっかの角刈り野郎じゃ無い事だけは確かだな」

父の死に対する怒り、自分の本心を伝えられなかった悔しさ、それらを角刈りの男に向け、八つ当たりするように悠樹は挑発的に睨み続けた。

「マジでお前殺すぞ？ 俺らがへいこら一般人のご機嫌伺いをするどこかのお抱え警備員にでも見えるか？」

角刈りの男は悠樹の襟をさらに強く掴んだ。

「兄貴、手を離すんだ。その人たちの言う通りだよ。……ここに居るのは危険だ。安全な場所に誘導してもらおう」

一触即発の雰囲気の中、敏が涙に濡れた顔で二人を強引に引き剥がした。敏の力は非力な方だったはずだが、その威圧感に気おされ角刈りの男はあっさりと腕を放す。

「じゃあ行きましょう。もう他の仲間もそれなりに生存者を救出しているはずです」

西川がやっとここを離れられるといった様子で言った。

「どこへ行くんです？」

もう水憐島から脱出できると思っていた敏はいぶかしんで聞いた。「地下の飲食店エリアです。そこに生存者を集める予定になります」

「飲食エリア？ 何でわざわざそんな場所に？」

「行けば分かりますよ」

西川は意味深な言い方をした。

上から垂らしたホースを綱にして登り、良くやくこの悪夢の部屋から出るという直前、悠樹はぼそりと小さな声で呟いた。

「親父 ……じゃあな……」

振り返る事無くゆっくりと扉を閉める。

その時、遺体から立ち上る煙が僅かに左右に揺れた。
まるで悠樹と敏に別れの挨拶をするように。

恐らく友の同僚が下ろしたであろう防火シャッターを持ち上げ、地下飲食店エリアに入ると、紺色の服を着た四人の人間たちに加え、十人ほどの一般人の姿があった。

「お前たちはあそこの生存者のところへ行ってくれ」

友は感情を感じさせない声で悠樹と敏に言った。

「……わーっ たよ」

悠樹は友を一瞥すると、黙って言われた通りに道の中心に集まっている生存者たちの所へ移動した。敏も勿論一緒に着いていく。

「イミユニティーの人間が少ないな。何かあったのか？」

二人の背中を眺めながら、友は怪訝そうな表情で言った。

水憐島に侵入した時は二十人近い人数だったはずなのに、今ここに居るのは自分たちを含め、たった七人しかない。

明らかにおかしい。

西川も気がついたようだ。直ぐに近くの仲間に声をかけ、事情を聞いた。

「どうなっているんですか？ 他のメンバーは一体どこに行ったんです？」

「あ、西川さん！ ご無事でしたか！」

男は今始めて西川に気がついたのか、ビクツと体を震わせてこちらを向いた。

「それが、なにやら総合管理室の方で問題があったようなんです。最初に館長室を調べに行っていた田代がそのまま管理室に向かったのですが、急に連絡が取れなくなったので、改めてここから数人を向かわせたのですが……」

「全員……帰ってこなかったってわけですね」

西川は不安げに先を言った。

「ええ、もう大分経っているんですけど……これってやっぱり……」「死んでるな」

友が西川の後ろから声を出した。

「何かに全員殺されたんだ」

その言葉が静かに通路に響いた。

<第七章>二十人の逃走

<第七章>二十人の逃走

「殺された？ 訓練を受けたイミューニティーのメンバーが十三人も？ そんな事が出来る生き物がいるとも思っているんですか？」

西川は友の言葉を否定した。

「幾らなんでもそんなことは不可能ですよ。例えどんなに凶悪な化け物が居たとしても、十三人も兵士が居れば負けるはずがありません。きつと電波に異常があるか、通信機の故障でしょう」

「通信機の故障なら向こうも誰かを走らせて、こちらと連絡を取ろうとするはずだ。だがそれが無い。間違いなく全滅していますよ」

西川の組織に対する過信を打ち砕くように、友は強い調子で言った。

「最後にメンバーを送り込んだのはいつだ？」

そのまま続けて自分の正面にいる点のような目をした同僚に聞く。男は時計を見ながら答えた。

「えーと、今が三時だから大体二時、二十五分くらいだな。ここに来てほぼすぐだ」

「ということは、もう三十五分近く経っている。間違いないな。西川さん、すぐに生存者たちをここから避難させた方がいい。ここは管理室にかなり近い。何が仲間を殺したにしろ、このままここに居座るのは大きな危険だ」

「仕方がありませんね。でも、ここが駄目となるとどこに行けば良いんですか？ 生存者たちの中には感染者がいるかもしれない。それを調べるためにも、こうして直ぐに外に出さないで広い場所に集めたのに……」

「抗イグマ剤を生存者全員に薄めて飲ましては？ 感染していれば

何かしらの反応があるはず」

「抗イグマ剤を？ …… 分かりました。あまり量は持っていないせんが、出来るだけやってみましょう。友は他のメンバーと共に生存者の監視を続けてください。もしかしたらこの中にディエス・イレのスパイや事件の犯人がいるかもしれない。怪しい動きをしているかどうか見張って下さい」

「分かった」

友は腕を組んだまま僅かに顎を傾けると、地下飲食店エリアの中心に集まっている生存者たちに視線を向けた。

悠樹は生存者たちの間にどかと座り込むと、まだ涙の痕が残る目で自分の両手を見つめた。

そうしていると、あの時自分が手を離さなければ、もっと強く掴んでいれば、もしかしたら大助は助かっていたかもしれないという思いが溢れてくる。悔しさで体中が爆発しそうになる。押さえ込んだはずの悲しみが甦ってくる。

「くそっ！」

気がつけば悠樹は全力で拳を床に叩きつけていた。

「何だ？ えらく機嫌が悪いな？」

隣に座っていた男がそんな悠樹の様子を見て驚くように言った。首までしかない黒髪を後ろで結んでいるという、珍妙な髪型をした男だ。年は悠樹より多少年上のように、どこか落ち着いた雰囲気纏っている。顔だけみればかなり美青年の分類に入るかもしれない。

「俺は岸本源一、二十五歳のサラリーマンだ。あんたは？」

岸本は無理に作ったような笑顔で片手を伸ばした。握手のつもりだろう。だが、悠樹はそれを掴もうとはせずに男の顔を見もすらないで無愛想に応じた。

「沖田悠樹だ。悪いが今考え事をしてるんだ。話しかけんな」

我ながら冷たい反応だと思いつつも、悠樹は体育座りのような格好を作り、頭を膝の間に潜り込ませた。自分の世界に閉じこもりたという無意識の意思表示かもしれない。しかし岸本はそんな悠樹の反応などまったく意に介さず、一人で話し続けた。

「なあ沖田、何でこんなことになったんだろうな。俺は普通に気分転換に來ただけなのに……これじゃ逆にストレスを増加させる結果になっちまった。こんなことになるなら、普通に家でごろごろしてれば良かったぜ」

悠樹は無言で下を見つめている。

「あ、そういえばお前聞いたか？ この事件で現れた化け物たちはみんなここで作られていた生き物らしいぜ。なんでも横谷晶子っていう館長の命令だそうだ。ほら、見かけたら知らせてくれって、こんな写真までくれたよ」

岸本はポケットから、雑誌の切り抜きのような写真を取り出した。

横谷晶子？

悠樹はその言葉に顔を上げ、岸本に向き直った。

「どういうことだ？」

「いや、さっき偶然あの青っぱい軍服をきた連中の話を聞いたんだけどな。ここは水族館なんかじゃなくて、実は横谷館長の所有する秘密の実験施設なんだってよ。なんでも特殊な細胞の研究とか言ってたな」

「特殊な細胞……それが鼠魚や魚人を生み出したのか」

「らしいぜ。つまりはこの大量虐殺も全て横谷館長の所為ってことだ。まったく、迷惑な話だぜ」

岸本は両腕を左右に広げ、演技がかった調子でそう言った。

「横谷晶子……あいつがこの災害を……親父を……」

悠樹は自分の中で強い憎しみが沸き起こってくるのを感じた。今まで抱え込んでいた悲しみや憎しみをぶつける事の出来る対象を見つけ、死んだように呆けていた瞳が鋭さを取り戻していく。

「おい、お前……」

「ん？」

悠樹に突然呼ばれ、岸本は多少意外そうに振り向いた。

「その写真を俺に課れないか？」

「うわっ!？」

「ひゃあああ!？」

敏はトイレから出た瞬間、同じく女性用トイレから出てきた老婆とぶつかった。老婆は悲鳴を上げながらトイレ際の壁に尻餅を付く。

「あ、すいません! 大丈夫ですか？」

敏は慌てて老婆を起こし、埃などを払った。

「いえいえ、こちらも余所見をしていましたので御氣になさらずに

……」

老婆は笑顔で敏の手を制する。

「本当にすいません。あ、向こうまで荷物お持ちします」

老婆は小さな手提げ鞆を持っていた。敏は丁寧になそれを受け取り腕に抱える。

「悪いわねえ、見かけのわりにそれ重いでしょ」

「いえ、日頃から鍛えていますんで、大したことは無いですよ」

「…… あなたお名前は？」

「僕ですか？　僕は沖田敏と申します」

「敏さんねえ……いい名前じゃない。私なんて佳代子よ？　生まれ
たときからか弱いみたいで、なんだか嫌な名前でしょ？」

「そんな事無いですよ、素敵な名前じゃないですか」

敏は出来るだけお世辞に聞こえないように努めて言った。しばらく
くそのまま歩くと、老婆は優しくそんな笑顔を浮かべて敏の手の鞆を
掴んだ。

「あ、もうここでいいわ。最近の若者は皆不親切だと思っていたけ
ど、しっかりした人も居るのね。どうもありがとう」

「これくらい当然ですよ。気にしないでください」

敏は笑顔で一礼すると、老婆から離れ、悠樹の座っている場所の
隣に返ろうとした。だが、その途中で一瞬強烈な憎しみを共感能力
で感じ、動きを止める。同時に視界の隅に一瞬だけ野球帽を被った
男の頭が見えた。

「ぐっ！？」

よろけた体を建て直し、再び前を向くと、その野球帽男の姿は影
も形も消えていた。いや、正確には帽子を取ったのだろうが、帽子
を被っているという印象しかなかった悠樹には、それを取られれば
見つけることは出来なかった。

「何だっただ？」

敏は何故今このときに野球帽の男があれば強い憎しみを抱いて
いたのか、理解出来なかった。

「よう、長いトイレだったな。大か？」

悠樹はこちらに歩いてくる敏に向かって手を振りながら聞いた。

「で、デカイ声で大とか叫ぶなよ！ まったく……」

敏は顔を赤くしながら急いで悠樹の隣に座る。

「いいタイミングで帰ってきたな。何かあの西川とかいう女から話があるらしいぜ」

「話？」

悠樹の視線を追うと、西川や友らイミューニティーのメンバーがこぞつてこちらに歩いてくる姿が見えた。

「皆さん、これから配る飲み物を必ず飲んで下さい。これは感染しているかどうか判断する為の薬です。飲まない者は感染者とみなして対処致しますので、そのつもりでお願い致します」

皆の前に立つなり西川は大きな声でそう言った。

「何だあの薬？ 気味が悪いな」

岸本が首をすくめながら悠樹と敏の方に視線を傾ける。

「別になんだろうと飲むしかないだろ。わざわざ俺たちの命を助けてここまで集めたんだ。今更変な真似はしないうぜ」

その視線に目を合わせることなく悠樹は配られてきた紙カップを受け取った。

「随分素直なんだな、ま、確かに違いないけどさ」

岸本は自分の分を一気に飲み干すと、不味そうに舌を伸ばした。

それを見た悠樹と敏もその液体を一気飲みする。

「飲んでお体に異常が無ければ移動を開始します。あちらの三人の先導にしたがつて着いて行って下さい」

そう言つて西川は飲食店エリアの端を指差した。そこでは既に三人の屈強な男たちがナイフを腰に挿し手招きしている。

悠樹はそろそろと他の生存者たちと移動していると、右の定食屋の前に友の姿を見つけた。人の合間を縫って近付き、後ろから声をかける。

「何処に向かつてんだよ？ 正面扉のロックを外せたのか？」

「……正面扉からは脱出しない。ロックを解除するために管理室に行ったメンバー全てが死んだ。今向かっているのは別の出口だ」

「全て死んだって！？ お前らも大したことねえな、じゃあ何処に向かってるんだよ」

「船着場だ。シャッターが一応下りているが、内側からなら手で上げられるらしい。そこからお前らを避難させる。心配するな」

友は全ての生存者たちが自分の前を通り過ぎたことを確認し、その最後尾に着きながら言った。

「船着場か、無事に脱出できればいいけどな」

悠樹は何故か不安な気持ちを感じそう呟いた。

「良いですか？ ここからは数グループに分かれて移動します。私たちのメンバーが三人、皆さんが五人で一グループという割合で行動してください。数の問題から一グループだけメンバー一人、一般人三人という形になってしまいましたが、そこはご理解ください」

西川は場にそぐわないような非常に丁寧な物言いのまま、周囲に言った。

ここは地下飲食店エリアの関係者用通路から階段を上がった先、作業管理区だ。船着場は一般客が行くような場所ではないため、向かうにはこういう場所を通るしかない。今グループ分けしたのは、通路に走っている無数のパイプや鉄柱に阻害される回避効率を上げるためだった。

悠樹がぼんやり壁やら天井やらに走っているパイプを見つめていると、前から友に呼ばれた。

「悠樹、敏、お前らは俺と一番最後だ。今のうちにトイレや水分の補充を済ませておけ」

「は、お前が一緒かよ。味けねえな」

悠樹は気だるそうに答えた。それとは対象的にきりりとした声で敏は応じる。

「つてことは俺たちが例外グループか……まあ、友さんなら安心だ。あと一人は誰ですか？ 確か一般人は三人でしたよね？」

「ああ、それなんだがお前らと仲が良さそうだった岸本源一にしておいた。知らない人間よりは知っている人間の方が連携は取り易い」

この言葉に悠樹は通路の奥で他の生存者と話している岸本の方を向いた。すると偶然岸本もこちらを向き、嬉しそうに片手をヒラヒラと振ってくる。

それを見た瞬間、悠樹は眉を寄せ、うざったそうに突き出した拳の親指を下に傾けた。

「じゃあ、私のグループは出発しますよ、逸れずに付いてきてくださいね」

西川は課外授業中の先生のような調子で歩き出す。

「……遠足だな」

その様子を見て馬鹿にするような溜息を吐きながら、同グループ内の若い男が着いていった。オールバック気味の黒髪に、白いシャツに黒い革ジャン、黒いズボンといった井出立ちの男だ。悠樹はさきほど男が他の生存者から「トウヤ」と呼ばれていたのを聞いている。

西川、トウヤ、先ほど敏と会話した佳代子などの第一班が完全に見えなくなると、今度は点のような目をしたイミューニティーメンバーが率いる第二班が動き出した。

「じゃあな友、先に行くぞ。向こうで会おう」

通路の先へ進む直前、そのメンバーは友に挨拶し、緊張した顔つきで姿を消した。

「ゴウン」、「ゴウン」と何かの機械が稼動している音が聞こえる。ヒューヒューと風の音が耳を通り過ぎる。かなり長い時間が経ったかに思われたとき、やっと友は口を開いた。

「行くぞ」

その言葉を合図にすぐに悠樹たちは歩き出した。友、悠樹、敏、岸本の順で狭い通路を進んでいく。

ん……？

悠樹と敏は歩けば歩くほど共感能力に何かの反応を感じた。強い恐怖の感情だ。心の底から誰かが何かを恐れなければこんな感情は出ることは無い。

「友、もしかしたら……用心した方がいいかも知れないぜ」

悠樹は小声で先頭の友に耳打ちした。

「何……っ？」

友は聞き返そうとしたが、何かに躓き、壁の方よろけた。

「これは！？」

敏が目の中の光景にいち早く反応する。

友が躓いたのは死体だった。それもついさつき、自分たちの目の前を通り過ぎて言った第二班の人間のものだ。

「っ下がれ！」

突然友が叫び、ナイフを横薙ぎした。すると一匹の鼠魚が真つ二つになって床に落ちる。

「不味い、走るぞ！」

今まで隠れていたのだろうか、急激に周囲の壁やパイプの隙間中から無数の鼠魚が体を這い出してきた。

友たちはその鼠魚の集団を見た瞬間、一目散に走り出した。

「くそっ！ 何でこんなところにまで鼠魚が居るんだよ！ 一般、二班は全滅したのか！？」

狭い通路を駆け抜けながら足元の死体をゾツとするような目で見る敏。

それに対し、相変わらず感情の籠らない声で友が言った。

「いや 恐らく一班は無事だ。死体から見ると、やられたのは二班だけだろう。とにかく今は逃げるしかない。俺一人ならまだしもこれほど狭い場所ではお前らを庇いながら戦うことなんて出来ない

「からな」

「広い場所に出るぞ！」

最後尾から岸本が叫ぶ。と同時に友たちは通路を抜け、船着場へと繋がっている倉庫に飛び出した。

倉庫の中は木製のコンテナやら箱やらあちらこちらに無数に詰まっていたものの、ある程度整理されているおかげで障害にはなりそうにない。悠樹、敏、岸本は直ぐに船着場まで走っていきこうとした。だが、友はそんな彼らを食い止め一つのコンテナを指差した。

「あれでここを塞ぐ。手伝え！」

倉庫のど真ん中まで走っていた悠樹たちだったが、その言葉を聞いて急いで戻ってくると、友と共に通路の出口にあったコンテナをずらし始めた。その間にも鼠魚たちはどんどん迫ってくる。

「こなくそおお！」

悠樹は全力でコンテナを蹴った。すると先頭の鼠魚が倉庫に踏み込む直前、間一髪で通路をコンテナが完全に塞いだ。

「はあ、はあ、はあ……」

座り込む岸本と敏。

「行くぞ。このコンテナもいつまで持つか分からない。先に行つた西川さんたちのことも気になる」

休む無くそう言つと、友は一人息を切らすことなく歩き出した。

「……気になるか、確かに同感だな」

友の言葉から悠樹は一つの疑問を感じた。何故一斑は襲われなかったのかという疑問を。

倉庫を進んでいくと、一斑の面々と二班の生き残りが船着場への扉の前に集まっていた。といっても二班の生き残りはイミユニティのメンバー三人しか居ないが。

「ああ、良かった！ 友も無事だったんですね、今助けに戻ろうかと考えていたんです」

友の顔を見た瞬間、嬉しそうに西川が駆け寄ってきた。

「心配ない。大丈夫だ」

友はそれは無表情で答えると直ぐに視線を扉の前に向ける。西川はそんな友の態度に若干寂しそうな表情をした。

「この先が船着場ですか？」

「はい、外に出るにはシャッターを手動で開ける必要がありますが、それさえ行いければすぐに生存者たちを脱出させられます。シャッターを開け次第、ヘリに連絡して救出してもらいましょう」

「そうか、じゃあ直ぐにでも取り掛かるう」

そう言って友は船着き場への扉を開けた。すると涼しい風が顔を一気に撫で、海の味が舌と鼻に広がる。

「友は生存者たちを見てる。シャッターは俺が開てくる」

さきほど一般人を助けられなかったことを悔やんでいるのか、二班の一員として生存者たちを先導していたイミユニティの、点のような目をした男が友を押しやり先へ進んでいった。

「よし、それじゃ皆さんはシャッターの前に並んで下さい。順番に移動しますんで」

この水憐島に來た当初、西川、友と一緒に行動していた角刈りの若い男が大きな声で周囲に呼びかけた。その声にしたがって佳代子、悠樹、敏、トウヤ、岸本、その他の生存者らはげっそりした顔を連ね、水が溜まつているくぼみの横に一列に並ぶ。二班の一般人が全滅してしまった今、生存者たちはわずか八人しか居なかった。

「本当にここから脱出出来るのかしら？」

その内の一人、どこかのお嬢様のような高そうなワンピースを着

た女性が不安そうに呟いた。それを真後ろで聞いていた、真っ赤なベストを着た十代後半らしき男が女性に声をかける。

「心配ないよ窪田さん。この鉄板一枚超えればもう水憐島の外なんだ。もうこれ以上何かにお怯える必要なんてないさ」

「佐伯さん……」

窪田と呼ばれた女性は潤んだ目で佐伯を見つめた。

「おいおい、恋愛ドラマは家でやってくれ。それともワザと俺らに見せ付けてんのか？」

一面のやり取りを見ていた初老のスーツ姿の男が手をヒラヒラ二人に向けて振った。

「何だよ、オッサン！ あんたには関係ないだろ？」

佐伯は折角の雰囲気や邪魔され、迷惑そうに男を振り返った。だが男は一向に構わずに言葉を続けた。

「オッサンだと？ 目上を敬えこのガキが、俺は羽場泰三だ。人前でイチャイチャすんなって言っただよ」

「だ、誰がイチャイチャなんか！」

佐伯は顔を真っ赤にして羽場を睨んだ。

「おい、お前ら煩いぞ！ ケンカなら脱出してからやれ。それ以上騒ぐなら向こうの倉庫に追い出すからな」

腰に挿したナイフに手を当てたまま入り口を見張っていたイミューニティーのメンバーが怒鳴った。まだ文句はそれぞれあったが、倉庫に出されるのは怖い。仕方が無く佐伯も幅も口をつぐんだ。

「シャッター開かないな。どうなってるんだ？」

悠樹は訝しむように、点のような目の男が向かった方向を見た。しかしそこはこの船着場の端にある凹んだ場所であるため、暗さも手伝って何も見えない。

友も勿論男が戻らない事に気がついていた。

「見てくる」

短く西川に言い、ナイフを抜きながら慎重に部屋の隅、シャッターを開けるレバーがある場所へと近付いていく。そして凹んだ場所ま

でくると、壁に背を付きそこから頭だけを僅かに覗かせ様子を見た。そこでは点のような目をした男がレバーの前で困ったように頭を掻いていた。

「……桂木、^{かつらぎ}何をしている？」

友はナイフをしまい、溜息を吐きながら聞いた。

「ん？ 友か。それがな、レバーが折れちまっててよ。幾ら下ろそうとしても動かねんだよ」

「折れてる？」

友はその言葉を確かめるために、点のような目をした男、桂木の前へと回った。すると前にダンボールが置いてある壁に、三十センチメートルくらいの長方形の物体があり、そこから折れたレバーが伸びていた。

「何で折れている？ お前が折ったのか？」

「まさか、鉄鋼製のレバーだぞ？ こんなもん素手で折るのは不可能だ」

桂木は両手を胸の前で左右に振りながら答える。

「俺が着いた時には既に折れてたよ。きつと水憐島の職員が感染者を出さないように、ペンチか何かで曲げたんだろっ」

「……どうかな」

あくまで人間の手によるものだと主張する桂木に対して、友は否定的な目を向けレバーの下に落ちていた緑色の膜のような物体を拾った。それを桂木の前に掲げると、抑揚の無い声で静かに言葉を吐き出した。

「何かがこの船着場にいるぞ」

<第七章>二十人の逃走（後書き）

この前「尋獄2」をちよつと読み直したんですが、誤字脱字や文章能力の低さがかなり酷いですね（今もそんな変わんないけど）。

現在、尋獄1の後方部から修正中なので、もし最近尋獄2を読んで不快に思った方がいらつしやいましたら、どうかしばらくご辛抱下さい。そのうち必ず修正を行いますので。

<第八章>紛れ込みし者

<第八章>紛れ込みし者

「何かがここに居る？」

桂木は聞き返した。

「この船着場は全て探索しきったぞ？　一体何が居るって言うんだよ？」

「もしくは『居た』だ。　この緑色の膜……どう見ても生物の皮膚だ。しかもまだ生暖かい。これはついさっきまでここに人間以外の何かが居たことを示している」

レバーがある壁にその膜を投げつけ、友は鋭い視線を桂木に向けた。

「おいおい、そいつがレバーを曲げたって言うんじゃないだろうな、知能が高すぎる。もしそうだとすれば、一般感染生物じゃないぜ。間違いなく大型の上位兵器クラスの生物だ。そんな奴が俺たちに気づかずに、出口の一つしかないこの船着場から出て行けるわけが無いだろ？」

「上位生物兵器には人間の姿を模倣できるものもある。もしかしたら……生存者の中に紛れていたのかもな。可能性が高いのは先ほど鼠魚に唯一襲われていなかった一斑か」

「さ、流石にそれは考えすぎじゃないのか？」

「深く考えて損なことは何も無い。まだどこかに潜んでいる可能性もある。とにかく……油断は出来ないということだ。……　西川さんにこのことを伝えてくれ。こうなったら別の脱出法を探すしかない。俺はこれをやった奴がまだこの船着場のどこかに潜んでいると仮定して探してみる」

「はあ、他の連中にも手伝わせる。気をつけるよ」

「 勿論だ」

友はそ言つと同時に歩き出した。

横谷広は焦っていた。

自分はとづくにこの水憐島から出て、今頃は橋の向こう側の野次馬と共にこの騒ぎを傍観しているはずだった。それが柳管理長の所為で予想よりも早く正面出入り口を封鎖され、あるうことかこうして生存者としてイミユニティーの増援隊と共に行動している。

自分がこの災害を起こしたことは恐らく柳管理長には知られていくはずだ。もしイミユニティーの奴等が本部から自分の写真を送られたり、この島内で資料を見つけたりしたら、その瞬間全てが終わってしまう。重要参考人としていや、被疑者として捕らえられてしまうことになるだろう。

隙を見て逃げ出そうかとも思ったが、『あいつ』が絶えず自分に目を光らせているこの状態ではとても逃げるなど不可能だ。もし強行突破でもすれば『あいつ』は己の正体をさらけ出してでも自分を捕まえようとするはず。

「嫌だ」 と広は思った。

あいつに捕まることだけは避けたかった。捕まれば自分の人間としての人生は終わり、義兄の操同様、みさお化け物にされてしまう。

絶対に嫌だ。

絶対に御免だ。

例えどんなことをしても『あいつ』に捕まるという結末だけは迎

えてはならない。広は遠くの方で友が何やら壁や天井を念入りに調べている姿を見ながら決意を固めた。

イミユニティーに『あいつ』を殺させよう　と。

「そうですか、困りましたね……見た目では分かりませんが、このシャッターはイグマ細胞流用生物の逃走阻止のために、かなり分厚く作られています。レバーを仕様しないで力任せに開けることは出来ないでしょう」

船着場の中央南、無数に積まれたコンテナの前。西川は本当に困っているらしく、傍から見ても動揺していることが分かるような調子で言った。

「やはり管理室に行つてロックを解除するしか方法は無いのでは？最後に仲間が向つてからもう時間もある程度経っています。今なら大丈夫かもしれません」

決意の籠った表情で言う桂木。だが西川はその意見を否定した。「駄目です。危険すぎます。十三人の仲間をこの短期間で皆殺しにした『何か』が居るんですよ。もしも管理室から遠のいていたとしても、水族館エリアからは出ていないはず。この大所帯で遭遇すれば、最悪な状態を招くのは目にみえています。それに、ここから管理室へ戻るには友が閉じた作業用通路を通らなければなりません。鼠魚の軍団がいる以上、あそこを通ることは無理でしょう」「じゃあ、どうする気なんですか！？さらに増援が来るまでずっとここに閉じ籠ろうとでも？紀行園の事件も片付いていないのに、何日後になるか分かりませんよ！」

桂木は大声で怒鳴った。その声を聞いて、船着場の淵^{ふち}に座っていた悠樹たち生存者が二人に注目する。西川は彼らに心配させてはならないと、声を落として話を続けた。

「そんなつもりはありません。ここに留まれば音や匂いを嗅ぎ付けて、そのうち多くの魚人や鼠魚が集まってきます。いくらコンテナで塞いだといえども、無数の魚人に体当たりされれば直ぐにあの通路は開通するでしょうね」

西川は髪を耳にかけながら一息つくと、気が進まそうな顔で口を開いた。

「……水族館地区を通らずに管理室まで行く方法が一つだけあります」

「何ですか？」

思わぬ言葉に耳を疑う桂木。

「この水憐島は横谷晶子が所有する一つの城と言っても過言ではありません。噂ではこの地下には無数の実験施設が存在し、イミューニティー本部ですら知らないような兵器や細胞を開発していたそうです。……」

実は、私はここに踏み込む前に外で総指揮を取っている下田さんから、水憐島全体の地図を見せられていました。それによると、管理室、動力制御室、この船着場の三場所には地下施設へと通じる秘密の出入口があるみたいです。地下施設を通れば管理室に行けるかもしれません」

「水憐島の地図？ 何故下田さんはそんな物を？」

「詳しくは知りませんが、知人の黒服から買ったらしいです。何でも横谷晶子を暗殺するための調査の過程で手に入れたものだとか」

「とにかく道は分かるんですね？ だったらすぐに地下へ向きましょう。友の意見ではこの船着場には得体の知れない生物が潜んでいる可能性がある。出来るだけ急ぐべきです」

「でも、地下に行くということは危険なんですよ？ どんな新種の兵器や危険な生物が居るかも分からない。下手をしたら、作業通路を通るより危険かもしれません」

「どうせここに留まっても危険なことには変わらない。西川さん、行きましょう。少しでも皆が助かる可能性があるのならそれに懸けるべきでしょう?」

桂木は真剣な表情で西川に顔を近づけた。ここまで言われては流石に西川も決断せざる終えない。

「……分かりました。他に方法が無い以上、そうするしかないようですね。皆を集めて下さい。地下への入口はあそこのコンテナの下にあるハッチです」

船着場の最西を指し、西川は仕方がなさそうに言った。

急に今度は地下に行くと言われても、悠樹は黙って従った。普段なら間違はなく眉間に皺を寄せて食ってかかるような状況にも関わらず、無言で指示通りにハッチから伸びた梯子を降りていく。別に友たちの気持ちを察したわけでも冷静に状況を理解したわけでもない。

ただ恐れていたのだ。

船着場に入ったときから、いや、一斑、二班の生存者と合流してから、悠樹は二つの感覚を感じていた。

死ぬほど何かを恐れているような恐怖の感覚と、異常なほど何かに執着しているような飢えの感覚。

一体誰が、何の目的でそんな感情を持っているのかは分からなかったが、とにかくその一方の感覚の強さは尋常ではなかった。

しつこく体に纏わり付き、吸着するように決して離れない。まるで愛憎のような、所有欲のようなネチネチとした気味の悪くなるような、そんな異質な感覚。

この感覚を感じてから、悠樹は自分たちの集団の中に何かが混ざ

っていると思つてた。何かが潜んでいると。

ここで下手に注目や視線を引きつけると、その何かが自分に目を付けそうで怖かった。恐ろしかった。

「兄貴……やっぱり兄貴も感じてるのか？」

梯子を降り、暗い下水道のような地下通路で他の面々が降りるのを待つてると、敏がそんなことを聞いてきた。悠樹は最初は意地を張つて否定しようとしたが、敏の余りにも不安そうな表情を見て素直に答えた。

「ああ。間違いなく何か変なのがこの集団に隠れてるな。さっきから背中がゾワゾワしてしょうがねえ」

「友さんに教えるべきじゃないか？ あの人なら俺たちの言うことを信じてくれるはず」

「言つてどうするんだよ？ 何も変わんねえぞ？ この集団を疑心暗鬼にするだけだ」

「でも、このままじゃ何か嫌なことが起きそうで不安なんだ。兄貴は平気なのか？」

「不安さ、不安でしょうがない」

珍しくあつさりと悠樹は自分の恐怖を認めた。

「だから、俺たちでそいつを特定しよう。友に言うのはこの気持ち悪いー感情を持っている奴を見つけてからだ。誰か分かれば対策の打ちようもある」

「見つけるって……どうやって、一人、一人尋問でもするっていうのか？」

「アホか、そんな真似してる暇があるわけねえだろ。…… 普段

はウザくてしょうがねえ感覚だけど、こんな時は役に立つ。周囲の奴らの言葉に耳を澄ませるんだ。感覚の脈動と言葉の調子が合えばそいつがこの『何か』の可能性が高い」

「分かった。大事になる前に見つけよう。こいつ……絶対人間じゃないよ。感じる感覚がおかしすぎる。まるで……さっきの人魚の殺意を感じたときみたいだ」

敏は本気で怯えているらしく、僅かに体を震わせながら言った。

「俺はイミユニティーの奴らを調べるから、お前は生存者を頼む。何か当てが付いたら教える。お前は人魚から結構酷い傷を付けられてんだ。無理はすんなよ」

「ああ」

敏はこくりと頷いた。

最後まで船着場に残っていた友が梯子を降り、先に降りていた面々の前に立った。それを確認した西川が小さな声で皆に指示した。

「では行きます。何かがあるか分かりません。皆さん、絶対に大声を出さないで下さいね」

それぞれ怯えや興奮、緊張の入り混じった顔で皆頷く。西川とその他三人のイミユニティーのメンバーはお互いに目で合図を送りあうと、慎重に通路の先へ歩き出した。

「何だか怖いわ」

そんな彼らの真後ろに付きながら、窪田が赤いベストから生えたような佐伯の腕を掴み、青白い顔で呟いた。佐伯は彼女を安心させるようにぎゅっと窪田の肩を握り締めている。

「けっ」

その背後では不快そうな表情をしながら羽場が歩き、次にトウヤ、岸本、佳代子、敏、イミユニティーのメンバー二人と続いている。

悠樹は友の目の前、最後尾から二番目を歩いていた。

「佳代子さん、大丈夫ですか？」

少々辛そうな佳代子の様子が気になり、敏は声をかけた。

「ああ、敏さん。……大丈夫よ、ちよつと足腰が痛いけどね。こんなもの、昔三キロの距離を泳いだことと比べれば何でもないわ」

「三キロ？ 水泳選手か何かだったんですか？」

「ふふふ、アマチュアだけどね。それなりにメダルとか貰っていたのよ。意外だった？」

「いえ、ちよつと驚いただけです。大人しそうなイメージがあったので……」

「初めて会う人はみんなそう言うわ。私は家で本を読んだりするより、外に出歩く方が好きなの。死んだ主人は行き先も言わないで勝手にどこかへ行くなつて、しょっちゅう怒鳴ってたけど……」

「そうなんですか。じゃあ、逆ですね。僕はどちらかというと家で本を読むほうが好きなんです。小さい頃兄からよくネクラとか、引きこもりとか言われてました」

「ふふ、確かにそんな雰囲気纏っているものね」

佳代子は笑った。

その顔を見ながら敏は佳代子は『侵入者』では無いと思った。あれほどの憎悪を持っている人間がこれほど優しい笑顔を見せられるはずはないし、何より感じている感覚と態度が噛みあっていない。きつと別の人間が発している感情なのだろうと判断した。

だとすれば残りは窪田、佐伯、トウヤ、岸本、羽場がイミユニティの誰かだ。イミユニティの面々はみんなお互いに顔見知りのようだから、侵入者が居るとすれば生存者の誰かの可能性が高い。変装能力がある生き物の可能性も無くはないが、そっちは悠樹が確かめている。敏は自分の仕事をしっかりこなそうと思った。

佳代子の言葉に相槌を打ちながら、さりげなく前の四人の会話に聞き耳を立てた。

「窪田さんは普段何している人なの？」

佐伯がこの暗い雰囲気をつらわせるように言った。

「私？ 私は音楽専門学校で学生をしています。最初は歌手志望だったんだけど、才能無いつて言われて、今はピアノを練習してるの」

「へえ、ピアノか！ 格好いいね。今度聞かせてよ。俺、絶対に聞きに行くから」

「でも……まだぜんぜん未熟なんです。始めたばかりだから」

「未熟とかどうでもいいよ。俺は窪田さんが引くピアノの音を聞きたいんだ。後でこの専門学校が教えてね？」

「……いいですけど、絶対に笑わないで下さいね？ 本当にまだ初心者なんですから」

窪田は照れたように言った。

この二人もありえないな。何か聞いているのが悪い気がしてくる。

敏は二人に注意を注ぐのを止め、今度はその後ろにいる羽場、トウヤ、岸本の三人に視線を向けた。この三人はずっと押し黙ったまま歩いている。

しばらく見ていると、不意に羽場がトウヤに話しかけた。

「なあ、あの二人どう思う？　こんなときにイチヤイチヤして何かウザくないか？」

トウヤは若干迷惑そうな顔で答えた。

「僕は別にどうでもいいですよ。さっきからやけにあの二人について文句を言いますね。一体何なんですか？」

「な、何ってほどのことじゃねえよ。ただ場違いだろ？　空気を呼んで欲しいだけさ」

「もしかして……窪田さんが好きだとか？　無理ですよ、あなたじやあね。歳が離れすぎてますし、あの人は佐伯さんに夢中だ。あなたの出る膜は無い」

「な、何だと!？」

トウヤの齒に物着せぬ言い方に、羽場は思わず大声を上げた。すかさず前方で先導している西川が冷たい視線を羽場に向ける。

「……っお前、喧嘩売ってんのか？」

西川に一瞥されたことで、羽場は若干声を落としながらトウヤを睨みつけた。

「事実を言ってるだけです。僕に突つかからないで下さい。八つ当たりですよ」

それでもなおトウヤは無愛想な態度で答える。どうやら別に相手が羽場だからというわけではなく、普段から口が悪いらしい。

ある意味すごいなと聞き耳を立てていた敏は思った。大人しい物言いであることを省けば、気の強さが兄の悠樹に近い。一度悠樹とトウヤが会話している所を見てみたいものだと感じた。

この二人はまだ良く分からなかったが、とりあえず最後の生存者に話しかけようと敏は前を歩いていいる岸本に声をかけようとした。

「ん？」

顔を岸本に向ける直前、一瞬トウヤと目が合った。

僅かコンマ数秒の時間しか見てはいないが、敏の背筋にぶわっと何か冷たいものが走る。

何だ今のは！？

勘が鋭い敏は共感覚意外でもそれなりに相手の感情や考えを察することが出来る。その勘が今トウヤを危険だと判断した。恐ろしい相手だと。まるで人間以外の何かが自分を見ているようなそんな感覚。敏は先ほど飲食エリアで見た野球帽の男の姿を思い出した。今思つとどこかトウヤはあの男と雰囲気似ている。

もしかしたらこいつが？

悠樹と友は数メートル後ろに居る。今なら余裕を持って話すことが出来るはずだ。敏は静かに歩く速度を落とし、悠樹たちの横へ移動しようとした。

「止まって」

その時、先頭の西川が振り向いて皆に呼びかけた。全員が足を止めたため、敏も後ろに下がれなくなる。

「どうした？」

最後尾から友が聞く。通路が暗すぎて敏の位置からでは友の顔しか見えない。

西川は若干緊張した様子で口を開いた。

「通路の終わりに付きました。この先は」

急に風が強くなったためよく聞こえない。敏は片耳を西川の方へ傾けた。するとようやく耳が音を拾い始める。

「セカンドブラック・ドメインです」

そんな言葉が聞こえた。

<第九章>セカンド・ブラックドメイン

<第九章>セカンド・ブラックドメイン

「何だそのセカンドブラックドメインってのは？」

岸本が聞きなれない言葉の意味を問い詰める。それに答えるように西川は説明を始めた。

「ここから生存できた場合、皆さんはイミューニティーの監視を受けるか、こちら側の仕事に就くしかありません。なので一般人ではないと見なし、皆さんが無事にここから脱出するためにも、ここかういった場所であるか説明させて頂きます」

なんだと？

悠樹はその言葉を聞き密かに怒りを募らせた。

自分の父を殺したに等しい組織で働くことなど、受け入れられないわけがない。ここを脱出次第大助の仇を討つために行動しようと思っていた悠樹にとって、これはかなりショックな言葉だった。

だが西川はそんな悠樹の心情など全く気づく様子もなく言葉を続けていく。

「ブラック・ドメインとは新種の微生物の巣のことです。皆さんがこれまで見てきた魚人や鼠魚は、地下深くにあるその巣から採取された微生物を利用して生み出されました。現在確認されているブラック・ドメインは全国に三つあり、ここはその二つ目 セカンド・ブラックドメインです」

「三つ？ そんな危険なものが三つもあるのか？」

再び岸本が聞いた。

「はい。一つ目……つまりファースト・ブラックドメインは屋内人工都市『常世国』に、三つ目のサードブラックドメインは皆さんの

記憶にも新しい、三年前に危険ガス発生区域と認定された富山樹海の中にあります」

西川はそこまで話すとチラリと友の表情を気にした。友は相変わらず無表情で聞いている。

「この水憐島は表向きには地下資源を汲み上げるための施設として作られましたが、実際は地底深くにあるブラック・ドメインから、その微生物を汲み上げるために作られた施設です。イミューニティーは長年それを隠しここを水族館として資金を集めつつ、同時に飼育している生物で細胞の実験をしていました」

「つまり、言いたいことはここから先にはその実験施設や実験体がいるから気をつけるってことか？」

長い話はウンザリだとも言うように羽場が西川の言葉を中断する。その態度にしかめっ面を作りながらも、西川は丁寧言葉に言葉を返した。

「それだけでは在りません。この先には地下のブラック・ドメインから微生物を汲み上げている巨大なパイプや、微生物を保管している容器などがあります。何の遺伝子改造も受けて居ない微生物は感染力が非常に高く、魚人などとは違って十秒間触れているだけで危険な化け物に皆さんを変えてしまいます。ですから例えどんな小さな容器でも、注射器でも、ここから先にあるものは絶対に触らないで下さい。もし感染者ができれば、例えまだ人間の状態でも私たちは迷わず殺しますので」

西川は脅すような目を生存者たちに向けた。

一軒鋭く冷たい目だったが、悠樹はその中に自分たちを手にかけたくないという気持ちを感じ取った。

「それでは、通路を出ます。数人ずつに固まって着いて来て下さい」
そういうと西川は廊下から足を踏み出した。

悠樹たちがそれに続くと、先ほどまでの暗がりとは一変して明るい場所に出た。円形のかなり巨大な空間で、中心にはぽっかりと穴が開いて吹き抜けになっている。その穴と通路の間に円柱状に強化

ガラスが張られているのは恐らく上階からの侵入を防ぐためか、内部の微生物を外に逃がさないためだろう。透き通ったガラス越しに下を覗いてみると、数十メートル下の穴底の中心に何やら直径三メートルほどのドームがあり、どうやらそれが先ほどの話にあった地下から微生物を汲み上げているパイプの最上端らしかった。

円状の壁に沿ってある程度進むと、科学危険物を示す黄色いマークが描かれた扉のような物があり、西川はその前で止まると懷からカードのような物を取り出し、扉の横に付いている機械に通した。

管理室や制御関係以外の場所なら開けられるように事前に頼んでいたから、これで大丈夫なはず。

そう思いつつも内心開かなかっただろうと神経を高ぶらせる。だが、そんな心配を他所に扉はあっさりと開いた。

「ふう、行きましょう」

安堵の溜息をつくと、西川は扉の向こう側にある階段、水憐島の最奥へと繋がる道へその身を移動させた。

「兄貴」

悠樹が階段を降り始めると、何時の間に移動したのか真横から敏が声をかけてきた。

「おう、どうだ？」

悠樹は視線を前に向けたまま小声で聞いた。

「確証はないけど……あのトウヤって男が怪しい。目があつた途端何か物凄く嫌な感覚がしたんだ。……兄貴の方は？」

「こっちは全員白だな。流石にプロだ。入れ替わってたらお互いに気づくさ。で、お前の感覚は確かなんだな？」

「ああ。さつき上で感じた人魚のような感覚とは違うけど……明らかに普通の人間とは違う何かを感じた。調べてみる価値はあると思う」

「そうか。まあ、こんだけ密集してるんだ。間違いつて可能性もあ

るけど、一応調べといてくれ」

「といてくれって 兄貴も手伝えよ？」

「いきなり同じ顔した男二人に詰め寄られたら警戒すんだろ？ 一人の方がいい」

「 そんなこと言って、面倒くさいだけだろ」

敏は小さな声で毒ついた。

「ん？ 何か言った？」

「はあ、なんでもないよ。分かった、兄貴もちゃんと他の人たちを見てろよ？ まだトウヤが『侵入者』か確定してないんだからさ」
相変わらず気だるそうな表情をしている悠樹を呆れるように見ると、敏は悠樹から離れていった。

…… 悪いな敏。俺には他にやる事がある。

それを見送ると、悠樹は懷から岸本からもらった写真を取り出した。勿論写っているのは横谷晶子の姿だ。先ほどの西川の言葉が脳裏に過ぎる。

「こいつと同じ組織で働く？ は、冗談じゃねえよ……」

父の最期を思い出し、忌々（いまいま）しげにその美しい顔を見つめる。悠樹は紛れ込んでいる『何か』の搜索を敏に任せつつ、実はずっと横谷晶子の情報を集めていた。勿論イミューニティーのメンバーに『何か』がいるか調べながらだが。

ここにいるイミューニティーメンバーの話だと横谷晶子の行方は不明とのことだった。恐らく逃げたか死んだんだろうと聞いたメンバーは皆一様に言っていたが、悠樹はそう思うことが出来なかった。何の理由も確信もないが、絶対に生きてまだこの水憐島の中にいると確信していた。いや、そうあって欲しいと願っていた。

敏の前では冷静にクールを装っていた悠樹だが、腹の底ではずっと大助の仇を討つことで頭がいっぱいだった。横谷晶子はあくまでこの館長でしかないことは分かっている。しかし誰かに当たらなければ、憎しみを押し付けなければ、自分を保てなかった。後悔と自責の念に押し潰されてしまいそうだった。

いや、きつと、岸本から横谷晶子の写真をもらっていなかったら
そうなっていただろう。ある意味、悠樹は横谷晶子のおかげで自我
を保っていた。

「それにしても……この顔なんか見覚えあるんだよな？ 何か最近
見たような……気のせいかな？」

写真を見てからずつと疑問に思っていたことだが、元々物事を深
く考えることが苦手なため、気のせいだと自分に言い聞かせ、悠樹
は写真をしまった。

それが、最悪の事態を招くとも知らずに

階段を降りきると実験室のような場所に出た。

左右の壁に沿うように円柱状の水槽が並び、その中に人間なのか
化け物なのかよく分からないような生き物が、黄色い液体と共に閉
じ込められている。

「人体実験か。こつも堂々と言うとは、さすがイミューニティー元幹
部の極秘実験室だな」

友はこの常識はずれな光景を見ると、僅かに嫌悪感を持った声で
呟いた。それを感覚によつてはつきりと感じた悠樹は意外そうに友
を見た。

「何だ？ こういう光景は見慣れてんじやねえのか？」

平気で魚人や人魚なんかの化け物を生み出す組織だ。日常的に人
体実験をしているのだらうという考えを抱いていた悠樹にとって、
友から感じる感情は予想外だった。

「見慣れてなんかいない。イミユニティー本部はあくまで国家の組織だ。表だってこういう行為を推奨したりはしない。イミユニティーの『一部』がこんな倫理を無視した行動に出れるのは、全て六角こうかく行成こうせいの威光があるからだ」

「六角行成？ 誰だそいつ？」

「イミユニティーのイグマ部門のボスだ。分かりやすく言うと、ブラック・ドメインから採取された細胞に関係する機関全てを指揮している存在のことだ。この男は家系的に国家に対して高い影響力を持っているから、国も下手に手を出せない状況にある。こんな実験が黙認されているのもそれが理由だ」

「つまり、裏の支配者的な奴ってことか？」

「そうだ。こいつをどうにかしない限り、この部屋のような実験は永遠に続けられる」

友は周囲の水槽を考え気に見渡した。それを見ていた悠樹は僅かに安心したように言った。

「俺はあんたのことずっと機械みたいな奴だと思ってたけど、ちゃんと人間らしい感情もあるんだな」

「どういうことだ？」

友は怪訝そうに聞いた。目を細めたまま顔を右に向ける。それに合わせるようにこちらを向くと、悠樹は何やら長年の親友のような雰囲気きふきで口を開いた。

「だって、俺の感覚が言ってるぜ？ 六角の名を出したとき物凄い憎しみが籠こもってるってな」

「憎しみ……？」

「後悔と悲しみが入り混じったような、身を引き裂きたくなくなるような強い憎しみさ。丁度今俺が親父の死に対して感じているような…… あんたも誰か近い人間をイミユニティーの所為で失ったのか？」

「……近い人間か」

脳裏にトラウマとなっている光景が映る。

宙を舞い、燃え盛る異形の怪物の口へと落ちていく坊主頭の少年。

最後に自分に向って微笑んだその悲痛に満ちた表情。

顔を歪め、泣き叫ぶ美しい少女。その視線の先にはたった一人屋上に残り、黒い化け物に覆いつくされていくボロボロの男の姿。

「……数日間しか行動を共にしていないから親しいとは言えないが、大事な相手を失ったことは事実だ」

友は遠くを見るように言った。

まるで記憶を、自我を、感情を置いてきてしまった場所を見るような目で。

その表情と流れ込んでくる感情の強さを理解し、悠樹は途中まで開けた口を閉じると、静かに友の顔を見つめた。

悠樹たちがいる実験室からそう遠くない場所。

海中地下深くに繋がっているパイプの上端。つまりイグマ細胞を汲み上げ保存用の機器に溜めている機械の横を、一人の白衣を着た男が通り過ぎた。

男はズンズンと一直線に進んでいき、この穴のような空間の一番端にある両扉の前で止まると、一瞬躊躇った後にそれを開けた。

中にはマンションの部屋一階分ほどの窪んだ空間があり、その中央に全身を鎖で封じられた緑色の人間のような者がいる。

「み、操さん」

白衣の男はその緑色の生き物に呼びかけた。

「先ほど監視カメラにハッキングして映像を見ました。横谷館長が、こっちに向っています。お、恐らく私が広くんに協力したことはバレているでしょう。このままでは殺されかねない……！ どうか助けて下さい」

白衣の男はその禿げた頭を緑色の生物に下げ、必死に頼み込んだ。だが、緑色の生き物は鎖の音を周囲に響かせるだけで何も答えない。しかも唸り声のような音を鳴らすだけだ。その様子に気づき、白衣の男は愕然とした。

「ま、まさかもう会話が出来なくなるまで細胞侵食が！？ そんな…… それでは、わ、私はどうすれば……」

「……しろ……」

操が突然言葉を発した。

「は？」

「俺を……カイホウ、しろお……」

「か、開放ですか！？ でも今のあなたは、いつ完全な化物になってもおかしく無い状態なんですよ？ 確かに開放すれば私と広くんは助かる可能性がありますが、もし館長に遭遇する前にあなたの自我が失われれば、逆効果にしかありません！」

「かあいホウしろおおう……おれを、カイホウ……しろおう……」

操は同じ言葉を繰り返した。それを見た白衣の男は、もはや操の自我が殆ど崩壊していることを悟った。

「駄目だ……！ これじゃ危険な存在を増やすだけだ。もう終わらだ……」

目の前にいる『生き物』は、人間とはかけ離れた存在へと確実に体を変化させている。どう考えても自分たちを助けられそうにはなかった。

男は立ち去ろうとしたが、数歩進んだところでふと振り返った。

「ま、待てよ……別に助けられなくてもいいのか！ 様は横谷晶子を足止め出来ればいい。鎖の拘束だってスイッチを切ってから解けるまでには時間がある。その隙に上の管理室まで行けば……に、逃

げれるぞ！」

嬉々とした表情を浮かべ、部屋の入口の横に設置されている台上のパネルを操作する。すると金属が擦れる音と共に、操を拘束していた鎖の壁際のロックが解除された。入口に近い方から順に壁から鎖が外れていく。

「よ、よし、これでいい！ 館長のことは任せましたよ操さん！」

最後にその声をかけると、白衣の男は小走りで部屋を後にした。

駆け込むようにこの大穴のような空間から隣の研究室へ滑り込んだ。

「あ、あとは管理室へ行つて逃げるだけだ！ ん？ こ、これは！？」

隣接している廊下の階段へと向おうとしたとき、先ほどハッキングに使ったパソコンの画面からこちらに向っている生存者たちの姿が目に入った。

「もうこんな所まで……これじゃ操さんが解放される前に追いつかれる！ な、何か他にも手を打たなければ……」

慌てて指を走らせ、何やら操作を始める。しばらく無言でキーボードを叩き付けた後に、決定キーを押した。

「こ、これでいい」

額から汗を流しながら満足そうに頷くと、白衣の男は自分の鞆を引つつかみながら部屋を飛び出していった。同時に、パソコンの画面には「実験水槽内への投薬完了」との文字が浮かんだ。

水憐島の最下層は操が居る大穴、悠樹たちが居る実験室、白衣の男が先ほどまで居た研究室の三つの空間から構成され、丁度三角形のような位置関係となってる。

そのため本来ならば実験室から研究室までは直接一つの扉を介して移動できるのだが、現在は何故かその扉の研究室側にバリケードのようなものがあるらしく、悠樹たちが研究室まで行くにはどうしても大穴空間を通らなければならなくなっていた。

「はあ、よりによって最も危険な場所を通らなければならいとは……ツイていないですね。桂木、一条、お願いします」

大穴のような空間には地底のセカンド・ブラックドメインと繋がっているパイプと、その中身を溜めるタンク、さらには様々な危険物が置かれている。西川は何事も怒らなければいいかと思いつつ、部下の二人に扉を開けるように命令した。

桂木と一条は扉を開けすぐに周囲を確認する。

「感染体はいません。大丈夫です」

コンテナや大型の機器の裏などを一つ一つ慎重に覗きながら、桂木が言った。

「あそこも一応見てきて下さい。私は彼らを先へと誘導します」

入口と向かいの壁に開かれた両扉を見てそこも調べるように言うのと、西川は生存者たちを引き連れて歩き出した。

実験室の中で水槽を見ていた窪田も皆が進んでいくのに合わせその場から離れようとする。

ピシッ……！

だが急に奇妙な音を聞いて立ち止まった。

「何かしら？」

反射的に先ほどまで見ていた水槽を振り返る。その視線は水槽内の男の腕の位置で止まった。

「え？」

亀裂があった。

直立不動していたはずの男の腕が水槽の側面に押し付けられ、そ

ここに小さな数センチメートルほどの亀裂が入っていた。

窪田が眉を寄せ不思議そうに見ていると、突如男の首がぐるんとかちらを向き真つ赤な口を開け叫んだ。

「ああがががががあがあがああっ！」

「な、なんなの！？」

途端に周囲のほぼ全ての水槽が激しく揺れ動き、中に入っていた人間のようなものたちが暴れ出した。

「これは　！」

友が素早く反応し、ナイフを構えながら皆を大穴のような空間へと押し出す。部屋に残っていた他のイミューニティーの人間三人も、それぞれ戦闘体制を取り友の横に並んだ。

「お、おい友！」

悠樹も残ろうとしたがそれを視線で制すると、友は背後の生存者たちを指して命令した。

「お前は他の人たちを守れ。この先にも水槽があるかもしれない！」

「……………分かった！」

悠樹はすぐに状況を察し、西川らがいる研究室の前の扉まで走り出した。

だが辿り着く直前、目の前に何かが飛び出し壁にぶつかった。

「なっ！？」

それは桂木だった。首が百八十度回転し、白目を向いている。どうみても生きては居ない。

ぞつとするような感覚を感じ、悠樹が桂木の死体が飛んできた方向を見ると、この穴のような空間の丁度端の方に見たことの無い奇妙な生き物が立っていた。

全身緑色の男。

それも肩から無数の長い腕を生やし、腰からも同量の足を生やした男。体中の肌からは大きな気泡のようなぶつぶつが浮かんでおり、

その顔には元々の目の上に左右それぞれ新たな目が作られている。髪は全て灰色に染まり、パンクロック歌手のように逆立っていた。

> i 1 6 3 0 — 2 2 4 <

「ま、また変な化物が出やがった！」

余りに奇妙な外見に寒気を覚えながら、悠樹は西川らの方へ走り寄った。だがどうやら研究室は内側から鍵が掛かっているらしく、西川たちも青い顔で立ちすくんでいる。

前には得体のしれない変な緑色の怪物、背後は水槽から飛び出してきた謎の人間もどき、悠樹たちは絶対絶命の状況に追い込まれた。戦うしかねえ！

悠樹が覚悟を決め大助から貰ったナイフを手にとつと、背後から誰かの呟く声が聞こえた。

「義兄さん……！」

義兄さん！？

誰が言ったのか確認しようと振り返ろうとしたが、その前に眼前の怪物が耳を劈くような声で雄叫びを上げ、こちらに向って突っ込んできた。

「ヴオオオオオオオオオオオオオオオオッ！」

<第十章>明かされた混入者

<第十章>明かされた混入者

雄雄しい雄叫びを上げて、阿修羅のような多肢を持った怪物が迫ってくる。

「みんな逃げて！」

西川が叫び、生存者たちはそれぞれ左右に分かれた。

「くそっ！」

悠樹は一直線に激走してくる阿修羅を睨み、咄嗟に左の方へ、友たちが謎の人間もどきと戦っている部屋の前に逃げた。

「こつちだ！」

同様にこちらに来ていた岸本が、壁際のコンテナを指差す。隠れようということなのだろう。迷わずその案に従った。

「ぐあああつ！？」

生存者たちを逃がすために中央に残っていたイミューニティメンバーの一人が、甲高い絶叫を上げた。切りつけようとでもしたのか、片腕を阿修羅の無数にある中の一本に握り締められ、そこが赤く腫れあがっている。

「は、離せえっ！」

鍛え上げた筋肉を活かし、手首を捻りながら自分の手を自由にしようとするが、それが達成される前にさらに別の腕が襲来し、あつと言う間に全身のあちらこちらを緑色の手に覆い尽くされた。

「ヴォオオオオオー！」

阿修羅は全ての腕に力を込め、その男の体を八つ裂きするかのよう上下左右に引っ張り始める。

「い、痛い　止める！　止めてくれええっ！」

「バキバキッ」という不快感極まる音が地下空間に木霊する。そしてそれと音楽を奏でるように男の断末魔が鳴り響いた。

「つつぐうあああああああああつ」

「ひ、ひいつ!？」

男の体が四散し、綺麗に清掃された床に付着したところで窪田は気絶しそうになった。

「窪田さん、しっかりするんだ!」

半ば窪田を引きずるようにしながら佐伯や敏、トウヤ、羽場は悠樹たちと丁度反対側の壁際へ逃げる。それと前後して、先ほどの部屋から友や他のイミユニティメンバー三人が人間もどきと戦いながら出てきた。

「はあ、はあ、こつちにも化物か、何だこの大サービスは!？」

メンバーの一人がぜいぜいと激しく息を吐きながら苦笑いする。

「友、研究室に鍵が掛かっています! 引き返せそうですか!？」

仲間の死体を踏みつけながら歩いてくる阿修羅に怯えながらも、西川は研究室への扉の前で佳代子を庇うように立ち、必死に冷静さを維持してそう聞いた。

「無理だ! 何とかして開けるしかない。俺がこの化物を食い止める」

「えっ? ちょっ 俺たち三人でこの量は捌き切れな……」

横で人間もどきと戦っていたイミユニティのメンバーが驚きの声を上げた。

「頑張れ」

無表情でエールを送ると、友は振り返ることなく阿修羅目掛けて走り出した。

「一人でやる気かよあいつ」

その様子を見ていた悠樹は歯を噛み締めると、覚悟を決めコンテナの陰から飛び出した。

「お、おい!」

岸本が驚き肩を掴む。

「離せ、イミユニティーのメンバーはもう五人しかない。俺たちが協力しないと全滅するぞ！」

「だ、だけど……」

「今あいつに死なれたらこっちの戦力はガタ落ちだ。もう守ってもらえる状況じゃないんだよ」

「…… だあゝ分かったよ！」

岸本は溜息を吐くと悠樹の肩から手を外し、走り出した。どうやら一緒に戦う気らしい。悠樹はその行動に満足すると、後を追った。

どうすればいいの！？

一直線に自分たちのいる研究室前に向って接近してくる阿修羅の人間離れた顔を見て、西川は自分が冷静さを失いつつあることを悟った。

心臓の音が頭の中で何度もノッキングし、思考を邪魔する。

西川は大型の生物兵器との戦闘に慣れてはいない。元々本部の事務組みとして仕事を始めたため、経験が僅かしか無いのだ。本来は争いを好まず大人しい性格の女性だったにも関わらず、何の因果か上司の過剰なセクハラを撃退した業績を讃えられ戦闘部隊へ配属することとなり、ここまでの地位に上り詰めてしまったのだ。その背景には元上司の嫌がらせやイミユニティーの戦闘部隊の人手不足という理由もあるのだが、何にしても西川としては不本意な昇級だった。一応イグマ細胞感染者に対する戦闘訓練や実践も十分に経験しているが、こういった大型の化物を一人で相手にしたことは殆ど無い。まるで初めて悪魔を見た一般人のように疎みあがってしまった。

西川が危ない……！

友は二人まであと数メートルという所まで迫った阿修羅に向けて自分のナイフを投げた。それは無数にある中の阿修羅の腕の一つに

叩き落され傷を負わせることは出来なかったものの、注意をこちらに向けることに成功した。

「こつちだ」

鋭く鷹のように目を細めながら阿修羅を睨みつける。

阿修羅は先に友を排除した方がいいと判断したのか、体の向きを西川たちからこちらに変えた。

「ゆ、友」

「西川さんは生存者たちを何とか逃がしてください。戦闘は俺の専門、あなたの専門は場の指揮だ。お願いします」

自分を庇うように飛び出した友の行動と言葉に、西川は冷静さを僅かに取り戻した。友に対する信頼の強さが精神を助けたのだ。

自分が訓練をつけた相手に助けられるなんて……情けないわね……。

西川は友のイミューニティー入隊初步時に戦闘のノウハウや訓練を教えた師でもある。そのときのことを思い出し、気を引き締めた。

「あれ？ 何かいきなり開いたわよ？」

不意に佳代子が場違いな言葉を呟いた。見るとその手には扉のノブが握られており、先ほどまではいくら頑張っても決して開くことの無かった研究室の中が見えるようになっていた。

え、何で……！？

開くはずがない。絶対に鍵は掛かっていた。わけが分からず佳代子の手の中にあるノブを凝視する。

「西川さん？」

自分の手をじっと見つめてくる西川を変に思ったのが、佳代子は怪訝そうな目を向けた。

「あ、えつとごめんなさい！ 佳代子さんは先に中へ入っていて。他の人たちを呼びます」

「分かったわ。ここに居たらいつ死んでもおかしくないものね」

体を震わせながら、佳代子は研究室の中に足を踏み入れた。西川はぱっと中を一望したがどうやら感染者はいないらしい。奥に潜ん

でいるかもしれないが、小さな戦争状態のこの場所よりは遙かにマシだろうと判断した。周囲に向けて出口が開いたことを大きな声で伝える。

「みんなこっちへ！」

「おい、何か開いたらしいぜ！ 急ごう」

中年の割にはどこか子供っぽい口調を滲ませながら、西川の声を聞いた羽場が嬉しそうに言った。トウヤ、窪田、佐伯は右側で繰り広げられている激戦を横目に、研究室の中へ駆け込んだ。敏も最初こそ悠樹たちを置いていくことを躊躇ったが、自分の体は人魚に負わされた傷の所為で、激しく動けないことが分かっているため、残っても足手惑いになるだけだと思い一緒に逃げた。

扉を抜ける間に友の方へ走っていく悠樹を見る。すると偶然悠樹もこちらを向いた。

さすが双子だな。

敏は苦笑いしながらも視線で悠樹に意思を伝える。悠樹はこちらを見つめるとただ黙って頷いた。

生き延びよう。

生きて大助の仇を討とう。

必ず 一緒にここから脱出しよう。

そう、気持ちを込めて。

自分と全く同じ顔、身を分けた双子の弟。敏の姿が研究室の扉の向こうに消えたのを見届けると、悠樹は足を速めようとした。前方に友がかなり苦戦している姿が見える。あのままではすぐにやられ

てしまっただろう。自分と岸本が行って勝てると思えないが、一人で戦うよりは良いはずだ。

「手伝いにきたぜ」と声をかけようとしたその時、真横から何かに吹き飛ばされた。

「うぐあっ!？」

床に体を打ちつけた後、急いで体勢を整えながらその犯人を見る。人間もどきだ。

イミュニティーのメンバーが戦っていた水槽から出てきた謎の生き物。

眼球の全てが真っ赤に染まり、体の所々から粘り気のある液体が滴り落ち、その皮膚はクラゲのように光沢を持っている。手の平や足のすねからはイソギンチャクのような触手が蠢き、口や胸からはゼリーのような固形物が垂れ流しになっていた。

悠樹が襲われたことを知った岸本は直ぐに駆け寄ろうとしたが、悠樹はそれを制した。

「友の方へ行け! 俺は大丈夫だ」

それだけ言うと、岸本と視線を合わせることなく人間もどきを前に据え、既に切れ味の大分落ちたナイフを構えた。その姿を見た岸本はそれ以上近寄ろうとはせず、素直に友の方へ走っていく。

「鼠魚、魚人、人魚……色々と倒して来たんだ。今更お前みたいな奴、どうでもねえよ!」

悠樹は一気にナイフを前に突き出した。怯えの無い力の籠ったいい一撃だ。それは深々と人間もどきの腹に吸い込まれ、血を噴出させる。はずだった。

「なっ!？」

ナイフの切っ先は人間もどきの腹に触れた瞬間、横に滑っていった。切り傷一つ作ることなく見事に振り切られる。

いくらナイフの切れ味が落ちていたとはいえ、これは普通ではない。咄嗟に横を見てみたがイミュニティーの三人も同様の有様だ。

どういう皮膚してんだよっ!

悠樹は舌打ちしながらナイフを投げ捨てる。どうせ効果が無い以上、持っていても邪魔なだけだと判断したのだ。

「チュオオオッ」

人間もどきは短い触手のびっしり生えた手を押し出すと、悠樹の頭目掛けてビンタを打つように振り払った。悠樹はその腕を屈むことでかわし、喧嘩で鍛えた渾身の拳を相手の腹に打ち込む。又メリとした不快感極まる感触を我慢し、腕を伸ばしきった。するとナイフの時とは違い、人間もどきは苦痛に顔を歪め腰を曲げる。どうやら斬撃には強いが、殴打には弱いらしい。殴り合いなら自分の土俵だ。悠樹は勝ち目を見つけ、口元を歪めた。

「馬鹿野郎！ 直接感染者に触れるな！」

突然真横で別の人間もどきと戦っていたイミユニティーの男に怒鳴られた。

「は？ 何だよ？」

ナイフが効かないなら殴るしかねえだと、悠樹は男を一瞥する。「さっきの西川さんの話を聞いていなかったのか？ 魚人以外の感染者は十秒感染するという危険があるんだ。十秒以上生身で触れるとお前も化物になるぞ。何か武器を探せ」

「探せつたっていつでもな……」

人間もどきが再び迫ってくる。悠樹はその攻撃を感覚を活かし避けながら、隙を見つけては周りを見渡した。だがやはりそう都合よく使えるものがあるわけは無い。

「様は触れなきやいいんだろ？ だったら……」

着ていた警備員の上着を脱ぎ、二つに千切る。度重なる戦いで大分痛んでいたので簡単に切れた。

「こうすればいい」

その二つの丈夫な布を両腕に撒きつけ、ボクサーのように構えた。人間もどきの感覚は単調で一定だ。悠樹は自分の共感能力をフルに使い、次の攻撃を予測し攻撃をかわしつつ合間、合間に急所に蹴りや拳を突き入れる。隣で戦っていた三人の男たちはそんな悠樹の

姿を呆れたように見た。いまだかつて素手で感染者と戦おうなどと考えた人間は見たことが無い。賞賛するべきなのか、馬鹿にするべきなのか判断に困っているらしい。

「チャアーツ！」

悠樹の的確な攻撃はタイミングよく何度も人間もどきの急所を捉えている。だが、流石にイグマ細胞によって強化された感染者だけあって、生身の人間の攻撃では大したダメージを与えることは出来ない。いくら拳を打ち込まれようと次の瞬間には平然と襲い掛かってきた。

「こいつ、タフな野郎だな！」

悠樹は徐々に後退し始めていた。いつの間にか位置が逆転し、どんどん壁際へと近付いている。

このままじゃ追い詰められる。どうにかしないと……。

僅かに焦りを感じながら、次第に激しくなってきた人間もどきの攻撃を必死に避け続ける。壁まではもう二メートルほどの距離しかない。あそこまで後退してしまたたら攻撃を避けることがかなり難しくなる。

壁まで一メートルというところまで来て、悠樹は先刻友の取った行動を思い出した。人魚を倒した時の、あの行動を。

「舐めんなよ！」

大きく振りかぶられた人間もどきの腕を腰を捻りかわし、その位置で回転するように相手の横に移動すると、服を巻きつけた片腕でその後頭部を掴んだ。

「死ね」

冷たい言葉を吐きながらいつきに人間もどきの頭を壁に叩きつける。何度も、何度も、卵を潰すように。

次第に壁に真紅の模様が浮かびあがり、人間もどきの動きも弱々しくなってくる。悠樹は最後に思い切り跳躍すると、その勢いのままに掴んだ物体を壁にぶつけた。ぐしゃりっと言う音が鳴り響き、人間もどきは崩れ落ちる。海岸にうち上がったクラゲの死体に似て

いるその姿を満足げに見下すと、何も言わずに友と岸本、西川がいるホールの中央へと向った。

横谷広の動揺はかなりのものだった。

イミユニティーに自分を監視している相手を殺させようと思っていたのに、まさか義兄である操が襲い掛かってくるとは全く予期していなかった。おかげでイミユニティーの保護とは離れ、役に立たない生存者たちと一緒にこうして研究室に立てこもる羽目になり、監視者を倒せる可能性のある人間が居ないという状況になってしまった。

これでは自分を監視している人間の思うがままとなってしまう。

「窪田さん、しっかりするんだ！」

左手から窪田を支えている佐伯の声が聞こえる。全く持って鬱陶しい。たかが気絶したくらいでそんなに慌てることないだろうと苛立ちを募らせる。

とにかく、このままでは不味い……あいつが行動を起こす前になんとかしなければ

そう必死に考えを巡らせた。

「ここにいるのは危険だ。友さんたちが戦っているとはいえ、いつあの化物たちが来るかも分からない。向こうからこっちの姿は丸見えだしね。かといって鍵をかけて閉じこもっても、長くは持たない。どうする？」

敏が扉に付いているガラス越しにホールの様子を伺いながら溜息

を吐いた。阿修羅は友、岸本、悠樹、西川が食い止めているから良いとして、イミユニティの三人の男は人間もどきを食い止め切れではない。止める事が出来ているのは精々四体で、残りの二体はホールを徘徊している。そのうちここまでやってくることになるだろう。

「先に上に行きましょう。そうすればあの化物たちもここには入らないんじゃない？ 扉を開けるなんて高等なマネ出来そうには見えないし、鍵は開けても閉めても大差は無いと思うわ」

「確かにそうかもしれないですね……でも、上にも感染者がいたらどうします？」

佳代子の提案に敏はあまり乗り気がなさそうに答えた。悠樹が心配でこの場から離れたくなかったのだ。

「ここに残っていても危険なんだ。俺は上に行く方が良いと思う」

トウヤがぶすつとした表情で佳代子の意見に賛成した。

敏はトウヤを人間以外のものだと思っている。彼の意見に賛成することはあまり好ましくなかった。何とか反対案を考えていると、目を覚ました窪田が追い討ちをかけるように呟いた。

「わ、私……こんな所に居たく無いわ……う、上に行きましょう」

「そうだな。今の窪田さんをこんな化物どもに近い場所に置かせるのは良くない。上に行こう」

窪田にベタ惚れらしき佐伯がすぐに賛同する。羽場は黙っていたが、これで三体一だ。ここで反対を訴えても皆勝手に上に行くだろう。敏は内心がっかりしながら頷いた。

研究室から階段をあげるとまず最初に目に入ったのは廊下だった。階段から一直線に次の階へ繋がる別の階段まで伸び、その途中には三つの扉が付いている。

「私、ちよつとお手洗いに言ってくるわね」

その内の一つがトイレだと分かった佳代子は、若干恥ずかしそうにそう言って駆け出した。

「あ、佳代子さん！」

感染者がいるかもしれないと敏は声をかけたが、佳代子は「大丈夫よ」と微笑んでそのままトイレの中に消えた。

「これだけ静かなんだ。何もいないって。とにかく休まないか？」

羽場の羨むような視線を無視し、窪田の腰を抱えたまま佐伯が目の前の扉を指す。そこには休憩室と書かれた札が掛けられていた。

「そうですね……これ以上友さんたちから離れるのも心細いし、ここで身を伏せましょうか」

敏は佳代子が入ったトイレの方へその事を大きな声で伝えてから扉を開けた。

部屋の中はいたってシンプルだった。

中心に大きな長机が置かれ、その周りにパイプ椅子が配置されているだけで他には何も無い。在っても本棚くらいだ。

「一応、もう一つの部屋を見て来る。何かいたら怖いからな」

皆がそれぞれくつろぎ出すと、羽場がそんな似合わない親切なセリフを吐いた。敏は怪訝に思いながらも黙ってその後ろ姿を見送った。ただの気まぐれだとも判断したのだ。羽場に構うよりも今の自分にはやらなければならないことがある。

入口から見て左側のパイプ椅子に身を沈めているトウヤに近寄ると、何気なく話しかけた。

「大丈夫？」

トウヤは目だけを意味ありげにこちらに向けた。その仕草に敏は心臓の動きを早める。自分が疑っていることを気づかれたのかと思っただのだ。

「大丈夫だ。あんたは？」

しかしトウヤは特に変な行動を取る事も無く、普通に言葉を返してきた。

「正直ちよつと疲れているよ。化物の一体に体を貫かれているからな。実は歩くのも結構辛いんだ」

「そうか、よくそんな体でここまで逃げてこられたな……」

「兄貴のおかげさ。兄貴がいなかったらとつくに死んでたよ。俺は運動音痴だしね」

「兄貴か…… 最初見たときは驚いたよ。俺、双子って始めて見た」

「そうなの？ 結構そこら中にいると思うけどなあ。俺が小学校のときも隣町の学校に居たし」

「それは偶然だって。普通は双子なんて中々居ないから」
意外なことになりフランクに話すトウヤ。

話している中に敏は段々と自分の抱いていた疑いに疑問を持つようになつてきた。

何か、普通の奴だな。さっき目があったときは確かに尋常じゃない気配をかんじたんだけど……まさか勘違いか？

トウヤに対する認識が変わってくる。

敏と悠樹の感覚は付近の人間の体感を感じるというものだ。その付近に居る人間が多ければ多いほどそれが誰の感覚か判別が難くなる。もしかしたら、別の人間が放った気配だったのかもしれないと急に不安になつてきた。

「なあ、佳代子さん遅くないか？ 羽場も戻ってこないし……」

考え込んでいると、机を挟んで反対側に座っていた佐伯が心配そうな表情を浮かべていた。

「確かに遅いかもな…… 見に行く？」

「そうした方がいいかもな」

何となく呟いた言葉にトウヤが相槌を打った。何かかなりフレンドリーになっている。気に入られたのだろうか、先ほどまでのトウヤとのギャップに敏は苦笑いした。

「俺はここに残るよ。窪田さんについていないといけないから」

「分かつてるよ。ワザとゆっくり羽場さんを探そうか？」

二人きりになりたいんじゃないのか？ そう意味を込めて敏は軽く笑みを浮かべた。

「おいおい、こう見えて俺は三十近いんだぞ？ 年上をからかうな」

早く行ってこい」

少し照れた表情を見せながら佐伯は片手を前後に振る。それを笑顔で見ると、敏とトウヤは部屋を出た。

「先に羽場さんの方へ行くか……」

羽場はもう一つの部屋を調べにいっただけだ。佳代子とは違い時間がかかることはおかしい。二人は顔を引き締めると、用心しながら隣の部屋へと進んだ。

コツ、コツ……二人の足音だけが耳に届く。まるで二人以外に誰も居ないかのようだ。敏は何となく心細くなった。

「開けるぞ」

トウヤが躊躇なく隣の部屋の扉を開けた。もう少し躊躇った方がいいんじゃないのかと思いつながら、敏は資料室と書かれた部屋の中を覗く。そして中の光景を見て驚いた。

「……羽場さん、居ないな」

一人で上に逃げたのか？

自己中心そうなああの男ならあり得ない事ではない。敏は咄嗟にそう考えた。だが……。

「きゃああつ!？」

いきなり廊下から佳代子の耳を劈くような絶叫が聞こえた。

「何だっ!？」

トウヤと敏は急いで廊下に飛び出る。トイレの方から何かが倒れるような音が鳴った。すぐさまそこに走ると、迷わず扉を開けた。

開けた瞬間、血だらけで床に伏せている佳代子の姿が目飛び込んできた。その前には見下すように一人の男が立っている。

「は、羽場、さん……?」

それは羽場だった。

激しく息を切らせ、猛獣のような視線を既に息の切れている佳代子に向けている。

「な、何で……何で佳代子さんを……」

驚く二人。だが、次の言葉を聞いてさらに驚愕した。

「こいつは……佳代子なんかじゃない」

憎憎しげに佳代子の下を睨んだまま口を開く。

「横谷晶子、だ」

はつきりとそう言い放った。

<第十一章>”阿修羅”

ケツァルコアトル <第十一章>阿修羅

「くそ、近づけない！」

友は顔面すれすれまで迫った緑色の豪腕を辛うじてかわすと、苦虫を噛み潰したような表情をした。

「あんなに沢山の腕の中、どうやって攻撃を当てりゃいいんだ。本当にこれ勝てんのか？」

先ほど殺されたイミユニティメンバーのナイフを握りしめながら、岸本が引きつった笑みを浮かべる。

「正面から後方からも完全に対応してくるな。こうなったら罠を作ってそれに嵌めるしかない」

「は、罠？」

「森林の中ならば落とし穴やトラップも簡単に作れるが、この無駄に広いコンクリートの上だとかなり難しい……お前、しばらく一人で戦ってくれないか？」

「いやいやいや、無理だから！俺にそんな真似出来るわけねえだろ、瞬殺されるぜ！」

友が本気でその意見を提案しているようなので、岸本は顔を真っ青にして反対した。

「おい、大丈夫か！？」

そうこうしている中に悠樹が二人の元に走ってきた。何故か自分の服を両腕に撒いているだけで何の武器も持っていない。

……あいつ素手でこの化物とやりあう気なのか？

「お前……はあ、これを使え」

友は呆れるような視線を悠樹に向けると、自分の握っていたナイ

フを投げ渡した。

「お、サンキュー！」

「悠樹、絶対に軽はずみにあの阿修羅に近付くな、あいつは近距離戦で生きるタイプだ」

「ああ？ そんなこと言われなくても分かってるよ。俺を何だと思ってるんだ？」

「馬鹿だ」

はつきりそう言いながら友は懐からワスプナイフWASP KNIFEを取り出す。人魚のときに一度使用したから、冷却ガスのストックはあと二発分しか残っていない。

「ばっ　？　喧嘩売ってんのか！？」

「来たぞ！」

悠樹の叫びを無視し、友は横に転がるように飛んだ。その直後、直前まで立っていた位置に阿修羅の拳が振り下ろされた。しかし友は体勢を整えると、顔色一つ変えず悠樹と岸本に指示を出す。

「あの腕をどうにかしないとこいつを倒すことは不可能だ。まず腕をいくつか削ぐ。協力しろ」

「どうするんだ？」

阿修羅を挟んで友と反対方向に居る岸本がささず聞く。

「こいつがここに放し飼いになっていたとは考えられない。恐らくこのホールか付近のどこかにこいつを拘束していた場所があるはず。あいつの体を見る。所々に鎖の痕のようなものが浮かんでいる。きっと大量の鎖があるはずだ」

「なるほど、その鎖で遠くから攻撃するんだな？」

「少し違うな。　西川さん！」

三人から一歩離れた位置で待機していた西川に向って、友は声をかけた。

「俺たちはここでこいつを食い止める。西川さんはこいつを拘束していた鎖を探してください。それで罠を作るんだ」

「罠？　鎖で？　……分かりました。無理しないで下さいね」

友の意図を理解した西川は敢えて深く聞かず、すぐに走り出した。
「何かあんたら、ただの上司と部下って感じじゃねえな、もしかして付き合ってたのか？」

二人の様子を見ていた悠樹が場違いにもからかうように呟く。

「あの人は俺の師で姉のような存在だ。変な解釈は止める。それに俺には好きな人が居る」

「え、マジで？」

「ヴオオオウウウッ」

おどけるような悠樹の声は阿修羅の雄叫びに遮られた。阿修羅は四つの目で悠樹を睨みつけると、複数の腕を交互に繰り出してくる。悠樹は阿修羅の『攻撃する意思』を察し、それをバックステップでかわしていく。

「ち、腕が多すぎるっ……！」

喧嘩慣れしている悠樹もこれほどの連打を浴びせられたことはない。皮一枚で避け続ける事がやっとだ。

悠樹のピンチを助けるべく背後から阿修羅に攻撃しようとした友と岸本だったが、やはりこれまでと同様、別の腕に妨害され、一撃も与える事は出来なかった。

「くおおおっ ……！」

悠樹は額に汗の塊をいくつか浮かべながら必死に後退する。防ぐことは出来ない。筋力が違いすぎる。もし一度でも阿修羅の拳を防げば、その瞬間に吹き飛ばされてしまうことになるだろう。腕を掴まれたらそれこそお終いだ。先ほどのイミユニティーの男のように引き千切られ、間違いなく死ぬことになる。

これマジでやべえな、どうする？

元々物事を深く考えるのは苦手な質だ。いくら考えても阿修羅を倒す方法は浮かばなかった。段々と中央からホールの中を実験室と反対側の壁際へ近付いていく。

あのまま下がれば西川が駆け込んだ奥の倉庫のような場所にたどり着いてしまう。友は西川に一任した作戦を成功させるためにも、

阿修羅をこれ以上前に進めるわけには行かなかった。

真横に置かれている楕円形の長机の上からガムテープと三つのレンチを掴み、ガムテープをレンチの柄にぐるぐると巻いていく。そしてある程度それ続けると、残ったテープを引っ張り紐のように伸ばした。

「本当はワイヤーかロープが欲しいところなんだがな」

不満そうに呟きながら、上空で振り回したその簡易ハンマーを阿修羅の後頭部に激しく数度叩きつける。接近戦で使用されるナイフとは違い、このハンマーには人間が接近してくるという気配がない。阿修羅はこれまでのように腕で防御する事は出来ず、思わぬ痛みに苦しんだ。

「ヴオオオアアア！？」

動き続けていた無数の足を停止させ、体の向きを半回転させる。

友は特にしてつやつたりといったような素振りなどは見せずに、無言で逆方向に走り出した。阿修羅は当然それを追いかける。

西川さん、急いでくれ。

逃げながら、友は頼みの綱である西川の作業がなるべく早く終わることを祈った。

一方、阿修羅が先刻まで捉えられていた倉庫の中に辿りついた西川は、部屋の床が小さなマンション一階分ほども下方にあることに軽い眩暈を覚えていた。

「何よこれ……梯子も無いし、こんなところをあんたたくさん鎖を持って上がらなきゃいけないの？」

罠を作るという作業の前に出現した思わぬ敵に頭を抱える。友がやろうとしていることは大体予想がついているが、これでは思っていたよりも時間がかかりそうだ。

「何とか、持ちこたえてね……」

盛大な溜息を吐くと、「何で私がこんなことを」などとブツブツ言いながらその溝になっている床に飛び降りた。

「何言ってるんだよ……佳代子さんが横谷晶子？　意味が分かんないって……」

地下二階の女子トイレの中で、敏は羽場の衝撃的な言葉が信じられず、そう呟いていた。

「仮にその人が横谷晶子だとして、何故お前がそれを知っている？」

敏の代わりにトウヤが静かに尋ねる。

「ふん、俺の気が狂ったとも思ってるのか？　生憎俺は正気だよ。こいつは間違いなくここの館長、横谷晶子だ。信じられないって気持ちも分かるけどな」

「嘘をつくなよ、何で佳代子さんがそんなことになるんだ？　冗談も大概にしるよ……」

じつと佳代子の死体を見つめたまま、敏は悲痛そうな表情を浮かべた。

親切で優しくかった佳代子。

泳ぐのが得意だと誇らしげに話していたあの笑顔は、今は青白く染まり血に塗れた床に押しつけられている。

「嘘じゃない。俺はこいつの家族だからな」

「家族……？」

「俺は横谷広、こいつの弟だよ」

羽場、いや、横谷広は苦笑いしながらそう呟いた。

「弟！？ い、いい加減にしろよ！ 横谷館長も、その弟もまだ三十代前後の年齢のはずだ。お前が弟のはずがあるか！」

羽場はどう見ても五十は超えている。佳代子が横谷晶子ということも、羽場がその弟の広であるということも、敏は全く信じる事が出来なかった。

「理由があるんだよ。つつてもこの感じだと言っても信じて貰えそうにはねえがな。おい、トウヤ。お前俺が窪田のことを好きだと言ったことを馬鹿にしてたな。歳が離れてるって……。生憎俺は窪田さんよりも年下だぜ？ 彼女はこの水憐島の常連者でね。俺は何度もここにくる彼女を見ている間に惚れちまったんだよ。それでも馬鹿にするのか？」

悲しそうな表情を浮かべて聞いてくる広の問いに、トウヤは何も答える事が出来ない。ただじつと何かを見極めようとしているかのようになにその目を見つめていた。

「ふ、まあ今更どうでもいいよ。こんな体になってしまったあの瞬間から、俺はもう自分の平穏な人生は捨ててるしな」

自嘲気味に笑いながら、広は手に持った刃物を二人に向けた。どうやらそれはガラスに布を巻いた物のようだ。

「な、何する気だ！？」

思わず敏はビクつく。その隙を逃さず広は一気に突撃してきた。
「っち！」

すかさずトウヤが渾身の蹴りを放ったが、広はそれを難なく片腕で掴みとると、ちゃぶ台を返すようにトウヤの体をひっくり返した。
「ぐわっ！」

そしてそのまま満身創痍の敏も肩で吹き飛ばし、トイレから飛び出す。

「ま、待て！」

腕を伸ばし、広の足を掴もうとした敏だったが、その手は見事に空を切った。

タタタタ……と足音が遠ざかっていく。

「追うぞ！」

先に立ち上がったトウヤに引き起こされた敏は、すぐにその言葉に頷いた。二人して女子トイレから飛び出し、地下一階へと続いている廊下の端、丁度トイレの右にある階段を駆け上る。すると目の前に小さな扉が現れ、そこを抜けると先ほどと同じようなホールを一望できる、壁際に作られた吹き抜けの廊下に出た。

「あいつ、もしかして管理室から俺たちをここに閉じ込める気なんじゃ……」

「急ごつ」

敏の考えに同意を抱いたのか、トウヤは敢えてあまり言葉を発さず、先に走り出した。道の先にはやはり先ほど同様の、洞窟のような暗い廊下が垂直に繋がっていることが分かる。恐らくはあそこから管理室に行けるのだろう。

ガラス越しに下の大穴を覗くと、悠樹たちが腕の無数に生えた緑色の化物から逃げ惑っている姿が見えた。

兄貴、死ぬなよ……

敏はその姿を目に焼き付けると、痛みが走る体を再び動かし、トウヤの後を追った。

ホールの中央まで戻った悠樹、岸本、友の三人は、そこに留まり円を描くように移動しながら阿修羅の複拳から逃れていた。中央には無数の大型機器がハの字のように並んでいる。それを利用し、機器の間に阿修羅を誘導することで機器を壁にし、攻撃を自分たちか

ら遠ざけることで逃げ続けていたのだ。

「おい友、西川さんに頼んだ罫作りって、こんなに時間が掛かるものなのかよ!？」

「すぐには出来ないが、それ程時間がかかる物ではないはずだ。慌てるな、もうすぐ来る」

「もうすぐっていつだよ?」

「俺が知るわけ無いだろ。それよりもこのままここで戦うのは不味い。あれを見ろ」

友は阿修羅の横に設置されている、直径三メートルほどのドームのようなものを指差した。

「あれは イグマ細胞だとかを汲み上げているタンクとパイプかな?」

「そうだ。万が一、阿修羅があのだームを傷つけるようなことがあればこのホール、いや、水憐島中にイグマ細胞が流出する。そうなれば魚人なんかと比べ物にならないくらい素早く危険な生物が溢れ出す。絶対にあのドームに攻撃を当てさせては駄目だ」

それを聞いた岸本は不満そうに文句を言った。

「駄目って言っても、ここ以外に戦えるような場所はないだろ。左はあんたの同僚がクラゲ人間と戦ってるし、右は西川さんが鎖で何か作ってるし……」

「南北が駄目なら東西だ。西は研究机などでゴチャゴチャしているから駄目だが、東の方にはコンテナの山がある。あそこで戦おう。上に登ることが出来れば、阿修羅の攻撃も今よりは楽になるかもしれない」

「良いけどよ、どうやってあそこまで行くんだよ。ここから離れるには阿修羅の動きを止めないと無理だぜ」

「……俺が囫になろうか?」

悠樹が遅しげに胸を張る。非常に頼りになりそうな雰囲気を出していたが、友は悠樹の放っている自信に何の根拠も裏付けも、考えもないことを見抜いていた。

「駄目だ。お前はどちらかと言えば後衛タイプ。白兵戦で力を発揮させる人間だ。囷は岸本にやってもらう。岸本は何か一つが秀でているわけじゃないが、それなりに色んな仕事をこなせる。お前よりは岸本を囷にした方がいい」

「え、俺!？」

岸本は目玉を飛び出さんばかりに驚いた。

「で、でも囷って何をすれば良いんだ？」

「心配するな。あの阿修羅をこっちに呼び寄せるだけでいい。呼び寄せたら俺と悠樹が動きを止める」

「何か考えがあるんだな？」

これまでの友の行動から悠樹はそう判断し、確信気に尋ねた。

「……分かったよ。どうすればいい？」

もう避けることは出来ない。岸本は涙目になりながら覚悟を決めたように友の目を見つめた。

「ベイト・トラップ？」

機器の裏から頭だけをひょっこりと飛び出させ、悠樹が怪訝そうに聞き返した。

悠樹と友の二人は今、それぞれ別の大型機器の裏に身を隠しており、機器の間の距離は五メートルほど離れている。そのため小声で会話するにはどちらかが身を乗り出さなければならず、現状では悠樹がその役目をこなしていた。

友は悠樹の飛び出た頭がいつ阿修羅の目に止まるかヒヤヒヤしながら説明を始める。

「餌で獲物を誘導する狩猟法のことだ。対イグマ感染者用のもつとも基本的な戦法であり、この場合は囷となる岸本がそれに当たる」

「んでそのトラップとやらの内容はどうなってんだよ？」

「今回は材料も時間も無いからな。単純明快な方法を使う。引きこみ、絡めるだ」

「はあ？」

「阿修羅は複脚だから足を引つ掛けたくらいじゃ転ばす事は出来ない。だから足と足を絡めさせる。悠樹、お前『ボーラ』って知ってるか？」

「俺がそんなマニアックそうな単語知ってるわけねえだろ」

「ボーラ……日本では分銅鎖とも呼ばれている投擲武器で、本来はロープなんかの両端に鉄球などの重りをぶら下げた物を指す。今はロープも鉄球も無いからな、代わりにこれを使う」

そう言つて友は悠樹にある物を投げ渡した。

「コンセントの束？ それに何だよこれ……？」

「近くに置いてあつたレンチだ。三つほど見つけた。これをコンセントの端に結べばそれなりの抵抗になる」

ちなみにコンセントは目の前の機器から抜いたぞと、友は聞いてもないことを丁寧に教えてくれた。友の前にある機器の赤いランプが激しく点滅していることがかなり気になったが、悠樹はあえて深く考えないことにした。

「こんなんで本当に動きを止められるのか？」

手に持った見慣れた生活用具に頼りなさを覚えた悠樹は、顔の前で不審気にレンチをぶらぶらと揺らした。

「これだけじゃ当然すぐに外れる。だから両端にナイフをつけるんだ。ほら」

友は腰から二本の小型ナイフを取り出し、一本を自分で持ち、もう一本を悠樹に投げた。

「それをレンチと垂直に端に結べ。上手くいけば楔くさになってくれる。そろそろ岸本が動き出す時間だ。投げる用意をしろ」

「あいつ、ちゃんとここまで阿修羅を呼び寄せられんだろうな。途中で死ぬなんてオチは笑えないぜ」

悠樹は岸本の作ったようにヘラヘラした顔を思い出し、疑いの眼差しをホールの中央へと向けた。

その中央では阿修羅がドームから離れ、ゆっくりと左へ進んでいる。どうやら悠樹たちを見つけることを諦め、奥で戦っているイミユニティーの男たちに攻撃対象を変えたようだ。男たちはもう三体のクラゲ人間を倒したようで、それなりに善戦していた。

「お、岸本が出たぜ！」

阿修羅が機器の輪から出かけたとき、岸本が悠樹たちから見て向かいの機器の裏から飛び出した。大きな足音を地面と演奏しながら必死の形相でこちらに向ってくる。その音が真後ろを通過したとき、阿修羅はようやく彼の存在に気がついた。

「ヴオオオオウオオオッ！」

すぐに回れ右をして岸本の背中に掴みかかる。だがその腕は服を掴みかけた途端、岸本のペースアップによって空を切った。

「……岸本のやつ意外とやるな」

イミユニティーの人間でも、土壇場であそこまで冷静に緩急をつけて対象を引きつけられる人間は少ない。友は僅かに驚いた。

「っおおおおおっ！」

友と悠樹が隠れている間の空間を一気に走り抜ける岸本。そのほぼ直後に阿修羅もそこを通り過ぎようとした。

「今だ！」

途端、友の掛け声と同時に阿修羅の左右から二つのボーラが投擲された。ボーラは旋回運動をしながらまず最初に阿修羅の複脚の間に滑り込み、その両端に括り付けられたレンチを周囲に絡める。阿修羅は勢い良く走っていたため思いっきり撒きついたボーラを引いてしまい、結果としてボーラに垂直に付けられた小型ナイフをその太股にしっかりと食い込ませることとなった。

「ヴウオオアアア！」

自分の足で自分の足を引っ掛けるような状態となり、阿修羅は見事に倒れこんだ。それを見た悠樹は歓喜の声を上げた。

「は、ザマ見る化物！」

「行くぞ、こいつが立ち上がる前に向こうのコンテナの上に登るんだ。あそこからコンテナを突き落としてこいつを潰す」

作戦が成功したというのにまったく表情を変えず友は走り出した。悠樹はほくそえみながら、岸本は荒い呼吸をつきながらその後続いた。

広が隠し階段を上り、管理室に飛び込むと、そこには白衣を着た中年の男が何やら忙しなく管理長用パソコンのキーボードを弄^{いじ}っていた。

男の髪の毛は真っ白に色落ちし、何年も洗っていないかのように油やフケが浮き出ている。山のように突き出た腹は、操作台の上でバウンドし、非常に邪魔そうだった。

「天野博士」

広は着ていたスーツと懷にしまっていた黒い野球帽を投げ捨て、その男の名前を呼んだ。

「ひっ！？ あ、何だ広さんか……」

広が管理室に入ってきていたことに気がつかなかったのか、男^{あまの}天野は一瞬驚きの悲鳴をあげた後に安堵の溜息をついた。

「横谷晶子は死んだぜ。俺の新しい服とあの薬は？」

「あ、ああ。ここにありますが。どうぞ」

天野は操作盤の上に無造作に置いていた深緑色のジャケットとズ

ボンを広に渡すと、懷からカプセル状の薬が詰まった瓶を取り出した。

その薬を一摘みし、口の中へ放り投げながら、広は何気ない様子で辺りを見回す。

管理室の中は自分が最後に見たときとは打って変わって地獄絵図のような光景を醸し出していた。デスクやパソコンの所々には無数の黒くなった血や肉片が纏わり付き、デスクとデスクの間や足元には職員やイミユニティーの増援部隊の死体がゴミのように転がっている。

「これ、全部姉貴がやったのか？」

広は着替えながら何気ない調子でそう聞いた。

「え、ええ……」

「そうか。運良く隙をつけて良かった。失敗していたら俺もこんなつていたんだな」

「まさか……よ、横谷館長はあなたにそんな真似はしませんよ。誰よりもあなたと操さんを愛していたのですから」

「ふん、愛してるだと……？ その愛が義兄さんをどんな状態にしたのか知っているだろ？ あんなのは愛とは言わない。ただの妄執心だよ。それで、いつまでここに居るんだ？ もう合流出来たんだし、さっさと水憐島から出ようぜ？」

自分が立てた計画では、後は天野とここを脱出するだけだ。横谷晶子の殺害にも成功した今、広はかなりリラックスした顔でそう言った。

次の天野のセリフを聞くまでは。

「そ、それが無理なんです。か、館長が管理室の前でも暴れた所為で……イミユニティー増援隊の死肉目当てに魚人が集まっているんです。今この扉を開けたらすぐに奴らの大群が飛び込んできます」

「な、何だと！？」

冗談じゃない！ 今脱出来なければイミユニティーの人間に拘束されてしまうじゃねえか！

広はこの水憐島を地獄にした張本人、いわばイミューニティーにとって重叛逆罪に当たる人間だ。このままここに助けが来るまで残っていては、自分の将来が悲惨になる事は目に見えていた。

「こ、こうなったら、あの黒服の男に来てもらいましょう。あの男なら魚人くらい簡単に殺せるはずです」

「無理だ。いくらあいつだって大群相手に一人じゃ勝てない。それにあいつは今別の仕事をしている真っ最中だ。俺たちだけで切り抜けるしかない」

「別の仕事？ あの男が私たちに横谷館長の殺害を持ちかけたんですよ？ 何ですか、その無責任ぶりは……」

「乗ったのは俺たちだ。あいつを責めるのは筋が違う。それに、あいつが約束を守ってくれているのなら、水族館地区の地下排水管には潜水具が置いてあるはず。文句をいうのならそれが無かったときにしろよ」

「……分かりました」

あまり納得がいてない様子だったが、広に逆らうことは出来ず、天野は小さな声でそう言った。

「でも、そうなると魚人が死体を食べ終わるまでここに閉じこまることになりますよ？ まだ生存者たちが何人か残って居るんですよ？」

「ああ、だがあいつらなんてどうにでもなる。最悪、あいつらを囚にして魚人たちの注意を反らし、その隙に逃げるっていう手もあるしな」

「う、上手くいきそうにはないと思うんですが……」

「なるようになるさ。何なら真実を教えてやろうぜ。この事件を起こしたのは俺だってな。どういう反応をするか見ものだ」

広が楽しそうにそう小言を述べたとき、同時に地下へと繋がっている隠し階段のハッチが開き、敏とトウヤが頭を覗かせた。

「あ、羽場！」

管理室の中に体を乗り出しながら、敏が気を張り巡らせたような

視線を広に向ける。

「よう、お前ら。よくここまで追ってきたな」

二人の予想は異なり、広はそれを快く迎えた。
嬉しそうに、嘲るような笑みを浮かべながら。

<第十一章>”阿修羅”（後書き）

アンケートを増設致しました。
興味を持った方は是非御覧下さい。

<第十二章>事件の真相

<第十二章>事件の真相

「随分な余裕だな」

管理室内に入るなり、自分たちを笑顔で迎えた広ひろしを不審に思い、トウヤが尖った声を出した。

「余裕？ 俺に余裕なんかねえよ。これは一種の諦めだ。脱出の見込みが遠ざかったことに対するな」

「……それは素直に降参してくれるっていうことなのか？」

『諦め』という言葉を自分たちに追い詰められたからだと思ったトウヤは、警戒体勢を維持したままそう確認を取った。

「なに、別にお前らの登場を苦に思ったからじゃない。この管理室の外にある死体の所為で魚人が集まって逃げられねえのさ。それに対する諦めだよ」

苦笑いする広。

「羽場さん。本当にあんたは横谷広なのか？」

敏がかなり疑いを持った目で聞く。

「……ああそうだ。俺は正真正銘、横谷広。この水憐島の館長横谷晶子の実の弟さ」

「悪いけど、俺にはとても信じられない。あんたが広だってことも、佳代子さんが横谷晶子だったことも……」

「お前がどう考えようとどうでもいい。これは嘘でも悪戯でも何でもない。……どうせしばらくはこの部屋から出られないんだ。

全部話してやるよ。この水憐島で、俺たち、いや、俺の家族に何があつたのかをな」

広はそう言うと、天野と視線を交え何かを確認しつつ、もったいぶるように話し出した。

約7ヶ月前。

ラフなジーパン姿にだらしく伸びた髪と無精ひげを携えた広が、水憐島居住区画の通路を歩いてた。その顔は若々しく二十代後半を思わせたが、崩れた格好の所為か一見すると廃れた不良のようだ。通路の角を曲がるとちょうど目の前に、館内の様子を確認するためか、何かメモのようなものを取りながら歩いている晶子と、その部下である柳に鉢合わせした。

「あら広、あなたがこんなに朝早く起きるなんて珍しいわね。昨日は遅くまでお友達と飲んでいたんでしょ？」

晶子は広の姿を見ると、先ほどまでの凛々しい表情は何処へやら、一変して世話好きな姉の顔になる。

「別に早起きなんかしてねえ、ずっと起きてただけだよ。それに、あいつはダチじゃない。あいつはただの媚売り。姉貴に近付くために俺を利用しようと考えてんのさ。まったく、イミューティーの中でも歴史ある横谷家の家長でこの水憐島の館長でもある姉貴が、あんたただの鮫のショー解説者を相手にするわけはねえのにな」

「こら、他人のことを悪く言っては駄目よ？ 単純にあなたと仲良くなりたっかつたのかもしれないだし」

「仲良くって……俺は小学生かよ。姉貴は自分がどれだけ人気を持つてるのか知らないのか？ 今やこの水憐島中の男は、殆ど姉貴のファンだと言ってもいいんだぞ？」

「ファンねえ。どうせ私の見かけに引かれただけのミーハーでしょ？ 嫌なのよね、そういうのって。私の性格も内面も考え方も、何も知らないのによく好きだなんて言えるわよ」

「人間っていうものは大抵そうだろ。義兄さんだって姉貴の顔がキングコングみたいだったら好きにならなかつただろうし、俺だって

美人以外には興味なんか無いしな」

「あ、佐伯さんだっけ？　そういえば今朝も熱帯魚の水槽の前で見かけたわよ。あの子ほとんど毎日来てるわよね。仕事してないのかしら？」

「あの人は小説家だよ。なんか随分甘い純愛ものを書いてるらしい。たしか、最新作品の題名は『白露の恋』だっけか？　ん？　何で姉貴佐伯さんのこと知ってたんだ？」

「あらま、広ったら随分詳しいのね。もしかして今日早く起きたのはあの子に会うため？　私のファンと飲んでいたのは彼女の情報収集のためだったりして？」

広の疑門の言葉を見無視し、長い薄茶色の髪を掻き揚げながら晶子はクスリと笑った。

「横谷館長、そろそろ会議のお時間です」

ずっと黙って晶子の横に付き添っていた柳が、無表情で晶子の耳に囁く。魔女鼻持ちとはいえ、決して顔立ちの整ってはいない人間ではないのだが、晶子の横に立つとどう見てもただの付き人の一人に見えた。

「じゃあ、私は仕事があるからもう行くわよ。あなただって操さんと一緒に館内用品の引き取りに行く予定でしょ。いつまでもそんなプータレみたいな顔してないで、ちゃんと身なりを整えなさいよね」

「誰がプータレだ。それよりも姉貴、俺の質問に答えろよ」

「さあ、何ででしょう？　そのうち教えてあげるわ」

ウインクをしながら去っていく晶子。広はちよつとだけむっとしたような表情を作ったものの、すぐに微笑み歩き出した。

ごく普通の日常。いつもと変わらない応対。

これからもこんな日が続き、そのうち自分も落ち着いてあの時は若かったとか、ありふれた言葉を言っただと思っていた。

そんな幻想を抱いていた。

晶子がおかしくなるまでは

ある日から晶子の口数は減った。まるで別人のように寡黙になり、

一人でいることが多くなった。

彼女のことを心配になった広と義兄の操は、なんとか彼女の元氣を取り戻そうと頑張ったのだが、その努力が報われる事は無かった。逆にその頑張りを卑下するように、晶子の言動や行動の異常さは時を追うごとに悪化していった。

先代館長から続いている、水憐島地下の極秘研究所に閉じこもることが多くなり、開発主任の天野博士と共に何やら新しい細胞の研究を始めた。

永遠の命。

永遠の若さ。

永遠の美貌。

それを実現するための実験を昼夜問わず行っていたのだ。

晶子の夫である操はさすがに心配になり、何度も彼女を強制的に止めようとした。しかし晶子は操の言葉など全く意に介することなく、自分の意思を貫き通した。

一体自分の姉はどうなってしまったのか？ 狂ってしまったのか？

広は不安と底知れぬ恐怖を感じ、晶子の長年の相棒である柳管理長を問い詰めた。

柳は最初こそ説明を拒んだが、広の意思に負け、また自分が溜め込んでいた不安感も相成ってとうとう観念した。

そこで返ってきた言葉は予想だにしないものだった。

原因は横谷操の不倫。それも自分より十歳は若い女性と。

とても信じられない。事実とは認めたくない言葉だった。

あの優しい操が、いつも姉と仲睦まじく微笑み込んでいる操が、とてもそんな真似をするとは思えない。何かの間違いだろうと必死に否定した。しかし柳の話し方はとても冗談を言っているようには見えない。一言一言苦痛を吐き出すように言葉を発している。

どうやら晶子はその現場に遭遇し、もろに二人の秘め事を目撃してしまっただけらしい。その所為で精神に深い悲しみと痛みを切り刻まれ、異常な行動を取るようになってしまったようだ。

操は一時の気の迷いだっただけで、すぐにその相手の女性とは別れ晶子に謝罪したそうだが、全く聞く耳を持たれず今のようない状態へと落ちてしまった。

もう三十代前半の年齢。

事件後から晶子は僅かに生まれつつある自分の頬の皺や艶の具合を、神経質なほどに気にするようになった。絶えず手鏡を所持し、頻りに化粧を直し、他人の目や噂を気にする。ちよつとでも若くて顔立ちの良い人間が配属されると、自分の権力や信者を使って彼女たちを操に近づけないように裏工作を施す。

日に日に異常性は増し、事件から数ヶ月が立つ頃には幻聴や、幻覚、悪夢まで見るようになっていった。もはや晶子を苦しめているものは操の浮気から自分の美が失われる恐怖へと、その原因を変えていた。

今の自分の人気も、他人の些細な優しさも、この充実した地位も全ては己の美の恩恵。そう考えるようになって言った。

だから彼女はそれを、己の美を維持するために、この現状を変えないために、永久細胞の発明に取り掛かった。

ありとあらゆる衰退から、老化から、衰えから解放された究極の美を持った人間を生み出すための細胞。

DEGAUSS・JAILデガウス ジェイルの開発に

操の浮気が、周囲の全貌の眼差しが彼女を追い詰めた。

美人の館長。

噂の横谷晶子。

美しく、凛々しく、才能溢れる横谷家の長女。

それらの押し付けにも似た、一方的な期待が彼女を狂気に追いやってた。

もし自分の美が失われたらどうなるのか。

老いたらどうなるのか。

今と同じようにみな接してくれるのか。

いや、くれるわけではない。

広も言っていた。

所詮人間は美を持つものに惹かれると。
ならば、それを維持するしかない。

継続するしかない。

永遠に。

永久に。

いつまでも。

それが、横谷晶子が考えた最終的な答えだった。

「しょ、晶子……お、お前……!!?」

一ヶ月以上地上に姿を見せない晶子が気になり、ある日、操はとうとう柳の静止を振り切つて地下の研究所　セカンドブラックドメインがあるホールへと踏み込んだ。

だが、そこで彼が見たものはあの美しかった晶子ではなかった。

一言で言えば『化物』。

彼女は全身を気泡だらけの緑色の肌に覆われ、体中から無数の腕や足が生やしていた。明らかにまともな人間の姿ではない。

「お前……一体何をしたんだ……?　本当に晶子なのか!」

広い地下ホールの中を一步一步退いでいく操を見ると、晶子は涙を流しながら答えた。

「そうよ操さん、私。この水憐島を指揮している館長、横谷晶子。

そして……あなたの妻だった女」

「そ、その体は何なんだ?　何でそんな馬鹿な真似を……」

「何ですって?　よくそんなことが言えるわね。全部あなたの所為でしょ?　あなたが私を捨てたから、私を裏切ったから、私はこんな吐き気がする、悪辣で、醜悪で、無様な人外の化物になったのよ!」

「お、俺の所為!　た、確かに浮気をしたことは悪いと思ってる。

だ、だけどいくらなんでもこれはやりすぎだろ」

ガンッ！

晶子はその複数の腕を付近の大型機器の上にめり込ませた。機器は激しく火花を上げながら燃え出す。

「ひいつ！？」

操は悲鳴を上げて座り込んだ。

「やりすぎ？ 私が好きでこんな体になったとも思っているの？
こんなはずじゃなかった。こんなはずじゃなかったのよ！ 本当
はただ年を取らない体になればいいと思っていた。なのに、何でこ
んなことに……………」

「わ、分かった。とにかく本部の研究員に来てもらおう。彼らなら
お前を治してくれるかもしれない！」

もう沢山だ！ 一刻も早くこの場から、この島から離れない
と……………！

あれほど晶子を愛し、寄りを戻すことを考えていたはずの操だた
ったが、もうはや頭の中では「いかに晶子から逃げるか」というこ
とだけを考えていた。おっかなびっくり立ち上がると、上へと繋が
っている階段がある実験室目掛けて一目散に走り出す。

「どこに行くの？」

しかし扉の前まで来た瞬間、首裏の襟を緑色の腕に捕まれた。振
り向くと、真後ろに冷たい目をした晶子が立っている。

「いや、だっ、だからその、…………本部の研究員を呼ぼうと思って…

…」

たどたどしく言いわけするが、明らかに苦し紛れだ。操は自分の
血の気が引くのをはつきりと感じた。

「何よ、怯えちゃって。あれほど遅しかった操さんらしくもない。
本部は呼ばなくていいわ。これはもうどうにもならない。私自身が
研究して作ったものだから分かるの。私はもう人間じゃない。死ぬ
まで永遠に化物のまま」

「そ、そんなのやってみないと分からないだろ？」

「だからね、操さん。私、考えたの。形はどうあれ永遠の命を手に入れたことには違い無いわ。もうこうなったら開き直ってこのまま怪物として生きて行こうって。反作用もあるけど、一応元の姿にも戻れるしね」

「そ、そうか」

にこりと晶子は笑った。

「操さん、私とあなたは夫婦。一生を誓い合った相手。覚えてる？あなたが私に告白した時の言葉。『俺は何のとりえもないただの一、事務員だ。本当ならお前とは全くつりあわない。だけどころなつたからには、どんな苦難が待っていようともお前を大切にして一緒に過ごすよ。この言葉に嘘は無い。結婚してくれ』 だったかしら？」

笑いかけながら操を掴んだ三つの腕を離すことは無く、晶子は残った腕の一本で懷から注射器を取り出す。

「な、何だそれは！？」

操はガタガタ震えながら晶子を睨んだ。

「心配しないであなた。これはデガウス・ジェイル。私の体にある細胞と同じ物が入っているの。これを使えばあなたも永遠の命を得る事が出来るわ」

「や、止める！俺は永遠の命なんて要らない！俺は人間がいい、人間で居たいんだ！」

「私を愛しているんでしょう？」

晶子は三つの腕で操を持ち上げ、注射器を持った腕をその大きく振り上げた。

「やめろおおおおお！！？」

銀色の針が鍛え込まれた肉を貫き、血管を潰し奥へ、奥へと侵入していく。圧倒的な絶望感に満たされながら、操は満面の笑顔を浮かべて微笑んでいる晶子を^{まぶた}瞼の裏に焼付け、気を失った。

現在。水憐島管理室。

「そんなことが……じゃあ、さっきの阿修羅みたいな怪物は横谷操なのか。あ、あんな姿になるなんて……」

広の話を聞いた敏は気分が悪くなり、口元を押さえた。

「義兄さんは、結果から言えば細胞の受精に失敗した。自我を徐々に失い、体も人間の姿に戻る事は出来ず、ずっと化物のまま。まあ、姉貴はそっちの方がよかったみたいだな。ずっと義兄さんを手元に拘束してられるし、なにより自分と同じ種に出来た喜びが大きかったようだ」

淡々とした口調で広が言う。

「その後、俺も義兄さんと同じように捕まったが、何とか身を守ることに成功した。そうだな……大体一週間くらい前の話か」

「ちよつと待て、それが本当の話だとしてなんでお前は老化しているんだ？ 注射を打たれたわけじゃないんだろ？」

相変わらず冷静に質問を出すトウヤ。その冷静さにつまらなそうな目を向けると、広は直ぐに答えを述べた。

「打たれたさ。だが俺はその直後に抗イグマ剤　その細胞を殺す薬を大量に飲み込んで、体の感染拡大を一時的に停止させた。だから人間の姿を保つ副作用である老化は進行したものの、さっきの義兄さんみたいに怪物になることも、強力な力を出すこともない。もつとも、定期的な服用が必要だけどな。　これでいいか？」

両手を左右に開き、「OK？」とジェスチャーをする。その、こちらを馬鹿にした態度にトウヤはイラつとしたが、ここで怒っても意味が無いため我慢し、再び広の言葉を待った。広はそれが当然のように話の続きを始める。

「俺は操義兄さんが姿を消してから姉貴を怪しむようになった。普通、いくらケン力をしているとはいえ、夫が何の音沙汰もなく消えたら動揺するはずなのに、姉貴にはそれが無かったからな。だから最近の言動のおかしさもあって疑いを持ったんだ。案の定、そこに

いる天野博士を問い詰めてみれば、全ては姉が原因だと分かったよ。おかげで事前に抗イグマ剤を大量に用意することも出来た」

天野博士は何かを思い出したのか、痛そうに自分の飛び出たお腹を摩さすった。

間を置かずに広は話を続ける。

「俺は一時的に感染進行を停止させることには成功した。だがあくまで一時的にだ。このまま体内にデガウス・ジェルを持ち続ければ、いつかは他の細胞が負荷に耐えられなくなって崩壊する。毎日また姉貴に誘拐されないかとびくびくしながら生きていた。逃げる事は出来ない。イミユニティーの情報網は強力だ。逃げ出しても直ぐに捕まる事は目に見えている。俺は人生を諦め、自決を覚悟した。……そんな時だ。あの男に会ったのは……」

「あの男？」

「一体誰のことだ？」

敏は不思議そうに尋ねた。その問いに、広は僅かに嬉しそうに答えた。

「黒服の大参謀さ」

一週間前。水憐島の会議室に、一人の二十代後半らしき男が来ていた。

警察特殊部隊の服と、カジュアルなジャケットやズボンを合わせて割ったような服装をした男だ。

広は水憐島重要関係者であるためこの極秘会議に呼ばれたものの、今回の会議の目的も男がやってきた理由も何も分かつては居ない。ただ男の正体だけは知っていた。

『ナグルファル』。

イミュニティーや複数のテロ組織の依頼を受け、大金と引き換えに命を賭けてまでイグマ感染者を滅する傭兵集団。通称「黒服」と呼ばれる組織の人間だ。

「態々（わざわざ）ご苦労さまです。一体あなた自らがここに何の御用でしょうか？」

今は人間の姿、元の美しい女性の姿を形成している晶子が、棘のある声を男に投げかけた。あまり長時間人間の姿でいれば副作用として一時的に老化するらしいが、今はまだ余裕があるようだ。操の失踪前と何ら変わらない芸術のような笑顔を相手に向けた。

目の横まである前髪を真ん中で一対一に分けたショートヘア。淵^{ふち}なしの楕円形メガネ。

エリート社員のような雰囲気を持ったその男は、同じく作った笑みを晶子に返すと、少々高めの声で説明を始めた。

「この場には僕と初対面の方も多数いらっしやると思いますので、まずは自己紹介からさせて頂きます」

そういつつ、全く隙の無い大きな目で横や正面に座った十人あまりの水憐島幹部^{くさかへくにひろ}を見渡す。

「僕は草壁国広^{くさかへくにひろ}、ナグルファルの取り締まり役です。以後お見知りおきを」

「一体何の用なんですか？」

横谷晶子が敵意を草壁に向けたためか、柳がいきなり晶子と同じようにツンとした態度で尋ねた。あまりに直接的な質問にもかかわらず、草壁は戸惑うことなく返事を返す。

「事前に書類でお知らせした通り、私はイミュニティー本部からの依頼を受け、この島の研究内容を本部へ通すためにやってきました。ご存知無いはずありません」

「その書類は無効となったはずです！こちらから自主的に技術を本部に提出することで纏^{まと}まったではないですか」

「ええ、確かに話は纏まりましたよ。ですが、あなた方はいつまで

経つてもその技術提出を行わない。これは重大な契約違反です。イミュニティー本部が態々黒服の幹部である僕を越させたのも、それが理由なのですから」

「どういうことですか？」

晶子は草壁の言葉が気になり、怪訝そうな表情で聞いた。

「イミュニティー本部は国家の正式な組織。無闇やたらに一支部を攻撃することは出来ません。それも全代表である横谷家の指揮する場所ならば尚更そうです」

「……なるほど、確かに黒服は傭兵集団。国家が存在を容認しているとは言え、国の管理下には置かれていない。黒服ならばこの水憐島で何を行つても、国からの責任追及は無いですからね。あなたに依頼をした六角行成の考えはそんなところでしょう」

「その通りです。ですが、それだけでは少し説明が足りませんね。

僕は先ほど『態々僕を』ここへ越させたと言いました。僕は実質上、白居学の次に大きな権力を持っています。そんな僕をここに寄こす意味は何だと思われませんか？」

丁寧な物言いだったが、明らかに脅し文句だった。横谷を初めとする水憐島の幹部たちは、皆顔を歪めて草壁を睨む。

「黒服の全能力を持って、この水憐島の情報を奪い取るうとでもおっしゃるのですか？」

しばしの沈黙のあと、再び横谷が口を開き、そう言った。

「いえ、そんな物騒で人材も資金もかかる真似は致しません。僕たちは暇じゃないですから。ただ、あなたの方が本部の以降をこれ以上無視することがあれば、少なくとも数十年にも渡つてこの場所が機能しなくなるような惨状は起きるかも知れませんがね」

そう言うつと、草壁は再びにこりと笑った。

「君。横谷館長のご兄弟ですよね？」

会議終了から二時間が経った頃。ぷらぷらと水族館内を歩いていった広を突然草壁の声が呼んだ。

あいつまだ居たのか？

広はその声に驚きながらも声がした方向を振り向く。しかし、そこに草壁の姿は無かった。

「あれ？」

戸惑い、辺りの一般客を見回す。

「ここですよ。どこを向いているんですか？」

「え、お前……？」

再び後ろを向くと、廊下のだ真ん中にスーツを着た綺麗なショートヘアの女性が居た。どうやら先ほどの声はこの女性から発せられたらしい。

「お、お前本当にあの草壁か……？」

「ふふ、そうですよ？ 驚きましたか？」

「お前……女だったのか？」

「今は、ね」

「今は？」

「どっちだろうとあなたには関係ありませんよ。僕の本当の性別を知っているのは二人しか居ませんし。それよりも、苦勞をしてこうして女性の姿に変えたんです。僕の話聞いて頂けますか？」

「え、話？」

半ば強引に連れ込まれる形で島内のフランス料理店に入ると、広はわけが分からず草壁に食事を奢らされ、その話とやらを待った。

なるほど、確かにメガネをとったらこんな顔をしてそうだな。

あの男。でも一体俺に何の用なんだ？ 大体俺の外見は老けて大分変わっているのに、何で俺のことが分かったんだ？ 会議でも名乗ってねえよな……？

「ふふふ、黒服を舐めないで下さい。そちらの事情は全部スパイを通して伝わっています」

広の考えを読んだのか、草壁はもぐもぐと口を動かしながら高めの声でそう言った。

「スパイ？」

「そうですね、それについても言わなければいけませんし……では、詳しく話させて頂きますよ。最初に述べておきますが、これは水憐島の存続だけでなくあなたの命にも関わる話です。決して軽い気持ちで聞かないで下さい」

「わ、分かった」

何となく男の姿をとっていたときとは違う態度と反応に違和感を感じながら、広は真剣に草壁の話の聞き始めた。

「それで、脱出の手引きと引き換えにこの島にバイオハザードを起こしたのか」

「ああそうだ。俺はこの島から自分の生きた存在を抹消し、別の人間として新しい人生を進みたかった。何よりもちようど潮時だったのさ。あのまま何も起こさなければ、俺はいずれ姉貴に化物にされていた。黒服に手を貸せば、この厄介な細胞の除去もしてくれるって言うしな。普通の人間だったのなら誰でも俺と同じ真似をするだ

ろうぜ」

トウヤの責めるような質問にも、全く怯むことなく言葉を返す広
「そんな、そんなお前の個人的な欲望の為に父さんは……ここを訪
れていた人たちは殺されたって言うのか……！？」

話の途中からずつとギリギリと拳を握り締めていた敏が、怒りを
露に呟いた。

「個人的な欲望の何が悪い？ 俺の義兄は個人的な欲望で殺され、
姉貴は個人的な欲望を完成させるために本部の要求を断り、ナグル
ファルを呼び込んだ。人間は生きている以上、己の欲望を満たすた
めに進むように出来ている。技術発明にしても、ボランティアにし
ても、その根本にあるのは欲望だ。欲望が無ければ便利な機器なん
か作られやしないし、他人を助けて自己満足に浸るような真似もし
ない。欲望があるから俺たちはこうして前に進み、生を実感出来る。
お前だつてそうだ。父の死という個人的な感情、仇を討ちたいって
いう欲望に従つて俺に敵意を飛ばしている。人間は汚く醜い生き物。
誰しも自分を正当化し、他人を見下したがる。お前も俺と同じだよ。
ただ自分の命に対する欲望か、別の命に対する欲望かの違いだけな
のさ」

まくし立てるように広は叫んだ。

その叫びを聞いた敏の仲で何かの糸が切れた。

そんな理由で。

そんな内輪揉めの問題で。

何の罪も無い人たちを、自分の父を。

兄と父の数年来の再開を。

自分たちの全てを無駄にしたのか？

許せない。……絶対に許せない！

「屁理屈を……だつたら、俺が自分の欲望のためにお前をここで殺
しても文句はないよな！」

敏は怒りに身を任せ、一気に地面を蹴ると、傷だらけの体だと思
わせないような俊敏な動きで、広に殴りかかろうとした。一歩遅れ

てトウヤも走り出す。

「天野！」

広は白衣の男の名前を大声で呼んだ。
ずっと壁際のパソコンを弄^{いじ}っていた天野はその声に反応し、慌ててデスク上のキーを数度乱暴に叩いた。

硬く閉ざされていたはずの正面扉が、天野の入力に応じて自動で開いていく。

「チュウアアッ！」

すると待つてましたとばかりに六体の魚人が飛び込んできた。

「お前ら何を！？」

まさか自ら魚人を仲へ入れるとは思っていなかったトウヤは、当然その行動に驚く。だが広はかなり冷静な態度で答えた。

「俺の体には僅かだがイグマ細胞が、デガウス・ジエイルがある。

普通の人間たちが一緒にいるのなら、俺が率先して襲われることは殆ど無いのさ。残念だったな」

「な、何だと？」

一瞬にして部屋中に六体の魚人が溢れ、トウヤ、敏を狙って動き回る。その姿を楽しそうに一瞥しながら、広は天野と共に管理室の扉を潜り抜けようとした。

その時だった。

「どこへ行くの広？」

ソプラノのような美しく高い声が管理室の中に響く。

どんな名楽器にも負けないような優雅で凜然とした、忘れたくても忘れられないあの声が。

そんな、まさか！？

声の主を確認する前に広の体は宙を舞い、一気に部屋の奥へと引っ張られた。

「な、何だ！？」

魚人から逃げていた敏はいきなり長い緑色の腕が広の体を掴み、引つ張ったため仰天して動きを止めた。

腕の先を見ると、遠くに進むごとに段々と白く人肌の色になっていき、妙齡の女性の肩へと繋がっている。

「あ、あいつは」

トウヤがその人物の正体に気がつき口を開く。だがそこから言葉が発せられる前に広が恐怖に震えた絶叫を上げた。

「横谷晶子おおお!？」

<第十三章>悲壮と愛憎

<第十三章>悲壮と愛憎

「掴まれ！」

悠樹は一段目のコンテナの上から腕を伸ばし、岸本を引き上げた。岸本は阿修羅から逃げていた分、悠樹よりも多く体力を使用しているため中々登れなかったのだ。

「あの怪物は？」

登りきると同時に、背後を振り返りながら阿修羅を探す。

「丁度ボーラを外せたみたいだな。直ぐにやってくるぞ。二人とも早くこつちに上げれ。ここにかなり重そうなコンテナがある。これを頭に落とせばあの怪物も無事では済まないはずだ」

積み木状になっているコンテナの地上から二段目、悠樹と岸本がいる場所よりもさらに一段上の位置から友がそう声をかけた。その前には赤い大きな立方体型コンテナがあり、廃棄用実験機材と書かれた札が打ち付けられている。

「もつと重いのもあるが、生憎二段目にしかない。今はこれを使うのがベストだな」

「あいつがこれに潰されなかったり、避けたりしたらどうするんだ？　こんな狭くて高い場所……俺たち自分から墓穴を掘ったことになるんじゃないか？」

「悠樹、ここは別に不利とは限らない。上下左右から迫ってきた阿修羅の攻撃を下方からの一方向に制限出来るし、それにいざとなったらあいつを飛び越えればいい。幸いなことに、あいつの足はあまり速くはないからな。逃げ切れるはずだ」

「飛び越えるって……ここ結構高いんだけど？」

「パルクールやでぐり返しの要領で受身を取れば無事に降りれる。心配ない」

「いや、俺そんな妙な技習ったことないから！俺ら一般人を訓練を受けたお前らと一緒にすんなよ！」

「お前なら俺の体感を模倣するだけで出来るんじゃないか？それに、確証は無いが……岸本も少しは経験があるように見える」

友は意味ありげに岸本を見る。それに対して、岸本はちよつとだけ不安げな表情を見せた。

「まあ、学生時代は体操部だったからな。多分、やろうと思えば出来ると思うぜ」

「マジかよ……」

「決まりだな。ほら、あいつがやってきたぞ、手伝え！」

二人が二段目に登ったのを確認すると、友はコンテナの側面に両の手を付き、全身を預けるように押し始めた。

「ヴォオオオオッ！」

タイミングよくコンテナ山の前に阿修羅が駆け込む。悠樹は声を出して、阿修羅が自分たちが落とそうとしているコンテナの下に来るように上手く誘導した。

「今だ！押せ」

友の合図で、三人は力いっぱいコンテナを前に押した。赤いコンテナは下のコンテナと摩擦音を奏でながらゆっくりと空中に飛び出す。

阿修羅は始め前側の四本の腕でそのコンテナを受け止めようとした。しかし落下加重が加わったコンテナは、いくら人外の怪物と言えども四本で支えるには重すぎたらしく、阿修羅は紙風船が潰れるようにあっという間にその姿を消した。

「やったぞ！」

悠樹が嬉しそうに笑う。だがその笑みは直ぐに消えた。
「ヴォオオアアアアア！」

重低音の鳴き声と共にコンテナが持ち上がった。斜めに傾きなが

ら徐々に横にズレていく。コンテナが完全に床の上に下ろされると、腕を二本だけ捻じ曲げた姿の阿修羅が出てきた。

「あ、あれだけ重いものを頭に落とされて、腕が二本折れたただかいよ……！」

絶句する岸本。しかし友はあくまでも冷静に対処した。

「二本奪えたと喜べ。マイナス思考では長く生き残ることは出来ない」

阿修羅はそのまま残った腕を真上に伸ばし、三人を手当たり次第に驚掴みにしようと振り回し始めた。

「うわっ！？ あぶねえ！」

わしゃわしゃと無数の腕が下から触手のように押し寄せる。コンテナが二個分ほど立ち位置に差があるとはいえ、阿修羅の腕はかなり長い。すぐに三人の身は危険な状態になった。確かに阿修羅の攻撃支点は一方向からのみなのだが、これでは対処出来ないことに変わりない。

「くっ！？」

「下がれ！」

悠樹がとうとう三本の腕に拘束されかけたとき、友が叫びながらワスプナイフWASPKNIFEをその緑色の腕に挟えぐり込ませた。激しく、黒っぽい血が腕から吹き出る。

ガシュッ！

ナイフの周囲が白いガスに包まれ、それが埋まっていた腕が盛大に吹き飛ぶ。阿修羅は悲鳴を上げて悠樹から腕を遠ざけた。

くそ、ワスプナイフWASPKNIFEのマガジンは残りひとつしかない。

この調子だと止めを刺す前に使い切ってしまう……！

友は軽く舌打ちした。

「これで、あいつが動かせる腕はあと何本、なんだ！？」

阿修羅が一旦引いたことで息つく暇を得た岸本は、途切れ途切れの言葉で聞いた。

「あと七本だ。今なら下に逃げることも出来るが、それだとこれ以

上腕を削げなくなる」

「でも、この状態でどうやってさらに腕を減らすんだよ？ 俺たちナイフしか武器が無いんだぜ？」

「……そうだな」

友は答えに詰まった。

イミニティー、黒服、ディエス・イレがナイフを標準装備しているのは、持ち運び易いという理由が大きい。日本では銃器を持つ者は少ないし、使用すると嫌でも目立つ。公共の場でイグマ細胞が散布された時にバンバン銃を撃って行動すれば、すぐに感染範囲外に居る人間からも注目を集めてしまう。そうなれば極秘の組織としては行動できなくなるし、何より大量に銃器を取り入れればその分他国やテロ組織、その種の企業から目を付けられるようになる。また銃声は人だけではなく感染者をも引きつける。感染者は一体一でも倒すことは一苦労だ。銃の弾はすぐに無くなる。長期に渡って無数の感染者を相手にするのなら、銃に頼る戦い方をするわけにはいかない。他国ならある程度手はあるだろうが、弾の補給を考えれば日本ではどうしても銃の使用は好ましくなかった。黒服などはその切れ味から止め用の武器としてナイフを使用することが多いが、イミニティーやディエス・イレは護身用装備としてナイフが当てがわれているに過ぎない。だから通常はその場、その場で利用出来るものを見つけ、武器として使用するのが一般的だ。

だが、今この場所には利用出来るものが無い。遠くにある椅子や机、パイプを加工すればナイフと合わせて槍ぐらいは作れるだろうが、そんなことをしていれば武器の完成を見る前に阿修羅に殺されてしまうだろう。

「西川さんが来れば一気に減らすことが出来る。それまでここで待ちこたえるしかない」

友は悩んだ末にそう答えるしかなかった。

「なあ、一体何を作らせてんだよ？」

左手に立っていた悠樹がしかめっ面で聞いた。西川が作っている

ものが本当にあの阿修羅を倒すことに繋がるか、心配になったからだ。友は下で体勢を立て直している阿修羅を見ながら、完結に答えた。

「一種の霞網^{かすみあみ}だ。阿修羅は自分に迫るものを、何であろうと掴もうとする傾向が見られた。だからその習性を利用する。大量の鎖を簡単に編み込んだ物をあいつに被せ、動きを封じる。その状態ならばこちらの攻撃も難なく当たるはずだ」

鳥は飛び立ち、羽ばたきを始める直前まで足で何かを掴み続ける。その習性を考えて編み出されたのが霞網だ。霞網に止まった鳥は飛び出す反動を得ることが出来ず、そのまま死ぬまで網にぶら下がり弱っていく。

「ってことは、その鎖をあいつに被せるためにも、ここから降りるわけにはいかないんだな」

何故友がこの場所を戦闘空間に選んだのかその真意を知り、悠樹はよくもまあ、ここまでいくつも策を瞬時に思いつく、と舌を巻いた。

「ヴォアアアアア！」

使い物にならなくなった三本の腕をだらしなく垂れ下げ、阿修羅は残りの七本の腕を大きく広げると盛大に吼えた。

「また来るぞ！」

岸本がその声に身を縮こませ壁際に下がる。それと対照的に悠樹は余裕ある態度で阿修羅を嘲った。

「おうおう、随分怒ってんな。はつきり感じるぜお前の気持ち。化物でも怒ったりするのか」

感覚が知らせる。

こいつは怒っている。自分の腕が切断されたことに。思うように獲物をしとめられないことに。

「だけどな、俺の怒りの方が何倍も上だ。いい加減、退けよ。俺は横谷晶子を屠^{ほふ}んなきゃいけねえんだ。お前、邪魔なんだよ」

ミサイルのような速さで飛び出してきた緑の腕を膝で弾き反らす。

タイミングはばっちりだった。共感感覚で理解しているのだから当然だ。

悠樹はそのまま数度腕に切り付け、阿修羅の黒い血をコンテナの上に撒き散らした。

「悠樹、あまり近付きすぎるな！ 油断しているとやられるぞ！」

そのあまりの無鉄砲ぶりに友が注意する。

「うるせえ！ 俺はさっさとこんな場所から離れて、オヤジの仇を討ちたいんだ。こんな怪物にてこずってる暇はねえんだよ！」

悠樹は半ば強引に阿修羅の攻撃をかわし、少しでも相手の腕にダメージを与えようと奮闘した。

感情的になり易い奴だ。

友は自分の性格を反転させたような悠樹の無謀な行動に呆れた。いくら悠樹が超感覚者とはいえ、あれではそう長くは持たない。超感覚者は所詮は人間に過ぎないのだ。感覚があっても、その身体能力も脆さも一般の人間と何ら変わることはない。阿修羅に一度捕まってしまうば、その瞬間に例え超感覚者だろうと簡単にバラバラに分解されてしまうだろう。

今の悠樹は阿修羅の感覚に共感している所為で、その怒りに同調してしまっている。

共感能力の唯一の弱点。それは自分の精神が感覚を共有している対象の影響を受けてしまうということ。心理訓練を受けたり、精神力が強い人間ならば耐えることは出来るだろうが、今日始めて感染者との戦闘を経験した悠樹にはどうしても感覚に体を支配され、相手の感情に引つ張られてしまっている感がある。友はそれが悠樹の無謀さを助長していると睨んだ。

「あつ、西川さん 出てきたぞ！」

二人よりも一歩後方にいたため余裕があつた岸本が、斜め左の方に西川の姿を見つけた。西川は無数の鎖を引きずりながら汗を流してこちらを目指している。

「あのままじゃ不味い。西川さんの筋力じゃここまで鎖を持って上

がることも、鎖を投げ渡すことも出来ない。誰かが変わりに下に降りるしかないな」

眉間に小さな皺を刻みながら、友が残念そうに呟いた。

感情的になっっている悠樹ではミスする可能性がある。かといって岸本でも下に降りてから阿修羅に殺さる確率が高い。

「……俺がやるしかないか」

現状でもっとも作戦を成功させられる人員は自分だけだ。友は岸本に悠樹のサポートを頼むと飛び降りる準備を始めた。

数歩後ろに下がり、距離を取る。そして呼吸を整え、阿修羅の動きを読みながらと一気に走り出した。

金属製のコンテナの側面を激しく踏み、高く、高く飛び上がる。迫り来るコンクリートの床を眺めると、腰を捻りながら前転するように体を地面に転がした。丁度阿修羅から三メートルほど離れた場所だ。

「ヴォアッ？」

すぐに阿修羅が反応し、顔をこちらに向ける。この距離で飛び掛られたら避けることは出来ない。まだ体勢を立て直してない友は頬に一筋の汗を流した。

「お前の相手は俺だろ！」

悠樹が怒号をあげながら手を伸ばし、コンテナの前で浮かんでいた緑の腕を切り付ける。その痛みに阿修羅は視線を友から外した。

ナイスだ、悠樹。

友は悠樹に感謝しつつ、西川のところへと向う。

「友、これを！」

西川は緊迫した表情で無数の鎖の塊を友に渡すと、阿修羅の方を眺めた。

「これが上手く効くと良いんですけど……」

「ありがとうございます、西川さん。阿修羅が上からこれを被ったら、鎖を掴んであいつを拘束するのを手伝って下さい。それと、それには俺たちだけの力じゃ足りない。向こうで戦っているイミュニ

ティーの仲間ももうすぐ手が空きそうだ。今のうちに彼らにも強力
の要請を」

「分かりました」

長話はせず、西川は直ぐにクラゲ人間と戦闘をしている仲間の元
へと走っていく。

さあ、一発勝負だ！

友は鎖の束を肩に乗せると、鋭く光る目を覗かせながらコンテナ
の方へ戻り出した。

「悠樹！」

岸本が叫んだ。

無理が影響したのか、悠樹はとうとう阿修羅に捕まってしまった。
肩を、大きくて醜い緑の腕にがしつと掴まれている。

「このっ……！」

すかさずナイフをその腕に立てようと振り上げるが、その腕もま
た捕まれてしまった。

やばい！ 体が裂かれる！

先ほどバラバラに八つ裂きされたイミューニティーの男の姿を思い
出し、ゾツとする。徐々に強くなっていく左右の拘束がそれを一層
実感させた。

「止めるお！」

腕を振り回しながら岸本が阿修羅の腕に斬撃を浴びせるが、距離
がある所為か殆どが浅い切り傷にしかない。その間にも悠樹の
体は大の字に開いていく。

「ミシミシ」と骨が鳴り、筋肉が引きつる。悠樹はまだ僅かな力
しか込められていないというのに、そのあまりの痛みに悲鳴を上げ
た。

「ぐあああああああつ！？」

両腕は動かす事が出来ず、足は空中に浮いている。出来る事と言
えば、ただ前後にぶらぶらと揺らす事だけだ。もはやなす術が無い。

「ヴウウオオオオオオオ！」

やっとこの手に抱くことの出来た獲物の感触に、横谷操もとい、阿修羅は喜びの雄叫びを高らかに上げた。

「あああああああああつ!?」

断末魔のような絶叫へと近付いていく悠樹の悲鳴。その音響のさなか、ぐぼつと鈍い音が鳴る。岸本は悠樹の左腕が不自然な形に曲がっているのを目撃した。

左肩の関節が外れやがった!

もう一刻も猶予は無い。骨が外れれば筋肉など直ぐに引きちぎられる。仕方が無く、岸本は持っていた唯一のナイフをぎゅつと掴み、コンテナを蹴って悠樹の前に飛び出した。

「うりゃあああああ!」

空中に躍り出ると同時に渾身の力を込めて、ナイフを阿修羅の右腕に叩きつける。

「ヴォアアアツ!」

阿修羅は悠樹の体から右腕を離すと、そのまま岸本を怒りに任せて力のままに振りほどいた。岸本はコンテナの側面に激しく体を打ちつけ、ボロ人形のように地面に転がると、その場で死んだように動かなくなった。

き、岸本!? このくそ化物があつ!

悠樹は自由になった右腕で、今だ自分の左腕を拘束している阿修羅の手に深々とナイフを刺す。黒っぽい血が腕を伝い服を濡らしたが、意に介さずぐりぐりと刃を相手の肉に沈めた。

これには流石の阿修羅も耐えられなかったようだ。悠樹は流星のように投げ飛ばされ、再びコンテナの上に舞い戻った。

「があつ!? 痛つて!」

全身が雷に撃たれた直後のように痛む。

「悠樹、大丈夫か!? これを受け取れ!」

コンテナの付近まで鎖を引きずりながら戻ってきていた友が、下から声をかける。

「ああ？ 何をだよ！？」

悠樹は何とか立ち上がると、間接の外れた激痛の走る左肩を押さえながら、友を見るためコンテナの下に視線を向けた。と、同時に真下から黒い一本の鎖が目の前に飛び出す。

「全部繋がっているからそれを引けば全ての鎖がそつちに行く。引き上げたらすぐに阿修羅に被せる、あの厄介な腕を無効化出来るはずだ」

「……岸本をそこから退かしとけ！」

先ほど友から霞網作戦を聞いていた悠樹は、すぐにその言葉の意味を理解し、一気に鎖を引き上げにかかった。

真下に居た友は岸本を担ぎ、そのまま逃げようとしたが、目の前に阿修羅が怒りに染まった表情を浮かべ立っているため、仕方が無く断念した。岸本を抱えた状態でここから逃げるのはリスクが大きすぎる。一旦阿修羅の注意を他に向けなければほぼ間違いなく背後から攻撃を受けてしまう。

「こつちだ！ 化物！」

その時、阿修羅の背後から複数の人間の雄叫び声が聞こえた。咄嗟に視線を向けると、クラゲ人間との戦闘を終わらせたイミユニティの男たちと西川の姿が近くに見えた。知能の低下した阿修羅は挑発のままにそちらに注意を移す。友はその隙に岸本の肩をより強く抱え、物音を出来るだけ立てないようにしながらコンテナの前から離れた。

「くそ、腕一本じゃ時間がかかる」

一人コンテナの上で鎖を引き上げていた悠樹は、自分の間接が外れてしまったことを悔しがった。折角西川が鎖をここまで運び込み、友が岸本を遠ざけて準備は出来たというのに、まだ半分も引き上げられてはいない。こうしている間にも阿修羅の気を引いているイミユニティメンバーたちはどんどん追い詰められていく。

俺の所為で全てを台無しにして堪るか！

悠樹は鎖を体に巻いて固定し、一旦後ろに下がると、全身の力を

肩一点に集中させて壁に体当たりした。角度も位置も適当だったが、鈍い音と激痛と共に、その一発で間接が上手くはまる。

「がああああああっ！　くそつたりやあああ！」

その叫びのままに、痛みの治まらない腕を歪めに歪めた表情で動かし、一気に鎖を引き上げた。

「友！　準備出来たぞ」

肩の痛みで目に涙を浮かべながら叫ぶ。

友は岸本を実験室の扉の前に寝かせると、直ぐに大声で指示を出した。

「西川さん、阿修羅をコンテナの前に移動させるんだ！」

急いで体の向きを反転し、コンテナの方へと戻っていくイミューニティーの面々。一人の男がその際阿修羅の拳を避けきることが出来ず、腹を窪ませて血を吐きながら後方に吹き飛んだ。死んではいないだろうが、あれだけしつかりと直撃されれば、しばらくは動く事は出来ないだろう。これで戦闘可能イミューニティーメンバーは友を含めてとうとう四人だけになった。

急接近してくる阿修羅を瞳に捕らえ、悠樹は鎖の束を構える。

これで終わらず、これで終いだ！

横谷操の四つの目と視線が交差する。

そして西川たちがそれぞれ左右に転がったのと同時に、悠樹は鎖の束を空中に投げた。

ぶわっと広がる黒い金属の触手。それは阿修羅の頭の上で花開き、一気に降り注いだ。阿修羅は鎖が落下するのと同時に腕を伸ばし、それを幾つもの手で掴んだ。引かれる勢いで網目状に組まれていた鎖は複雑に阿修羅の体に纏わりつき、阿修羅が引く力のままにその体を締め上げる。

「ヴォオオア！？」

阿修羅は鎖を外そうとさらに腕に力を入れるのだが、逆にその影響で鎖の拘束はより一層強靱なものとなった。

作戦は成功したかに思われたが、突如西川が何かに気づいたよう

に阿修羅の頭の後ろを指差した。

「あ、あそこ！ 外れかけてる！」

悠樹がそこを見ると、頭に引っかかるはずの鎖が徐々に上に移動し、外れかけている。あの部分の鎖は全ての拘束の支点だ。あの鎖が外れれば阿修羅の拘束が解けてしまう。

「不味いぞ、引け！」

友が叫び、二人の男、西川が慌てて阿修羅を円を描くように囲み、その体から垂れた鎖を引く。阿修羅の拘束を強くして頭から鎖が外れないようにしようとしたのだ。

しかし残念なことに鎖は頭から外れた。極限まで引っ張ったゴムが飛ぶような勢いで、空中にその黒い体を打ち出す。

この鎖が外れれば友の策も、西川の努力も全てが無駄になる。その場を瞬時に落胆と絶望の空気が覆い尽くした。

誰もが本能的に理解した。

これまでだと。

もう手は無いと。

だが

「うらあああ！」

その瞬間、悠樹が掛け声と共に大きく跳躍した。

コンテナから空中に飛び出し打ち出された鎖をがっしりと掴み、勢いのまま上空から阿修羅の頭に被せる。そして阿修羅の背にぶら下がるような格好で、鎖を握りしめたまま反対側に抜け出た。

阿修羅の十本の腕のうち三本は大きな怪我で使用不可能であり、残りの七本も鎖によって動きを封じられている。殺すなら今しかない。まさに最後のチャンスだ。

「友、今のうちに止めを！」

「駄目だ！ お前が拘束を戻したとはいえ一旦外れかけた影響で鎖の位置が変わってしまった。今俺たちが腕を鎖から離せば、阿修羅はすぐに自由になる。お前が止めを刺せ！」

「はあっ！？」

「これを使え！」

友は握っていたWASPKNIFEワスプナイフを悠樹に投げ渡した。

「残り一発だ、しつかり決めろ！」

悠樹は左腕で鎖を握り締めたまま、間接を直したばかりの、まだ痛みの残る右腕でWASPKNIFEワスプナイフをキャッチした。

「何でもかんでも俺に押し付けやがって　！」

悠樹は力の限り阿修羅の背を蹴り、ブランコのように後ろに大きく下がるワスプナイフと、WASPKNIFEを逆手に持ち、重力に引かれる勢いのまま阿修羅の心の臓目掛けて突撃した。

「後できつちりつけは払ってもらうからな！」

「これで決まる」誰もがそう思った。

なっ！？

突如、悠樹の体中に痛みが走った。

肉体的なものではない。精神的なものでもない。もっと根本的な、潜在的な深い痛み。まるで自分の魂の一部が消失したようなそんな痛み。

阿修羅を殺せるまさにその瞬間だというのに、悠樹は動きを止めた。阿修羅は何もしていない。完全に無防備な状態だ。

「悠樹！？」

友や他の人間が不審そうな目を向ける。

何だ！？　一体何が……！？

悠樹は混乱しながら、その得体の知れない感覚的な痛みに耐え、受身も取れずに阿修羅の背に体を打ち付けた。

「うっ！」

思わず、声が漏れる。

「くそ……！！？」

なんなんだ、この痛みは　この感覚は……！？

「なんなんだよおお！」

数分前。管理室。

己の体で盛大に風を切り宙を舞いながら、広は恐れと慄おそきに満ちた目で近付いていく人間を見つめた。

管理室の隅、隠し階段の前に立っているその人間　横谷晶子は、均整の取れた顔で優しい微笑を浮かべ、部分変化させた己の緑の腕を胸元まで素早く引き戻した。

「がああっ!？」

首を驚掴みにされた状態で急ブレーキをかけられ、広はあまりの喉の圧迫感に涎を垂れ流すことにも構わず、むせ返った。逆上がりを試みているときのよう大きく足が前に跳ね上がる。

「実の姉を背後から刺すなんて、酷いじゃない？」

フランス人形のような整った顔を全く崩すことなく晶子はそう問いかけた。広の首を掴んでいる腕は既に人間の形に戻っている。広は咳をすることに忙しく、答えることが出来ない。

「あらあら、お姉さんを無視しないでよ。悲しくなるでしょ。答えがないなら、お仕置きするわよ」

「……な、何で、生きてる!？」

ひゅーひゅーっと空気が漏れるような声で、広は尋ねた。

「今の私は人間じゃないのよ。もっと高度で、美しい存在。人間はちよつと内臓を傷つけるだけですぐに死ぬけど、私や操さん、あなたはそんな簡単には死ねないわ」

「で、デガウス・ジェイルは細胞の分裂速度と染色体の新生化を促すだけのものだったはず、まさか……再生能力もあったのか？」

「そんな機能ないわよ。再生能力なんて、生み出せる科学者がいたら見てみたいわ。私たちはただ体が頑丈になっただけ。確かに傷は人より早く塞がるけど……これは再生というより成長よ。体が細胞

増殖によって成長することで強制的に傷を消したり、小さくすることが出来るの。そう、まるで植物のようにね。あなた、私の上げた資料最後まで読んでいないでしょ」

叱るように眉を寄せる晶子。

「まあ、いいわ。おかげであなたの『行き過ぎた悪戯』にもたいした傷は受けなかったのだし、今回は不問にしてあげる。それよりも……」

片腕で広の首を掴み持ち上げたまま、晶子は天野を振り返った。

「天野博士、本当ならばここであなたが弟に協力した理由を聞いても良いけど、……生憎大体予想が付いているからいいわ。あなた私を草壁に売ったわね？」

『スパイ』。広は水族館エリアでの草壁国広の言葉を思い起こした。

「な、何故それを……い、一体どこから……！？」

天野は女の子のように両手の指を交差させ、小さな声で呟いた。
「イミューニティー本部がこの水憐島と私の存在を邪魔に思っていることは、前々から気づいていたわ。柳に色々と調べさせていたし。あなたは操さんが私と同種になってから、いつも私を怯えた目で見えるようになった。ビクビク、ビクビクね。いつか自分も化物にされるんじゃないか、怖かった。だから本部に、草壁に強力したんでしょ？」

凶星だ。天野は小刻みに震え始めた。

「草壁が直にここに踏み込んできた時点で私は確信したわ。間もなく私のここでの全ての地位は失われる。逃げても死ぬまで終われ、一生平穏は無いって。だから私は大枚を叩いて最後の手段に出た。毒には毒を、目には歯を、ってね。どんな組織にも『異端者』は居るものだから」

「ま、まさか、あなたも黒服を！？」

「そうよ。私は草壁の傘下にいない数少ない黒服メンバーと取引した。あなたがスパイになったことを教えてくれたのも彼。天野博士

……あなた、草壁と広をたぶらかして私を殺すために今回の事件を起こしたのよね？ 残念だけど、それは最初から成功するわけはなかったのよ。私があなたたちの企みを彼から聞いていたんだから。この事件は発生当初から、いえ 推考段階から既に私と彼に利用されることが決まっていた」

「利用……だと？」

か細い声で広が呟く。

その答えが気になり、天野、敏、トウヤは耳に意識を集中させた。今なら簡単に脱出出来るのだが、敏もトウヤも逃げることを忘れたように話に聞き入っている。魚人たちは晶子の威圧感に気おされ、外か地下へ逃げていったようだ。

「そう、つまりは私の『死の偽造』のためにね」

「あっ!？」

何かに気がつき、天野と広は心底落胆したような表情を浮かべた。「ふふふ、がっかりした？ まあ当然の反応ね。あなたたちは私を殺そうと必死に考えを巡らせた。この事件を起こした。だけど、今やその全てが私の生死を不明にする要素へと繋がっている。島をぐるりと囲んでいるイミューニティーの集団、警察。この密閉された水隣島という限られた空間の中、私が誰にも気づかれずに脱出することとは不可能。そしてそうなれば私の運命は死か、捕獲かしかない。誰もがそう考える」

「そうか……そのために態々（わざわざ）副作用を……!」

悔しそうに広は歯軋りする。

「そう、老化した私の姿を知っている人間は柳と広、天野博士だけだった。私はいつも副作用中は部屋に引きこもっていたし、誰もその姿は知らないわ。あなたたちが消えればね。私はか弱い一、生存者。『佳代子』として堂々とこの島から出ることが出来る。私の死体も既に用意してある。ただ私と同年齢の女性にデガウスジェルを打ち込めば良いだけだから、簡単に作れたわ」

敏は佳代子と初めて会ったときのことを思い出した。

そういえば、俺と兄貴が最初にあの販売エリアに着いたとき、佳代子さんの姿は無かった。姿を見るようになったのは彼女がトイレから出てきてからだ。一斑だけが鼠魚に襲撃されなかったのも、晶子の気配に奴等が恐怖を抱いていたからだとしたら？ 暗い廊下を歩いていた時に俺が感じた異常なほどの愛憎と恐怖。あれが佳代子 晶子と広の感覚だとしたら？ それに、トウヤから一瞬だけ殺気を感じたとき、あのとき真後ろには佳代子さんが居た。考えれば考えるだけ不審な点と点のピースが繋がっていく。

佳代子さん……あなたは、まさか本当に……

「な、なんてことだ！ 私たちの計画が、ま、まさか逆に利用されるなんて……！？」

「ドカンッ！」と天野は操作盤に両手を叩きつけた。

「大の男が暴れないで、みつとも無い。品性が無いわよ。……安心しなさい。あなたが草壁から責任を問われることは無いわ。今すぐ、私が殺してあげる」

「え？」

天野はキョトンとした顔で前を向いた。だがその視線は何も映像を捉えることが出来なかった。一面、真っ黒な闇に覆われている。

「あ？」

ようやくそれが何か理解した時、既に天野の頭は緑色の腕によって地面に叩きつけられ、生卵を落としてしまった跡のようにぐっちゃぐつちやに割れて、赤い具を撒き散らしていた。

「天野っ！？ あ、姉貴いつ！」

「何よ？ まったくあなたはずい他人に影響されるんだから。もうあんな人間と関わっちゃ駄目よ。これ以上、私に悪さ出来ないように今すぐデガウス・ジェイルを入れてあげる」

晶子は腕を曲げると、艶のあるピンク色の美しい唇を広の唇に近づけていく。

「や、やめろ！ やめろおお！」

広は化物になる恐怖にパニックを起こし、必死に抵抗したが、体

は宙に浮いているため何も出来ない。

「これであなたも操さんと同じ、本当の家族になれるわね」

本当に嬉しそうに色気の漂う笑みを浮かべ、晶子は唇を押し当てた。

体内に入ってくるデガウス・ジェル細胞を感じ、広の頭と体が熱くなっていく。

嫌だ、嫌だ、嫌だ、嫌だ！ 狂ってる！ あんな醜い化物になんてなりたくない！ 嫌なんだよ！

「ん？」

敏は広が最後の力を振り絞って懷から何かを取り出すのを見た。カプセル状の薬が詰まった瓶だ。

「……姉貴いい！ 俺は義兄さんみたいな、あんたみたいな怪物になるなんて御免だ！」

いきなり頭突きを晶子の額に浴びせ、一瞬頭が離れた隙に広は瓶の中の全ての薬を一気に飲み込んだ。

「広！？」

晶子は驚いて瓶を奪い取ったが、既に遅い。広の体にはカプセルから解き放たれた抗イグマ剤が、イグマ細胞を食い尽くす微生物が溢れかえり出していた。

「そ、そんな！ 広！」

。あんなに大量の抗イグマ剤を取り入れれば、例え生身の人間でも死は避けられない。晶子は涙を流しながら青白くなっていく広の体を抱きしめた。

「悪いな、姉貴……俺は人間でいたいんだ……人間として、人間の姉貴と義兄さんと……一緒に生きて行きたかった……」

「何て馬鹿なことを！ 広！ ひろし！」

デガウス・ジェイルの影響で精神に以上をきたしているのか、晶子は終始小学生を叱るように泣き叫びつつ、必死に広の体を揺らした。

「姉貴……そんなに義兄さんのことが許せないのか？ そんなに美

貌が大切なのか？ 俺や、義兄さんの命よりも……」

晶子は何も答えず、ただ泣き叫んではかりいる。

なあ、姉貴。一度でいいから……昔みたいに笑ってくれよ。

美しくなんか無くたっていい、ただ……暖かいあの愛嬌のある顔で

……もう一度だけ……

ぐらつと広の首が傾いた。全身の細胞が抗イグマ剤に蹂躪されつくし、死んだのだ。

「うあああああ広っー!？」

ヒビの入っていたグラスが砕けるような幻聴と共に、管理室の中を溢れんばかりの悲壮な悲鳴が満たした。

それは横谷晶子に残っていた最後の人としての理性と、愛情がたった今消え去ったことを意味していた。

<第十三章>悲壮と愛憎（後書き）

ネット作家になって一年経ちました。本当ならばここで尋獄3まで終わらせてる予定だったんですがね……中々上手くはいかないものです。

さて、二年目も頑張りますのでこれからも尋獄シリーズをよろしく
お願い致します。来年こそはきっと完結できる……はず！

<第十四章>悠樹と敏

<第十四章>悠樹と敏

「おい、逃げるぞ」

広の死体の前で泣き伏せている晶子を眺めながら、トウヤはそつと敏の腕を引いた。

「天野とかいう奴のおかげで、水憐島のロックが全て解除された。今なら無事に島の外に出れるはずだ」

「でも、兄貴たちを呼びに行かないと……」

下で阿修羅と戦っている悠樹たちのことを思い、敏は躊躇^{とまど}う。

「今俺たちが下に行っても何の助けにもならない。だったら外にいたイミュニティーの助けを呼びに行った方が何倍もいいだろ。行くぞ」

まだその場に残ろうとする敏を強引に引っ張り、トウヤは歩き出した。距離的に考えて、ここから水憐島の改札まではものの数分で着く。直ぐに援軍をつれて戻ってこれるはずだ。

二人が出口まで差し掛かろうとしたとき、突然背後から物音が聞こえた。

「……待ちなさい。あなたたちは逃がさないと言っただしょ？」

横谷晶子が広の亡骸を下に下ろし、立ち上がったのだ。

敏は冷や汗をかいた。じりっと一歩足を後ろに伸ばしながら、トウヤが命乞いの言葉を発する。

「俺たちはただの一般市民だぞ？ あんたが死んでいようが、生きていようがどうでもいい。殺す必要はないだろ」

「そんなの関係無いわよ。あなたたちがイミュニティーメンバーではなくとも、私の生存が知られるきっかけになることには変わりないわ。それに、どっち道あなたたちはイミュニティーで働くことに

なるじゃない」

イミュニティーによって助けられた生存者は必ずイミュニティーで働くか、その監視を受けなくてはならない決まりだ。水憐島館長である横谷晶子はそのことを知り尽くしている。だからトウヤの悪あがきの言葉も効果は無かった。

「佳代子……いや、晶子さん。あなたは本気で俺たちを殺す気なのか？」

少なくとも、敏の前では佳代子だったときの晶子は優しさや思いやりに溢れた女性だった。その姿を思い出し、敏は訴えるように晶子に呼びかけた。

「確かに、あなたたちに罪は無いわ。私も個人的には敏くんのことを気に入っているしね。この美しい容姿のときに優しくしてくれる人は多くいたけど、佳代子の姿で優しくしてくれる人は少なかったから」

「だったら」

「でも、それとこれは別の話。あなたたちを殺さなければ私が死ぬ。私の生存がイミュニティー本部や草壁に知られれば逃げる術は無い。彼らは永遠に私を探し続けるはず。だからもうどうしようもないの。所詮この世はエゴによって回っている。あなたたちはあなたたちのエゴのために、私は私のエゴのために行動するだけよ」

広がついさきほど述べたのと同じような意味合いの言葉を言いながら、晶子は足を動かし出した。その間、右腕が徐々に緑色に変化し、気泡のようなものを浮かべていく。

「本気……なんだな」

敏は恐怖と諦めと、落胆の混じった悲しそうな顔で、晶子を見つめながらそう呟いた。

「ええ、そうよ。残念だけどね」

同じように悲しそうな表情を浮かべる晶子。

「……むざむざ殺されるつもりは無い。敏、出口はすぐそこだ。走るぞ！」

トウヤは握ったままだった敏の腕に力を込めると、一気に走り出した。が、それはすぐに止められてしまう。

「私から逃げることは出来ないわ。私はデガウス・ジェイル唯一の成功例　完全体。操や広とは違うの」

ロケットのような高速で緑色の腕がトウヤの胸に飛来し、激突した。トウヤは痛み顔に顔を歪めながら伸びた晶子の腕を見つめ、両手で掴んだ。

「は、離せ!？」

「ごめんなさい。あなたも中々戦闘員としての素質がありそうだったけど……」

晶子が腕に力を込めると、トウヤの体はあつと言う間に晶子本体の元へと引きずられ、移動させられた。途中机や機器やらにぶつかった所為で額から血が流れ出る。

「ここで死んで」

「トウヤ!」

敏は叫んで晶子の動きを止めようとしたが、遅かった。目の前でつい先ほどまで隣に立っていた男の首がぼきりと捻じ曲がった。

「そんなんっ!？」

敏は思わず口を手で覆った。

「次はあなたよ、敏くん。すぐに楽にしてあげるわ」

晶子は目を見開きガクガクと死後痙攣しているトウヤの死体を雑に投げ捨てながら、妖艶な瞳を敏に向けた。

その目を見た瞬間、敏は本能的に悟った。自分の命はここまですと、ここでこの怪物に奪われるのだと。

出口はすぐ後ろだというのに全く足が動こうとはしない。気がつく、目の前まで晶子を近づけてしまっていた。

「う……あ……」

言葉が出てこない。敏は体を震わせながらじっと晶子の目を見つめた。まるでそこに縛りつけられてしまったかのように。

「心配しないで。あなたのお兄さんもすぐに後を追うわ。楽に殺し

てあげる」

「あ、兄貴……！？ な、なんで兄貴も殺すんだよ……！ 兄貴はあんたの正体を知らないんだぞ？」

「そうね。でも彼の感覚は危険だわ。生存者が少なくなれば少なくなるほど、彼が私の正体に気がつく確率はあがる。そうなったら、当然イミューニティーにも伝わるでしょう。だから殺さなければならぬ。まだ外の連中に保護されていない、自由に動ける今のうちに……勿論、誰も怪しまない佳代子の姿でね」

佳代子の姿で紛れ込まれたら、よほどのことが無い限りすぐにはその正体に気づけないだろう。敏は晶子の作戦が成功する可能性が高いことを理解し、絶望した。

何か、何とかして兄貴に晶子のことを知らせないと……そうしないと兄貴が……

「あなたち兄弟はこの地獄でよくここまで生きてきたわ。ド素人なのにね。もういいのよ。どうせ生き残つてもイミューニティーの奴隷になるだけ。もう楽になりなさい。いえ、私が楽にしてあげるわ」
晶子は緑色の手を敏の首に当てた。徐々に、その力は強まってくる。

俺が死んだら沖田家は兄貴だけだ。絶対に、絶対に兄貴だけでも助けないと……母さんも、父さんも浮かばれない。どうすれば兄貴に俺の意思が伝わる？ どうすれば晶子の存在を教えられるんだ？

「ぐうっ……！？」

喉が圧迫され、呼吸が封じられる。もう間もなく自分の首は折られるだろう。その前に、敏はなんとか悠樹に自分の意思を伝える方法を見つけなければと思った。恐怖感よりも、絶望感よりも、悲しみよりも、ただ悠樹を助けたい。その気持ちが敏の心を支配していた。

自分より悠樹のことを案じるようになったのはいつからだろうか。答えはやはり母が死んだあのときからだろう。あの事件がきっかけ

けで悠樹は家を離れ、たった一人で放浪するようになり、自分はその影を追い求めるようになった。

双子だから、身を分けた片割れだからではない。数少ない大切な家族だから。

幼い頃、まだランドセルを背負ったばかりの子供だったころ。悠樹はよく敏に向ってある言葉を言っていた。一番最初にそんなことを言い出したのは二人揃って上級生に苛められたときだっただろうか。泣きじゃくる敏とは違い、悠樹はぼろぼろにされながらも決して諦めることなく反撃を続け、上級生を追い払った。それはその後言われた言葉だ。

『泣くなよ、敏。お前は俺が必ず守ってやる。俺は　兄貴なんだから』

今でもそのときの悠樹の表情ははつきりと思い出せる。にかつと笑って言われたその言葉が心に残っていたからこそ、敏は悠樹のことを見捨てることが出来なかった。繋がりを切ることが出来なかった。あのときの表情が、言葉が忘れられなかったから。いつまでも心に残っていたから。

大助の変わりようを伝えたかったからだけではない。またあの顔が見たいから、守ってくれた恩を返したいから、必死に追い求め、行方を調べて……そしてとうとう今日家族全員での再会を果たした。それなのに、折角見つけたのに、再会したのに、その恩を返せないまま死ぬなんて絶対に嫌だ。

敏は大助の姿を思い起こした。人魚の爪に胸を裂かれ、命と引き換えに自分たちを救おうとした父親。どうせ死ぬのなら、自分も大助のように悠樹を守って死にたい。それが、自分に出来る最後の、唯一の愛情表現だから。

「兄貴……今度は俺が兄貴を守るよ。俺は　弟なんだから……」
かすかに動かすことの出来る喉を鳴らし、敏はそう呟いた。かつて悠樹が自分に言った言葉をそのまま返すように、にかつと笑いながら。

ぐつと喉の圧迫が強まる。横谷晶子が留めに入っただ。何も見えなくなり、頭が破裂しそうなほど熱く感じる。

兄貴、俺にはもう『これ』しか出来ない。こうすることしか兄貴を助けることが出来ない。頼むから……気づいてくれよ。死を目前にし、動きを封じられた状態で出来ることと言えば、共感能力で必死に己の気持ちを伝えることだけだ。自分の思いと、晶子に対する感情を。

最後の瞬間まで、敏は願った。悠樹が晶子の存在に気がつくように。そして、無事にこの水憐島から出られるように。

「さようなら、敏くん」

そして 敏の意識は闇に沈んだ。

阿修羅にぶら下がったまま苦しみ出した悠樹を見て、友は何か異常事態が起きたことを悟った。

前に受けた傷が開いたのか、先ほど間接を外されたときの痛みがぶら下がったことでぶり返したのか、とにかく、悠樹がともに動ける状態でないことだけは確かだ。このままでは間違いなくこの場にいる全員、阿修羅に殺されることになる。

「悠樹！ 親父の仇を討つんじゃないのか！？」

もぎ取られそうなほど強い力で離れようとする鎖を必死に握りし

め、友は必死な顔で声を出した。だが悠樹は相変わらず阿修羅の背でもがいている。

その姿が、死を感じさせる背中が、友は記憶にある坊主頭の男とダブって見えた。

「ヴォアアアアアアッ！」

阿修羅の力がよりいっそう強くなる。もう、あと数秒も持ちそうにない。

「横谷晶子を倒すんだろ！？ 悠樹！」

友はあらん限りの声で叫んだ。らしくない、感情的な声で。

その声で僅かに悠樹の意識が戻る。

「…………… なさけねえ声出してんじゃねえよ、馬鹿野郎……………！」

震える腕を伸ばし、阿修羅の背に当てがう。

「言われなくとも分かってんだよ」

悠樹は得体の知れない痛み^{ツラ}に顔を歪めながら、今度こそ最後の、残った力を全て使ってナイフを阿修羅の背へと突き刺した。

「終わりだ、化物……………！」

カチツとWASPKNIFEのスイッチが押される。^{ワスプナイフ}

そこは丁度心臓の真後ろだった。真っ白な霧に包まれながら、阿修羅の心臓はその瞬間、弾けるように爆発した。

倒れる。ゆっくりと倒れる。

動力の支点。生ある行動の要。そこを粉碎された阿修羅は、^{おびただ}夥しい血を撒き散らしながら、支えを失った老人のように前に崩れ落ちた。

「悠樹！」

すかさず、友が走り寄る。その背にぶら下がっていた男の身を案

じて。

阿修羅の血を全身に纏い、真っ赤に染まった悠樹は友に体を起こされると、血色の悪い顔を上に向けた。

「大丈夫か？ …… 一体どうした悠樹、なぜ突然苦しみ出した？」

腕に抱えた悠樹を見ながら、友は怪訝そうに問い詰める。だが、悠樹はそんな友の言葉を無視し、震える声を漏らした。

「…… 敏は…… 敏はどこだ？ 研究室にいるのか？」

「敏？ ああ、そのはずだ。さっき生存者たちは全員研究室に避難したからな。敏がどうかしたのか？」

「確認してくれ」

哀願するように呟く悠樹。友はその願いを何となく拒否することが出来なかった。

「西川さん」

指示を出してくれと、いつの間にか隣まで来ていた西川を見る。

西川は黙って頷くと、仲間の一人を研究室へと向わせた。

「さあ、話してくれ。一体どうしたんだ？」

再び聞く、友。しかし先ほど研究室へ向わせた男が戻るまで何も話す気にならないのか、悠樹はずっと無言を貫き通した。しばらくして西川の部下であるその男が戻ってきた。男は開口一番意外な言葉放った。

「全員、消えています……！ 恐らくは上階に行ったものだと思いますが、いかが致します？」

「全員消えてる？ 何で勝手にそんな真似…… まさか、このホール以外にも感染者が居たって言うの？」

扉を開けてすぐに研究室の中は調べていたが、危機迫った状況だったため、それほど細かく見てはいない。西川は己の迂闊さを呪った。

「もしそうだったら、すぐに彼らを探さないと不味いですね。大槻、おおつき金島、かねしま負傷者を回収して下さい。直ちに上階へ行きますよ」

「はっ！」

大槻、金島と呼ばれた男たちは素早く動き出した。負傷者、岸本と吹き飛ばされたイミューニティーの男を確保するために。

「それじゃ……」

続いて西川が何か言いかけたとき、研究室の方から今はもっとも聞きたくない声が聞こえた。

「チュウアアアアッー！」

そう魚人の、金属を擦り合わせたような不快な声が。

「なっ！？」

誰もがその声を漏らした。

魚人がこのホールに紛れ込むことは別におかしくはない。いくら隠し階段の先にある施設とも言えども抜け道はあるし、鼠魚の時に入り込み職員に感染したという可能性もある。だが、問題はその魚人たちが研究室から出てきたことだった。そこからどうと魚人が出てきたということは、その先へ逃げていた生存者たちが死んでいる可能性が高い。西川はなぜ生存者たちがいないのか、その理由がこの魚人に殺されたからではないのかと悲観的な感情を抱いた。

「こんなときにあいつらと戦っている暇はない。西川さん、何とかして振り切るぞ」

今は阿修羅との戦いで全員疲労しきっている。ここで魚人と戦えば、少なからず大きな被害が出るはずだ。友は悠樹を立たせると、その手からWASP KNIFE^{ワスプナイフ}を受け取った。

「……っち……！」

魚人の姿を見て、悠樹は舌打ちした。

感じていた得体の知れない痛みの正体が、敏の身に何かが起きたことだとは思っていたが、魚人を見たことでその予測の信憑性が大幅に増加した。

「……おい、無茶はするな。何が大事かよく考えろ」

今にも魚人に飛び掛っていきそうな悠樹を友が止める。大事とは行

方の知れない敏のことを言っているのだろう。それを聞いた悠樹は拳を握り締め、黙って友に従った。

「もう体は大丈夫か？」

「……ああ」

無愛想に悠樹は答える。

「よし、だったらお前は西川さんや負傷者と一緒に研究室へ駆け込め。俺があいつらをあそこから離す」

「一人で大丈夫なのか？」

「別に戦うわけじゃない。ただ魚人たちを一旦研究室の前からどかすだけだ。あいつらが居たら先へ進めないからな。遠ざけたら俺も直ぐに中へ入る」

「……分かった」

悠樹は素直に頷いた。下手な文句や意見を言わないのは、やはり敏のことを心配しているからだ。

「よし、大槻、金島、行きますよ！」

二人のやりとりが終わったことを確認した西川は、もう負傷者を回収しているであろう部下たちの名前を呼んだ。同僚の男を背に担いだ金島の方はすぐにこちらにやってきたが、岸本を拾いに行った大槻の方は実験室の前から動こうとはしなかった。いや、動けなかった。実験室は研究室の真横だ。つまり魚人たちはかなり近い位置にある。そのため大槻は岸本を担いだまでは良かったものの、その動きに気がついた魚人たちに目を付けられてしまい、じりじりと後ろに追いやられていた。

「大槻、早くこちらに！」

その身を案じた西川が怒鳴るが、大槻は一考に聞く耳を持たない。いや、声自体は聞こえているだろうが、三体もの魚人を目の前にして、しかも岸本を背負っている所為で両手が塞がれた恐怖から、動くことが出来なかった。

「チャアアアッ！」

この獲物は無力だとも思ったのか、魚人たちは一斉に大槻に襲

い掛かった。

「うわああああ!？」

流石の大槻もこれには悲鳴を上げて逃げるしかない。慌てて反転しようとしたが、岸本を抱えているせいで早く動くことが出来ず、あつと言う間に魚人たちに覆いかぶさられた。

「大槻!」

「岸本!」

金島と悠樹が同時に叫ぶ。二人は揃ってすぐに大槻の元へと駆け寄ろうとした。だがそんな二人を友が止めた。

「止める、もう駄目だ!」

既に大槻は喉を食いちぎられ痙攣している。例え魚人を倒しても、もう助かりはしないだろう。岸本の方は大槻とそれに跨っている魚人が死角になってよく見えなかったが、恐らくは殆ど同じ状態だと思われた。

「……今のうちに研究室へ……」

顔を伏せ、物凄く残念そうな表情をしながら、西川が震える声でそう言った。

「岸本……!」

その声はまるで敗北宣言のように悠樹の耳に残り、いつまでも離れなかった。

研究室に内側から鍵を掛け、そのまま上階へ上がると、次階へと繋がる階段、そしてそれに向って伸びた一本の廊下が視界に飛び込んできた。廊下にはトイレを含んだ三つの扉があり、その中でも、

もつともこちら側に近い扉の前には一体の魚人が立っていた。魚人は何やら忙しくその扉を叩いたり、引っかいたりしている。

「あの中に生存者たちがいるのかもしれない。一体だけだ。ここで倒すぞ」

友はマガジンの切れたワスナイフWASP KNIFEを斜に構え、小声でそう言った。

「俺が囷になる。指示は任せた」

負傷した仲間を背から下ろし、屈強そうな体をした金島が前に進み出る。大槻の敵討ちのつもりなのかその目には怒りが籠っていた。……了解。西川さんは後衛を」

簡潔にそういうと、友は自分を含めた金島以外の者たちを全て壁の後ろに隠し、手で金島に突撃するように合図した。金島は頷くと廊下の横端にあった大きな植木鉢を見て、そこに生えている天井まで伸びた木をがしつと掴んだ。

「チュウウウウ……」

魚人は飢えているのか必死に扉を引っかき続けている。金島はそつとその背後に立つと、問答無用で木を振り下ろした。植木鉢が見事に魚人の後頭部に命中し、砕き割れる。

「チャアアアア！？」

痛みに悲鳴をあげながら自分を睨む魚人を一瞥し、急に身を反転させ廊下を走り出す金島。当然魚人は目に怒りの炎を浮かべながらその後を追従した。風が頭を撫で、いつもは逆三角形に整えられている金島の髪は見事な三角形に変形していた。

丁度金島が通り過ぎ、目の前に魚人が飛び出したところで、友と西川はそれぞれナイフを片手に勢い良く廊下に飛び出した。その刃は寸分の狂いもなく魚人の側頭を貫き、腐った脳味噌を撒き散らす。鳴き声を上げる間もなく魚人の意思はこの世から消えうせた。

「さあ、開けるぞ」

ナイフを振り、付着した血を弾きながら友は片手で扉のノブを掴んだ。

ギギギと乾いた音を立てながら扉は開き、次第に部屋の中が明らかになっていく。中へ踏み込むと、隅っこにお互いの体を抱き合う形で窪田と佐伯が座り込んでいた。

「二人とも大丈夫ですか？」

すぐに西川が駆け寄りその状態を確認する。佐伯は恐怖からか、やや口をひくつかせながら話し出した。

「あ、ありがとう。本当に死ぬかと思ったよ……」

「おい、他の奴らはどこへ行った？」

敏のことが心配で仕方が無い悠樹は、二人がまだ落ち着いていないにもかかわらず、問い詰めるように佐伯の襟を掴み、捻り上げた。そのあまりの迫力に佐伯は声を引きつらせて答える。

「か、佳代子さんはトイレに行くって言ってたけど、他の三人は良く分からない。最初に羽場さんが隣の部屋に行って、トウヤと敏はその後を追っていったんだ。もしかしたら、隣の部屋で俺たちと同じように引きこもっているのかもしれない……！」

それを聞いた瞬間、悠樹は佐伯から手を離し、礼も言うことなく部屋から飛び出していった。

「悠樹、一人で突っ走るな！」

溜息を吐きながら友がその後を追う。

悠樹は隣の部屋の扉を開け放つと、何の躊躇いもなく足を踏み入れた。

「おい、感染者がいたらどうする気だ！」

一テンポ遅れて友も部屋に入る。悠樹を押しやり、中の様子を調べようとすると、不意に前から声をかけられた。

「……友さん？ ああ、良かった、ずっと一人で怖かったのよ！ あの怪物を倒したのね！」

それは佳代子だった。ところどころ血に塗れた服を着ながら、満面の笑顔で二人を見つめている。

「佳代子さん？ トイレに行っていたんじゃない？」

先ほど聞いた内容と違う現状に、友は首をかしげた。

「ええ、最初はトイレに行っていたけど、廊下に出たときに上から悲鳴が聞こえてきたの。それで怖くなってここに飛び込んで……」

「悲鳴？」

「あ……多分、あの声は敏くんだと思うけど……」

「何！？ 上つて言ったな、あそこの階段のことか！？」

敏という名前を聞き、悠樹はさらに不安感を募らせた。

「慌てるな悠樹。まずは西川さんに連絡するのが先だ。もしさっきみたいな怪物がいた場合、お前一人ではどうにもならない」

軽く悠樹の肩に手を置き、友は諭すように言った。悠樹は不満げだったが、一人で突っ込んでも無駄死にするだけだと、友が無理やり引き留めた。

部屋を出て、隣の部屋へと向う間、佳代子は笑っていた。まるでほくそえむように。ゲームを楽しむ子供のように。

誰にも気づかれることなく、ただ静かに。

<第十五章>物言わぬ半身

<第十五章>物言わぬ半身

「ということとは、管理室にはやはり感染者や感染生物がいる可能性が高いみたいですね。私たちは皆少なからず消耗しています。何か策を考えましょう。痛い目に遭っては遅いですから」

隣の部屋から戻ってきた友と悠樹の話聞いた西川は、考え込むような素振りを見せそう言った。

「そんな悠長なこと言ってる場合かよ。念入りに作戦なんか練ってたら、敏はその間に死んじまう。今すぐ行くぞ！」

「悠樹さん。お気持ちには分かりますが、いきなり感染体と出会うことがどれほど危険か、さつき身をもって知ったばかりでしょう？ 既にあの阿修羅の所為で何人も仲間を失ってしまいました。私はこれ以上、犠牲者を出したくはないんです」

「はっ、随分な言いわけだな。この島中の人間を犠牲にしておいて、今更よくそんなセリフを吐けるぜ」

頭に血が上っている所為か、明らかな敵意を宿した目を西川へと向ける。

「悠樹」

二人の間に入り込むと、友はその無表情な顔を悠樹に向けた。

「言い過ぎだ。西川さんはこの職員でもないし、研究員でもない。それに、言っておくがイミューニティーの戦闘員の多くは、今のお前のように現地や軍からスカウトされた人間だ。彼女の立場はお前と何も変わらない。イライラするのは当然だが、彼女に当たるな」

「別に当たってなんかねえだろ。俺はたださっさと敏を助けに行こうって言っているだけだ」

「だったら黙ってる。お前が喚く度にその行動が遅れることになる」

鋭く切り捨てると、友は西川に向き直った。

「あ、ありがとうございます。私」

「……西川さん。何か妙な感じがしませんか？」

「へ……？」

「上手く行き過ぎているんだ。まるで誰かに誘導されているような……」

「何を言っているんです？」

「ここでバイオハザードが発生し、それが事故にしろ、テロにしろ、イミューニティーが呼ばれた。そこまでは分かります。いつも通りの仕事だ。だけど、俺たちが中に踏み込んでからは状況が人為的過ぎる。島内の全出入り口は完全封鎖され、船着場も得体の知れない故障によってシャッターを開けることが出来なかった。まるでルートが一本しかない迷路を歩いている気分だ」

「……気にしすぎじゃないんですか？ 私は偶然外に出る方法が他に無かったただけだと思いますけど……」

「だったらいいんですが……とにかく、用心するに越したことはない。気をつけておくんだ。感染者にも、生存者にも」

「生存者にも？」

なぜ生存者にも気をつける必要があるのだろうか。西川はその理由を聞こうとしたが、その前に友は目の前から離れて行ってしまった。まるで今の話を誰にも聞かれたくないように。

部屋の前にある階段を昇ると、吹き抜けになりホールを一望することの出来る廊下へと出る。そこを壁に沿って真っすぐに歩きつつ、西川は背後をちらつと振り返った。

窪田、佐伯、佳代子、友、悠樹、金島、負傷した同僚、そして自

分。果たしてこの八人の中で何人が生き残ることが出来るのだろうか。何が管理室で待っているにしろ、全員が無事に外に出るなんてことはかなり難しいはずだ。ロックを解除すれば助けが来る。分かりきっていることなのに、得体の知れない不安感が治まらない。先ほどの友のセリフも引つ掛かる。脱出まで目と鼻の先だというのに、関わらず、これ以上進んではいけないような気がして、西川の足は重かった。

「開けるぞ」

管理室への扉の前に来るなり、友はすかさずそのノブを掴んだ。

「お前、もう少しくらい躊躇するべきだぞ」

その迷いの無さに金島が呆れた表情を浮かべる。友はその場に居た全員の顔を見渡し、静かにその扉を引いた。

一気に強烈な血と腐敗臭が鼻孔の中へわんさかと飛び込んでくる。「酷い臭いね……」

佳代子は震えながら手を口の前に移動させた。佐伯と窪田も手を強く握り合いながら恐る恐る中を覗く。

周囲を素早く見回し、感染者の姿が何処にも見えないことを確かめると、友は警戒態勢を維持したまま中へと踏み込んだ。

「……やはり、ここに居た職員も、私たちが送った仲間も全滅したようですね」

周囲に散乱している死体を眺めながら、悲しそうに西川が呟く。それを聞いた友は表情を崩すことなく仕事に取り掛かった。

「西川さん。すぐにロックの解除を。俺と金島は一応死体を調べます」

「……ロックが解除されれば、外から感染者が飛び込んでくる可能性もあります。そのことにも気をつけておいて下さい」

仲間の死に何も感じないのかと疑いたくなるような友の態度に、少し複雑な気持ちを抱きながら、西川はそれでも冷静に指示を送った。友は頷くと、言葉の通りに真下に転がっている血まみれの死体に手を触れ始める。彼にとっては同僚の亡骸と言うより、それはこ

の惨状を作り出した犯人の正体を特定するための参考資料であり、ただの肉と骨の塊なのかもしれない。異常なほど無感情な行動だと西川は感じざる終えなかった。

友と金島がしばらく探索を行い、安全確認を終えると、生存者たちはそれぞれ自由行動を始めた。といっても西川たちから遠くまで離れる人間など殆どいないが。

「ん？」

金島は悠樹が一つの死体の前で立ち尽くすのを見た。

「何してる？」

声をかけながら近付いていくと、その死体は若い男だということが分かった。白のノースリーブシャツと、黒いロングTシャツを重ね着している。どこかで見たことのある格好だ。目の前まで来ると、なぜ見たことがあるのかすぐに理解できた。

それは沖田敏の死体だった。

悠樹は手を振るわせるまでも、怒りや悲しみに顔を歪めるまでも無く、ただ無表情で、ずっと敏の死に顔を眺めていた。

長年イミューニティーに努めている金島にとって、こういう場面はよく目にする。見るなりに、悠樹の心が不味いことになりつつあることを悟った。

精神に相当な負荷がかかっているな。まあ無理も無いが。

こんな状態の人間に慰めの言葉を当てても何の意味もない。今話しかけられるのは邪魔なだけだ。周囲に危険が無いことを再確認すると、金島は制御盤の方にいる西川の下へと戻ろうとした。

一応このことを報告しておくか。何やら珍しくあの友が気に掛けている兄弟だったし。

重く圧し掛かる陰鬱な気持ちに耐えながら、一步一步来た道を戻っていく。またも犠牲者を出してしまったことを悔いながら。

ズズ……

その後ろのデスクの影から、緑色の腕が静かに伸びた。速く、かつ無音で蛇のように金島の背後へと進んでいく。

「……む？」

やっと何かの気配に気がついたのか、金島は背後を振り返った。だがそれは、彼の人生の全てが幕を閉じた瞬間になった。

死んでからあまり時間が経っていない所為か、敏の顔色はまだそれほど悪くはなかった。まるでただ寝ているだけのように、穏やかに^{まぶた}瞼を閉じている。

悠樹は死んだ魚のような目をその下に向けた。敏の細い首は一度骨が真つ二つに折れたことを示す、真つ赤な内出血が痛々しく浮かんでいる。

一体誰がこれをやったのか、何でこうなったのか、なぜ敏は殺されなくてはならなかったのか。そんなことはどうでもいい。あとでいくらでも考えることが出来る。今悠樹の心を支配している感情はただ一つだ。

圧倒的な喪失感。

お気に入りの宝石が無くなったとき、高いローンを組んで買った車がその日のうちに盗まれたとき、その数百倍の喪失感が、全身の神経を駆け回り、そこら中の温度を奪っていった。

自分の手が、体が、急激に冷たくなっていくのを感じる。人間は大きなショックを受けると血の気が引くというが、こういうことなんだと一瞬思う。

喉が動かない。

声をかけたいのに、話しかけたいのに、答えて欲しいのに、声帯が凍りついたように停止している。

離れていても、姿が見えなくても、いつも感じていた、生まれた

ときから常を感じていた敏の存在が今は無い。

頭では分かっている。

彼は死んだ。

あの時、自分が阿修羅に飛び掛った直後に感じた強烈な痛み。あれは彼の死のサインだと。

分かっている。

分かっている。

分かっている。

分かっているのに、どうしても、何故かそれを認めることが出来ない。認めたくない。認識したくない。

「うつ……！？」

悠樹は突然胃から何かが逆流するのを感じ、身を屈めるとその場で思いつきり吐いた。足元に朝食べたものが泥状に広がる。

胸が苦しくなり、頭の奥がガンガンと痛む。今にも景色が飛びそうだ。

敏……！

震える腕を、悠樹は敏の頭へと伸ばす。

『俺……人魚って懂れるよ。本当に居るなら会って見たい。きっと可愛いんだろうな』

『おい、いい加減にしろよ！ 何で何時も父さんの所為にする？ 兄さんだって本当は分かっているだろ。母さんは心の病気だった。どうしようもなかったんだ。父さんは悪くない』

『いつまで子供みたいな事言ってるんだ！ 兄貴は卑怯で臆病だよ。父さんの所為にすれば自分の力の無さを正当化出来る。あの時俺たち二人の目の前で死んだ母さんの悲しみから逃れられるんだろ？』

『……元はと言えば兄貴がチケットなんか送ってくるから、こん

な変な事件に巻き込まれたんだ。こんなことなら……あのチケットを受け取るんじゃないかった……」

「敏……！」

目元が熱くなる。悠樹は顔を歪め、涙を流した。ようやく、悲しみが、感情が心に追いついてくる。

「敏 …… 敏 …… 敏っ ……！」

そつと指の先が敏の頬に当たる。その横に、いくつもの雫が落ちてゆく。

「俺が……俺さえこんなとこに来なければ、俺がお前から離れなければ……親父も、お前も死ななかった。全部俺の所為だ。俺がお前らを殺した……」

俺が、全てを台無しにした。

悠樹の居所を突き止めた敏は、今日この水憐島に来る前に、何度か悠樹に手紙を送っていた。内容は今いる家に来てくれというものだった。大助が心を入れ替え、自分に謝りたい、今の自分の姿を見せたい、母の墓を作ったので墓参りをして欲しい、そういったものが長々と書かれていた。

悠樹は最初、全く行く気は無かった。もう大助とは縁を切ったつもりでいたからだ。だが、長年会っていないかった敏のことや、二人のその後が気になり、また本当に大助が更正したのか見てみたくなり、実は一度だけこっそりと家の前まで行っていた。もし敏がまだ大助に虐待を受けていたのなら、止めなければという思いもあった。しかし、裏路地から二人のアパートを観察しているうちに、手紙の内容が真実であることはすぐに分かった。

大助は髭も髪も整え、見違えるようにしつかりとした容姿になり、敏も立派な青年として大手の仕事についていた。

嬉しかった。

喜ばしかった。

何よりも敏の元気な笑顔が、そして、大助のかつての凜々しい姿が見れて。

だから悠樹は決断した。自分は二人に会うべきではない。自分は二人とは違い、過去を引きずったままだ。今二人に会っても、その幸せをぶち壊すことは目に見えている。絶対に会うべきではない。いくら冷静さを装っても、自分は生まれつき感情的になり易い。間違いなく、顔を会わせればその瞬間に父を侮辱する言葉を吐くだろう。二人がどんな気持ちで、どんな覚悟でこの手紙を自分に送ったかは、少し考えるだけでも予想できる。きっと怖かっただろう。心配だっただろう。また自分が返事をくれるかもしれないと楽しみだったかもしれない。

悠樹はしばらくそのアパートを見つめると、そつとその場を後にした。

いつか、本当の意味で自分が大助を、そして自分自身の感情を許せる日が来るまで、笑顔で二人に再会できる日になったら必ずまたここに来よう、そう心に誓って。

数年ぶりに感じるこの出来た、懐かしい、明るい気持ちでアパートを背にした。

「あの時……会っていれば良かったんだ。俺の弱さが、俺の自己中な心の壁が……全てを台無しにした」

両手で敏の顔を挟み、涙に濡れた目を向ける。

「敏、お前の言うとおり、俺は子供だ、ガキだ……！ 何の覚悟も、意思も、自分から決めることの出来ないクズだ！ 俺があの時その足でお前らに会っていれば、ここで死ぬのは俺だけで済んだ！」

抱きかかえるように敏の頭を胸に当てると、悠樹はそのまま泣き崩れるように身を伏せた。友たちに聞こえないように、声を必死に殺して。

そのか弱い背を眺めながら、佳代子、いや、晶子は己の怪物と化

した緑色の腕を構えた。

足元にはたった今仕留めたばかりの金島の骸が転がっている。

生存者たちに気づかれずに殺すチャンスは今しかない。この一撃で、仕留めるわよ。

悲壮感にくれているとはいえ、悠樹の超感覚なら自分の気配を察知する可能性は大いにある。なるべく自分の逸る気持ちと、感情を押さえ、一步一步物音を立てないように、晶子は悠樹に歩み寄って行った。

その際、軽く周囲を見回し誰もこちらを見ていないことを確認する。友は正反対の壁際で死体を眺めており、西川は未だに制御盤と格闘している。恐らく既にロックが解除されているため、エラーが出ているのだろう。周りがデスクに囲まれているこの場所は自分にとって明らかな優位だ。佳代子の背はかなり低いし、悠樹はしゃがんでいる。運がよければ、誰一人ことに気がつかずに済むかもしれない。

悠樹さえ死ねば、後は思うがままだ。生存者の一人としてこの水憐島を脱出し、一般市民に紛れる。佳代子としての身分偽証の準備も全て出来ている。イミューニティーの生存者監視が多少厄介にはなるだろうが、そんなものはどうにでもなる。今大事なことはただ一つ。『悠樹の死』だけだ。

それは一瞬だった。

一瞬だけ、悠樹の感覚が何かに反応した。

まるで自分がその『感覚』を知っていたかのように、ごく自然に気が付いた。

背後に迫る、奇妙な違和感に。

悠樹は本能的に横に転がった。直後、敏と自分の間に緑色の影が落ちる。

「何っ!？」

地面に叩きつけようと自分が伸ばした腕がかわされ、晶子は目を大きく見開き、思わず声を漏らした。避けられるなど微塵も予想していなかった。自分の行動は完璧だったはずだ。絶対に避けられるはずはなかった。気づかれてはいなかった。

「お前っ　!？」

背後を振り返った瞬間、背の低い老婆が鬼のような形相を浮かべ、片腕を凶器に変形させている姿を目にし、悠樹は心底ど肝を抜かした。今横に転がらなければ、一撃で死んでいたことを理解し、ぞつとする。慌てて叫ぼうとしたが、その前に横の床に落ちていた緑の腕が起き上がり、首に掴みかかった所為で、声は出せなかった。

「素直に悲しんでいればよかったものを……!」

目を血走らせながら、晶子はそのまま悠樹の首を絞める。悠樹はその姿を見て全てを悟った。

こいつが、こいつが敏を……!　こいつが紛れていた奴だったのか!

「兄弟揃って同じ死に方が出来ることに感謝しなさい。亡骸は隣に添えてあげるわ」

血管が押さえつけられ、頭に血が上る。悠樹は苦しさにそこら中のデスクや椅子を蹴飛ばしまくった。

「なっ!?!　この、止めなさい!」

大きな物音を立てられ、晶子は慌てる。

当然、その音に生存者たちは気がついた。

「友!」

素早く西川が身構え、他の人間を背後に集める。

友は悠樹の姿がそこに見えないことを知ると、すぐに動いた。身近なデスクに飛び乗り、ざっと周囲を眺める。

すると一秒も経たないうちに晶子と悠樹の姿を見つけた。

「佳代子さん！？　　そういうことか　　！」

何が起きたのかを理解した友は、真つすぐに二人の下へと走り出した。

「くそ、バレたわっ！　何てことをしてくれたのよ！」

晶子は悔しそうに冷や汗を流しながら、悠樹の体を空中に持ち上げる。そのままどこかへ投げつける気なのだ。

「させるか！」

友は咄嗟に下に落ちていたイミニティーの男のナイフを拾うと、それを晶子の伸びた腕に鋭く飛ばした。

それは寸分の狂いもなく、緑色の肉を貫く。

「くおっ！？」

晶子は骨の間際まで刺さったナイフの痛みに、反射的に腕の力を抜いた。悠樹はそこのおかげで無事に地面に落ちる。

「悠樹、離れろ！」

空の ワスプ・ナイフ W A S P K N I F E を片手に握りながら、友が叫ぶ。しかし

悠樹はこれまで友が見た中で最大の憎しみを顔に浮かべながら、一直線に晶子に向って突込み出した。

「お前が、お前が敏を　　！」

「悠樹、よせー！」

「ガキが、調子に乗るんじゃないわよ！」

晶子の左腕も右腕と同じように怪物かし、迫っていた悠樹を吹き飛ばす。悠樹は友にぶち当たると、一緒に倒れ込むように背後に転がった。

「友！」

その姿を心配そうに見ると、西川はキツと晶子を睨み付けた。

「あなたは……あなたが　　」

これまでのことを思い出し、唇が震える。

「そうよ、私が横谷晶子よ！」

全てに開き直ったような笑みを浮かべながら、晶子は叫んだ。
「こうなったらここで全員殺してあげるわ」

そしてそのまま己の体を変形させ始めた。

空中にぶら下げていた両手を床に着き、四つんばいになる。すると徐々にその背から無数の緑色の腕が生え出し、あっと言う間に腕の花を咲かせた。

阿修羅とは違う！？

てつきり阿修羅と同じ姿になると思っていた西川はその様子に愕然とする。

晶子の変化はそれだけでは終わらなかった。

ガーゴイルのように耳を尖らせた顔は老婆の時の姿の何倍も皺だらけになり、その両手両足と同じく肥大していく。まるで犀や象の足だ。最後に背中中央が大きく盛り上がったと思ったら、そこから緑色の皮膚をした美しい絶世の美女の上半身が飛び出した。それはデガウス・ジェイルを注入する前の、横谷晶子本人の姿だった。

> i 3 4 5 1 — 2 2 4 <

「よくも私の計画を……」

憎憎しげに生存者たちを睨み付けると、晶子は大声で鳴いた。美しさとはほど遠い、まさに怪物の声で。

「ビィァァァァァー！」

<第十六章>” 阿修羅女王”

<第十六章> 阿修羅女王 ファイドラ

「窪田さんと佐伯さんは後ろに下がって！ 山並、戦えますか！？」
突如その正体を明らかにした横谷晶子を目にし、西川は動揺しつつも何とか言葉を絞り出した。

阿修羅の一撃で戦闘をリタイヤしたものの、この状況ではどう考えても戦いに参戦するべきだ。痛む体の疼きに耐え、山並と呼ばれた二十代後半の男は立ち上がった。刈り上げた髪がその勢いで逆立つ。

「じ、自分はもう大丈夫です。戦えます」

「あなたは後ろの二人のことをお願いします。あの蜘蛛女は 横谷晶子は私と友たちで何とかしますから、その間に彼らを逃がして下さい」

「ですが、扉のロックは？」

「どういわけかロックは解除されていました。今なら手動で扉を開けられるはずです。出来るだけ早く外の仲間を呼んで来て下さい。

さすがに、私たちだけでは勝てそうにもありません」

「わ、分かりました。 後武運を……！」

「ぐるん」とこちらに向いた晶子の水色の目にびびりながら、山並はそう答えた。

「友、立てますか？」

続けて西川は、先ほど晶子に吹き飛ばされた悠樹たちの方を見る。二人は苦痛の呻き声をあげながらも、なんとか膝を立てた。

「…… あのかそ女、ぶつ殺してやる……！」

目を血走らせ、口元から一筋の血を流しつつ、悠樹はなおも憎しみに染まった顔を晶子へと向けた。今にも晶子を食い殺さんばかり

の気迫だ。友は強打した己の背を撫でながら、そんな悠樹の暴走を食い止めようとした。

「落ち着け悠樹。気持ちとは分かるが、感情的になるのはマイナスの効果しか生まない。冷静になるんだ」

「あいつは敏を殺したんだ！ 冷静になんかなれるか」

「何？ 敏くんが？」

友はいきなり悠樹の口から飛び出た言葉に驚いた。

「あいつの足元を見ろよ！」

悠樹は息を荒げながら目で一点を示す。友がそこを向くと、床の上に、隣に立っている男と同じ顔の亡骸があった。無残にも他の職員たちの死体と同様に転がっている。確かに敏のようだ。

「それでも冷静になれって言うのか！？」

「悠樹！」

悠樹は阿修羅戦で友から貰ったナイフをしかと握りしめ、その怒りのままに晶子目掛けて走り出した。頭の中にかつて自分が放った言葉が甦る。

『泣くなよ、敏。お前は俺が必ず守ってやる。俺は 兄貴なんだから』

「くそおつたれええええー！」

溜まった疲労やダメージの所為で、体中の骨が、筋肉が、臓器が、破裂しそうなほど軋む。肺が空気を求めて喘ぎ、心臓が爆音を奏でる。

だがそれでも、悠樹は動きを止めなかった。

あいつには俺と違って未来があった。あいつはここで死ぬべきじゃなかった。あいつは、敏は、俺や親父の希望だった。この血に塗れた家族の因果から抜けてくれる、俺たちの救いだっただ。

「ビィィァァァ！」

真っすぐに突撃してくる悠樹を目にし、あざけ嘲るような笑顔を上の顔

に浮かべながら、晶子はその両足、元々は佳代子の腕であった前の足を持ち上げた。

「死ぬ気か　！」

友は焦り、飛び出した。が、どう考えても間に合いそうにはない。頭の上に落ちようとする巨大な足を眺め、悠樹は晶子の感覚を共感能力で知った。

落胆、怒り、憎しみ、自惚れ、優越感、勝利の確信、その他エトセトラ……

悟るでもない、予想するでもない、理解するでもない。自分の感覚としてそれがダイレクトに頭に浮かぶ。

てめえ、俺を見下してんのか？ 弟を守れなかった。親父を守れなかった。ただの馬鹿だと　見下してんのか？

既に限界を超えていた怒りの量がさらに増え、心の容器から溢れる。

「ふざけんなあああつ！」

ぶちつと、何かが切れる音を連想させながら、悠樹は感覚を活かし、見事に晶子の両足を避けた。が、その直後、晶子の腰周り、つまり佳代子の背から生えた腕に頬を殴られ大きく横に倒れてしまった。地面にぶつけた所為で、頭から血が流れ出る。再び迫り来る晶子の足を眺めながら、悠樹は無尽蔵にあふれ出る悲しみに押し潰されそうになった。

なんであいつを殺した？　死ぬべき人間は、俺の方だったのに……

「早く、こっちだ！」

山並は出来るだけ腰を低くし、後ろのデスクの前に居る佐伯と窪田に声をかけた。二人は足をガクガクと震わせながら青白い顔を浮かべ、こちら側へやってくる。こうやって動いていれば、多数あるデスクが壁となつて自分たちの姿を隠してくれるのだが、やはり怪物の横を通るといふ恐怖感が拭えないらしく、二人の足は慎重を極めた。

「もつと急げ、俺たちは早く助けを呼ばないといけないんだ。中央で戦つてゐる奴らと比べたら、全然安全なんだぞ」

西川たちの身が心配な山並は、今すぐにでもこの二人を置いて先へ進みたかった。だが、生存者を助けることは任務目標の一つでもあるし、なによりその西川に二人のことを任されてしまったため、仕方が無くこうして二人のペースに合わせざる負えなかった。熟練の隊員なら上手く二人の気を紛らわして誘導することも出来ただろうが、生憎山並の経験は浅く、しかもその実力も未熟だ。それを無意識のうちに感じているからか、窪田と佐伯も心の底から山並のことを信用する事が出来ず、これが二人の足を遅らせる要員の一つにもなっていた。

「くそ、ちんたらしやがつて……！」

山並は舌打ちしながら晶子の様子を確認するために、管理室の中央へと目を走らせた。すると今にも悠樹が晶子に踏み潰されようとしている姿が目に入った。落胆の意を込めて溜息を吐く。

ほら、言わんこつちゃねえ、さつそく死人が出るぞ！

大きな足が獲物の脳髓を砕こうと振り下ろされる。

管理室の中央、デスクとデスクの合間。やっとここまで辿り着い

た友は、晶子の足が悠樹の頭蓋を割る前に、咄嗟に体当たりすることとその軌道をずらした。瞬間、悠樹の真横の地面が深く陥没する。「立て！」

僅かに生まれた隙を逃さず、WASP KNIFEを佳代子だった下の頭の片目に突き立て、友は叫んだ。

「ビィィィアアア！」

上の頭と下の頭、晶子と佳代子の両方の口から絶叫を響かせ、怪物が大きく仰け反る。友はその隙に悠樹の体を起こすと、引っ張り出すように後ろに下がった。

「お前は俺に近い人間が死んだのかと聞いたな」

後ろから悠樹の体を支えつつ、友は耳元で力強く言葉を発した。

「俺はそうだと答えた。お前の気持ちは良く分かる。悔しさも、絶望感も、俺もお前も他者の多くの犠牲の上に生を得た最後の生存者だ」

悠樹は濁った暗い目を僅かに友に向けた。

「俺は目の前で命の恩人である仲間を二人も殺され、お前は血の繋がった家族を二人失った。どちらも身を引き裂くような苦しみだ」
複数の腕を縦横無尽に動かし、盛大な悲鳴を発しながら、晶子が暴れる。その影響で地面が揺れ、二人は近くのデスクを掴み、体勢を維持した。

「辛いだろう、苦しいだろう、痛いだろう。永遠に忘れることの、許す事の出来ない深い楔。これは死ぬまで心に焼きつき、消えることは無い」

振動で天井、換気扇などの埃が落ち、雨のように二人の上に降り注ぐ。

「だけどな、悠樹。お前がここで死んだら誰が二人の死を悲しむ？
誰が二人の真実を記憶する？ 誰が仇を討つんだ？ お前の父も、弟も、皆お前を守ろうとしていた。お前に生きてこの島から出て欲しかったんだ。お前は、その思いを、努力を、彼らの意思を全て無下にするのか？」

「……学校の先生にでもなったような口だな」

「俺は事実を言っているだけだ。俺は、俺の仲間のことを片時も忘れたことは無い。彼らの死があるから俺は今生きている。彼らの存在を、彼らの死を知っているからこそ、生きてこの腐った世界を終わらせたいと思っているんだ。お前が、お前が生を諦める事は、苦しみから逃れることは、父と弟に対する最大の侮辱だ。甘えるのもいい加減にしろ。また新しい後悔の種を生む気か？ お前はあの世まで後悔を引きずる気なのか？」

自分はかつて幼かったから、未熟だったから、掛け替えの無い仲間を死なせてしまった。

下らない意地を張った所為で怪物と相打ちになった熱血な少年。考えの浅さから犠牲にしまった勇敢な相棒。もう二度と彼らのような人間を、悲しい存在を作りたくは無い。その思いが、感情が溢れ出るように友の中から飛び出した。

悲しみが。

怒りが。

後悔が。

言い様のない、体を突き破りたくなるような深い思いが伝わる。

悠樹はその一つ一つを自分の感覚、感情のように共感能力で知った。^{まぶた}瞼の裏に、大助と敏の顔が浮かぶ。

『兄貴』

『悠樹』

そう笑顔で、自分の名を呼ぶ二人の姿が 自分の、家族の顔が。

悠樹は痛みに暴れ狂う晶子の顔を見た。

敏の死に際感覚が伝わっているのか、何となく分かる。晶子は自分が助かりたいがために、この島を巻き添えにした。恐らくここに住んでいる己の家族さえも。

長い間ここで働いていたから知っている。横谷家の仲はかなり良かった。実際にその姿を見たことはないものの、噂や話に拳がる彼らの関係はまさに幸せな家族そのものだった。自分たちのように、

怒りと悲しみに染まったようなものではなく、ごく普通の平和な関係。

それが何でこんなことになったのか。

一見険悪なように見えても心の底で繋がっている家族もあれば、繋がっているように見えて実際は殺し合いを演じる家族もある。

その違いが、それをわけ隔てる原因が何かは分からない。

ただ、悠樹は、自分たちが前者であることを心の底から良かったと思った。

「……じゃあどうすればいいんだよ。俺の、この気持ちはどう清算すればいい……？」

友の言葉から、その思いから、僅かに冷静さを取り戻した勇氣は静かに呟いた。

「自分が正しいと思うことに費やせ。今一番重要なことは何か考えるんだ」

優しく、友は諭すように言った。

その瞳をじっと見つめ、悠樹は何かを決めたように上を向いた。
「分かった」

山並たちがなんとか管理室の出口まで辿り着くと、晶子はようやく彼らの存在に気がついた。

下の頭、佳代子の眼球の傷の痛みと、山並らが逃げることで生じる危険に焦り、トラックのような速度と圧力を撒き散らしながら猛然と彼らに突き進む。

「やばっ!？」

山並は顔面蒼白にしながら慌てて扉の手動スイッチを押した。

「早く！ 開けえ、開けえ、開けえええ！」

扉と晶子を交互に見ながら無意識のうちに叫ぶ。

ゆっくりと横にスライドしていく扉が待ちきれなかったのか、佐伯と窪田は揃ってその扉に縋りついた。

「早く、早くっ！」

「お願い、開いてよ！」

三人の真後ろに晶子が飛び降りる。

「ビイイイイアアアアア！」

時を同じくして扉が開き、山並たちはオアシスに飛び込む砂漠の放浪者のように、一気にそこを通り抜けた。コンマ数秒後にその扉の地面を晶子の大きな足が碎き割る。

「山並、頼みましたよ！」

既に姿の見えなくなつた彼らに声をかけると、西川はこちらに向つてくる友と悠樹の方へと走りよつた。

「友、どうしますか？」

自分が上司であることも忘れて不安そうにそう聞く。友はさつと考えを巡らせると、すぐに答えた。

「ここはまがりなりにもイミユニティーの研究施設だ。研究施設なら、必ず『あれ』があるはず」

「あれ？ 抗イグマ剤ですね。ですけどあれは事件発生当初に、柳管理長が水槽中に全て拡散させたはずですよ。それに、晶子は一度薄めたとはいえ、私の手持ちの薬を商品エリアで飲んでいます。この事件で生まれた生物に、抗イグマ剤は効かないのではないですか？」

「いや多分、横谷晶子には効いていた。恐らくあの老化、副作用か何かでしょう。抗イグマ剤の効果である副作用を長引かせ、老化の時間を維持したんだ。柳が拡散させたというのも、本当に拡散しているとは思えない。これを起こした犯人が誰にしろ、抗イグマ剤の拡散は予測がついたはずだ。必ずシステムの水槽へ抗イグマ剤が

届かないように細工をしている」

友は管理室前方の中央、水質管理設備の方向へと視線を傾けた。そこには大きな凸でこの字を横に倒したような機器がある。

「可能性が高いとすれば、あの注入機自体の中か、この管理室周囲のパイプの中で止められていることだ」

「だったら、すぐにシステム解除に取り掛かります」

西川はすぐに制御盤の方へと走り出しかけたが、友はそれを止めた。

「地下にあるはずの抗イグマ剤も無かったんだ。晶子にはかなりシステム面に優れた協力者がいたんでしよう。俺たちの技術では解除できる可能性は低い。出来るのなら、既にここのスタッフがやっているはずだ」

「じゃあ、どうすれば？」

「俺に任せて下さい。何とかして抗イグマ剤を、大量に晶子に食らわしてみせます」

「また何か策があるんですね……？」

黒服では純粋な戦闘力が、ディエス・イレでは信念と死を恐れない覚悟が、イミユニティーでは柔軟な発想つわものを持つ者が兵とされる。友の実力を信じている西川は自分の命、全てを彼に任せることにした。

「では、私はあなたが仕事をできるように、なんとかあの蜘蛛女から時間稼ぎをします。正直、自信は全くありませんけど……」

若干、顔を青くして西川はそう言った。

「おい、ふざけんなよ。あんたがそんなことこなせるわけねえだろ。囃は俺がやる」

「え？」

突然悠樹が前に出てそう言ったので、西川は驚いた。正直、先ほどの出来事から悠樹はもう使い物にならないと思っていたのだ。「西川さん、大丈夫だ。悠樹はもうちゃんと戦える。あなたは中衛として彼に指示を送って下さい。指示を出すのなら、あなたの得意

分野でしょう？」

西川は友と悠樹の顔をまじまじとみた。どうやらその言葉に嘘はなさそうだ。出入り口付近にいた晶子も自分たちの不穏な動きに気づき、こちらに向って歩き出している。急がないのはもう山並たちが逃げてしまったため、腹を括くっているからだろう。すぐに覚悟を決めた。

「分かりました。横谷晶子さえ倒せれば全て終わります。悠樹さん、私を信じてくださいね。……友、あなたには待っている人もいます。決して無茶はしないように」

二人はしっかりと頷いた。

「では、やりましょうか」

西川が身構え、強い眼差しを晶子へと向ける。晶子はもう三人の眼前まで迫り、一気に攻撃に取り掛かるうとしていた。

それを見た友はすぐに右方向へ走り出した。

同時に悠樹は叫んだ。全てを吹っ切るような、腹の底からの大声で。

「来やがれえ　化物！」

<第十七章>赫牢の外へ（前編）

<第十七章>赫牢の外へ（前編）

唸る声が聞こえる。

鼓膜を震わせ、脳を突き抜ける。

他の誰の声でもない。間違ふことなき己の喉から出ている声。

野獣のような、壊れた楽器のような不快極まる、気味の悪くなるような声。

緑色の四肢が見える。

葉よりも薄く、茎より濃い人外の肌。

それは蜘蛛のように広がり、獲物を狙う触手。

美とはかけ離れた怪物、化物の体。

醜い。

醜い。

醜い。

何故こうなったのか分からない。自分が求めていたものはこんなものではなかった。

永遠の美。

誰もが認める美しさ。崇め、褒め称え、羨む美そのもの。

目の前に走り回る者たちがいる。

羨ましい。

健康な肌色の皮膚。

純粋な人間としての肉体。

自分とは違う、存在。

許せない。

許せない。

許せない。

彼らにも、自分と同じ景色を見せたい。

自分と同じ存在になって欲しい。

寂しい。羨ましい。妬ましい。

憎い。

「ビィィィオオオオオオオオ！」

空気が震える。

横谷晶子の一際大きな雄叫びが鳴り響くと、一瞬にしてその場にいた者たちの背筋が凍りついた。

「開き直りやがったな……！」

山並たちが逃亡したことで、もはや晶子の計画は完全に崩れた。どう足掻いてもその正体を隠すことは出来ない。

それを理解した悠樹は先ほどまでとは打って違って慎重に身構えながら、こちらに向ってくる晶子を睨んだ。

「クソババアめ……！」

晶子が飛び跳ね、両前足を振り下ろす。悠樹は転がるようにそれをかわし、横に設置してあるデスクの影に隠れた。

だが晶子はすぐにそのことに気がつき、無数の腕でデスクを激しく横にずらしながら、悠樹の目の前へと躍り出る。

「ずああっ！？」

連打される拳の影響で次々に窪んでゆくデスクの合間を突き抜け、悠樹は頭の血を拭う間もなくただ走り続けた。

「右に飛んで下さい！」

少し離れた位置にいる西川から刹那的な声が飛ぶ。悠樹は何も考えずその指示の通りに身を投げた。真後ろにあったいくつかのデスクが宙を舞う。

「くそっ！」

息つく暇もなく、晶子はさらに追撃を続けた。悠樹が前方に逃げると前足で、左右に逃げると背中 of 複腕で、執拗にその毒手を突き出す。

「スタミナ切れを狙っている　！」

西川は晶子の狙いに気がついた。悠樹の体力は大分消耗されている。こうして休む間を与えず攻撃を続ければ、一分と持たずに足が止まってしまうことになるはずだ。

「くそ、友　まだか!？」

燃えるように熱い喉の空気を感じ、悠樹は部屋の反対側へと視線を向けた。

注入機の前まで来た友は、心配そうに晶子の乱舞を振り返った。

「何とか耐えてくれ……!」

拳を握り締め、小さく呟く。

自分がやろうとしていることが成功すれば、かなりの確率で晶子に大きなダメージを浴びせることができる。だが、そのためには晶子の注意が自分に向いていないことが必要だ。頭から血を垂らしながら逃げ惑う悠樹と、常に晶子の背後に回るようにして援護をしている西川に神頼みするような視線を向けると、友は作業に取り掛かった。

管理室を教室とするのなら、注入機は丁度教卓の位置にある。その周囲には機器の特性上、様々な円柱状のキャビンが設置しており、中には複数の薬品が内蔵されていた。友はそこから大型の消毒用アルコール瓶を取ると、下に転がっていた腹の大きな白衣の男から脱がした上着を中に突っ込んだ。

「足りてくれよ」

気化の速度が速いアルコールを使用することに若干の不安を持ちながらも、その瓶を注入機の投薬口、側面に付いている半径十センチほどの円形の蓋の中へと突っ込む。

「管理室周囲のパイプの中を通るのなら、この量でも何とか足りるはずだ。あとは……運だな」

友はポケットからライターを取り出すと、最後にそれに火をつけ素早く蓋をしめた。

「ビヨオオオオオオオオオ！」

「うるせえー！」

振り下ろされる両足を紙一重でかわす。晶子の直線上にいれば、両足の攻撃を受け、側面にいれば複腕の攻撃を受ける。悠樹はそのどちらからの攻撃も受けないように、常に円を描くように移動し、斜め、斜めに進んでいた。

「くそおお、まだか友！」

阿修羅と同じで晶子の力は凄まじい。一度でもまともに攻撃を受けるか、捕まれば即お陀仏になってしまう。次第に鈍くなっていく己の足の動きと、狭まった晶子との距離に流石の悠樹も恐怖を抱いた。

「うらああっ！」

これまでのように右に回ると見せかけて、逆方向、左側へと飛ぶ。晶子は見事にフェイントに引っ掛かり、悠樹とは正反対の方向に体を突撃させた。

「悠樹さん」

晶子が戻ってくる前に身を屈ませると、そこへ西川が合流した。

「おう、友の方は……」

「し、黙って！」

西川は激しく呼吸をしながら尋ねた悠樹の口を片手で強く押さえ、デスクの影へと引き込んだ。

その横を晶子の巨体が通り過ぎる。

「おい、隠れてたら囷になんねえじゃねえか」

「ずっと動いていてはあなたの体が持ちませんよ。こうして定期的に呼吸を整えないと」

「……それで、友のほうはどうなった？ 策とかは終わったのか？」

「分かりません。注入機はここからは見えませんから」

「ちっ、あの野郎、もしかして逃げたんじゃねえだろうな」

「友はそんなことはしませんよ。それより、どうします？ こうして逃げるのもそろそろ限界でしょう」

「あんたらお得意の罠とか何か作れないのか？」

「ここは利用できるものが殆どないですからね。隠れることくらいしか……」

西川はすまなそうに溜息を吐いた。それを見た悠樹も落胆の表情を浮かべる。

「俺に指示を出している間ずっとあの化物を見てたんだろ？ 何か弱点とか見つけてねえのか？」

「弱点ですか？」

西川は顎に手を置き、下を向いた。

「そういえば……晶子の攻撃、獲物が前方にいる時には前足しか使っていませんでした。もしかしたら、あれは一番威力が高いから前足を使用しているというより、側面の複腕が前方に届かないからかもしれないせん。あの前足を上手く避けることが出来れば、晶子に攻撃を当てられる可能性はあります」

「さっき友のナイフを食らってたしな」

「でも、物凄く危険ですよ。一歩間違えば即死してしまいます。奴らの筋力は人間の比ではないんですから」

「それは阿修羅も魚人も同じだろ。今更そんなもんは怖くねえよ。俺が怖いのは、仇を討てずにくたばっちまうことだけだ」

再び垂れてきた額の血を袖で拭い、悠樹は機を伺うように片目をデスクの影から覗かせた。

「ドオオオオオオ？」

太く、かつ高い声で晶子が疑問の意を示す。先ほど悠樹を見失ってから管理室の中央付近まで戻ったようだ。

「ちよっ、本気で反撃する気ですか？ 時間さえ稼げば友が抗イグマ剤を撒いてくれるんですよ？」

「それが成功するとは限らねえだろ。攻撃は多い方がいい」

「戦略の基本は敵が油断している時に攻撃を仕掛ける事です。って、待って下さい！」

既に遠ざかっていた悠樹の背を見つけ、西川は呆れたように肩を落とした。

いつまでも逃げてばかりだと思ふなよ！

部屋の端から端へ、悠樹は障害物など物ともせず駆けて行く。

「ビュウアア！」

その物音に気づき、晶子が大きな体を反転させた。

「俺はここだあ、化物おお！」

晶子は急停止を強いられた馬のように前足をあげ、一気に悠樹の頭を砕こうと振り下ろす。逃げる事が目的だった先ほどとは違い、真正面からの攻撃だ。様子を見ていた西川は咄嗟に歯を食いしばった。

獲物を見つけた晶子の喜びを、満足感を感じる。神経をすり減らしてその感覚に集中し、悠樹はなんとか相手の攻撃にタイミングを合わせ、バックステップで退いた。自分の両足の数センチ前に、巨大な二対の槌が落ち、床の一部を陥没させる。

「死ねええええ！」

敏の仇だ！

目の前に佳代子の不気味な顔が下りて来る。悠樹はその眉間に向けて、渾身の力を込めてナイフを突き出した。

先ほど友に貫かれた所為で、黒い血がこびり付いていた佳代子の頭部がさらに黒く染まる。悠樹の一撃は見事にその脳を砕いた。だが

「ビヤアアアウアアアアアー!？」

「何!？」

晶子は僅かにたじろいだものの、殆ど間を置く事も無く反撃を始めた。熊の腕のように左右の前足を振るい、悠樹を後退させる。

「脳に刺したんだぞ!？ 何でだよ!」

わけが分からないまま、悠樹は必死にその攻撃を避けようと体を捻る。しかし真正面から向き合っている格好と、その体躯の差もあり、先ほどのように上手くかわすことが出来ず、悠樹は体の所々に晶子の前足を掠^{かす}らせていた。

「やっぱり、あっちの上の頭が本体なんだわ……!」

晶子の本当の姿にもっとも近いのは、佳代子の背中から生えているあの若い上半身だ。そのことに気がついた西川は、何の策もなく悠樹を行かせてしまったことを激しく悔いた。

「西川さん!」

デスクの列と、デスクの列の間にある隙間を挟んだ位置に、友が駆け込んでくる。策とやらは仕掛け終わったらしい。

「すいません、私の不注意で悠樹が……!」

「話は後だ。大体予想が付きます。どうやらあの馬鹿はもう俺の話を忘れたらしいな……! あと数分で仕掛けの効果がでる。それまで何とか生き延びないと」

悲鳴を上げて晶子から逃げている悠樹に頭を抱え、友はそう言った。

「うおおああああつ!？」

一発一発が床にぶち当たるごとに強い振動が生じ、足元がふらつく。何度も何度も繰り返される強烈な足の攻撃に、悠樹の気力は物凄いスピードで削がれていた。

「くそ、このババア、調子に乗りやがって!」

壁に追い詰められたら終わりだ、どうする!？

背後をちろりと一瞥し、下唇を噛む。自分で撒いた種とはいえ、あまりにも間抜けな結果に苦笑いした。

「ビュウオオオアアア！」

「ゴワツ」と晶子の右前足が持ち上がり、悠樹の腹に向って真っ直ぐに伸びる。

「やべっー！」

悠樹は間一髪でそれをかわすも、体勢を崩し、体を傾かせてしまった。これを機とばかりに晶子はさらに左足を一気に振り下ろす。

この体勢で攻撃を避けるには倒れるしかない。倒れなければ内臓を根こそぎ潰されてしまう。悠樹は悔しさを噛み締め、仕方が無く後ろに向って身を投げた。

くそ、もう避けねえ！

立ち上がる時間も、転がる時間も無い。どうすればいいのか頭が真っ白になる。だがその時、左右のデスクの裏から友と西川が現れた。たった今悠樹がかわした足の着地地点に向って、二人は同時に何かを素早く滑り込ませる。

晶子はその動きに気づくことが出来ず、思いつきりその「何か」を足で踏み抜いた。

「グジュリッ」と、気持ち悪い音が耳を突き抜ける。晶子の足の甲は突然爆発したように鋭い無数の針に貫かれた。

「ビヤアアアアアッ!?」

流石の晶子もそのあまりの痛みに動きを、止め、大きな悲鳴を吐き出す。

「早く逃げろ！」

友たちに持ち上げられ何とか体を起こすと、悠樹は晶子の足を貫いたものの正体を理解した。

「ペ、ペン立て……!?!」

「あれだけ物凄い力で足を叩きつけているんだ。ペン立てだって立派な凶器に変化するさ」

友は晶子に対する皮肉の笑みを浮かべ、そう言った。

「オノレエエエー！」

「なに！？」

突如響いた声に悠樹が振り向く。

これで時間が稼げる。三人がそう思ったときだった。晶子は完全に逆上し、自分の足の痛みにも構うことなく猛牛のように特攻してきた。その髪は逆立ち、目は真っ赤に血走っている。今度こそ完全に我を忘れたらしい。

「は、早い！」

動きが先ほどとは段違いだ。三人は小枝のようにその突進に突き飛ばされた。

「ぐあっ！」

デスクを飛び越え、死体の上を転がり激しく回転する。悠樹は痛みと衝撃で目を白黒させながら何とか体の移動を止めた。丁度背後に壁が当たり、ひんやりとした冷たさが伝わってくる。

「くっ あ……友……！」

デスク越しに晶子が友に迫っているのが分かる。あれほど強く吹き飛ばされたのだ。友が自分と同等のダメージを負っていることは目に見えている。ここまで来て友の死を容認するわけにはいかなかった。呻き声を上げながらも膝に力を込める。だが、どうしても体は起き上がらない。

くそっ！ 友！

悠樹は必死に腕を伸ばした。

「ビョオオオオオ……」

耳の下で晶子の叫びが聞こえる。

管理室中央のデスクの上に背を預けながら、友は自分の体に生じた傷の被害を冷静に判断した。

右肩が動かない。これは……骨折か打撲したな。

視線を前に向けると、晶子が勝ち誇った笑みを浮かべ、一步一步

近付いてくる。友はその笑みを見て恐怖と共にやはり人間の意識が残っているのだと理解した。

無数の長い腕が伸び、友の四肢を掴み、持ち上げる。全くついていないことに、デスクの上に飛ばされた所為で背面の複腕が届いたようだ。

「友……！」

近くに吹き飛ばされていた西川が、そのピンチを知り、悲痛そうな声をあげる。友は口から血を流しながらも、全く表情を変えることなく目の前の晶子を睨み続けた。

「お前は死ぬ」そう示すように晶子は唇を歪め、複腕に力を込め始める。阿修羅を再現し、友の体を八つ裂きにする気なのだろう。

「ぐっ　！」

筋肉が一本一本断裂していく痛みには友は初めて顔を曇らせた。

西川と悠樹はまだ体の痺れが取れず、動くことは出来ない。完全な晶子の独壇場だ。糸に掛かった蝶々を甚振る蜘蛛のように、巢に踏み込んだアリを待つウスバカゲロウのように、晶子はじつくりと友の腕を四方に引き始めた。

「ビョオオアアアア！」

憎き相手を殺す喜びからか、自然と晶子も歓喜の声をあげる。

だが友はその喜びをあつさり寸断した。

「残念だったな……！　時間だ」

晶子がまさに止めを刺そうと意気込んだそのとき、管理室の壁という壁が爆発した。同時に天井でもスプリンクラーが発動し、人口の雨をありありと降り下ろし始める。

「な、何だ！？」

一瞬にして水浸しになった管理室の様変わりに、悠樹は目を盛大に見開いた。

「ビュウオオオオアアッ！？」

全身から煙があがり、体を焼きつける。晶子は想像を絶する痛み、友の拘束など完全に忘れ、腕という腕を振り回し、もがきだした。

「こ、これは」

西川が信じられないといった表情で暴れ狂う晶子を見つめる。友は晶子の足元から肩を押さえ離れると、勝利を確信したように呟いた。

「フリープ
BLEVEだ」

BLEVE、つまり水蒸気爆発。水憐島の壁の中に無数のパイプが迷路のように蔓延っていることを知った友は、最後の策としてこれを思いついた。

液体が加圧容器内にあるときにその容器を加熱すると、内部の圧力が高くなる。そして容器が大破すると同時に一気に大気圧以下の圧力まで低下し、液体の沸騰現象を引き起こし、大爆発を生み出すのだ。悠樹が注入機の入口に火種を加えたエタノールを置いたのは、これを起こすためだった。

注入機はその特性上、水憐島内の全てのパイプと繋がっているが、現在は天野の作為によって管理室周囲でその流れは閉じられていた。このことが、BLEVEを引き起こすきっかけとなった。そして今ここに込められていた水の中には無数の抗イグマ剤が含まれている。晶子にとっては頭から猛毒を浴びせられたようなものだ。

「これで倒せるのか？」

ハア、ハア、と息を吐き出しながら、悠樹は期待の籠った目を部屋中央へと向ける。あちらこちらから飛び交う抗イグマ剤入りの水に苦しみながら、晶子はまだ生きていた。激しく暴れてはいるものの、一向にその動きは衰えない。

「おかしい……」

異常を悟った西川が首を傾げた。

「友、おかしいですよ。普通これだけ抗イグマ剤を浴びれば、こんなに長持ちはしないはずですよ」

抗イグマ剤はイグマ細胞を食べる微生物、白血球に似た存在だ。イグマ細胞の塊である晶子がそれにここまで耐えることは奇妙極まりなかった。

<第十八章> 赫牢の外へ（中篇）

<第十八章> 赫牢の外へ（中編）

管理室から飛び出すと、そこにも無数の死体が転がっていた。どれれもが醜く顔を歪め、断末魔の表情のまま固まっている。

「こつちだ！」

その死体を一瞥し、友は右に向かって廊下を走り出した。三人が角を曲がるとほぼ同時に、管理室の壁を大きく粉碎しながら晶子も廊下に飛び出す。

「このままじゃ追いつかれます」

壁が吹き飛んだ音を聞き、西川が焦りの声を上げた。

角を曲がり、職員用通路から出た先には二つの道があった。地下二階の飲食店エリアへ行く道と、そのまま同階を進む道だ。

「地下は広い、あいつに有利だ。このまま行くぞ」

真つすぐ進めば水槽が立ち並ぶ細い通路へと出る。そこならば晶子の速度も落ちるはず。咄嗟に友はそう判断した。

水槽内で泳いでいる魚たちが、まるで夜空に輝く星々のように左右を高速で通り過ぎる。感染を免れ、己自身の肉体を保れた者たちだがそんな彼らの命もあつと言う間に、無残に散らされてしまった。天井を、左右の水槽を、壁を、四方のあらゆるものを押しのけ、割り、バラバラに崩しながら横谷晶子はその通路へと踏み込んだのだ。

「来たぞ！」

いち早く存在に気がついた悠樹が大きく叫ぶ。

「ビョオオオオー！」

晶子は「見つけた」とばかりに盛大な一声を上げると、己の複腕

と前足をここぞと振り回し、追って来た。

「あいつ、こんな狭い廊下まで……」

周囲のものをボロボロにしながら突き進む晶子に、流石の悠樹も冷や汗を流した。

廊下の終わりに差し掛かり、広い場所へと出た。大型のマグロ用円柱水槽が中央に置かれていた広間だ。その水槽自体は魚人によって跡形も無くなってしまっている。

「増援です！」

広間を挟んで真向かいの廊下から十人近いイミユニティーの男たちが駆けて来る。先に逃げた山並たちが呼んでくれたらしい。悠樹は彼らが正面改札の前で自分たちを見ていた連中だと、すぐに理解できた。

こいつら、今更のこのこと……！

前回会ったときの彼らの態度を思い出し、拳を握り締める。

「退いてろ！」

その内の一人が三人を横に押しやると、手に持っていた筒状のものを晶子の方へと投げた。その物体は丁度晶子の目の前に落ちると、辺り一面に激しい炎を撒き散らし出す。

「焼夷弾……！」

悲鳴をあげる晶子を見て、友は驚いた。

「外で待機している間暇だったからさ。食用油を使って大量に作らせて貰ったぞ」

そういうと、その男は続けて二つの筒を投げた。

「さあ、お前らはもう行け、ここからは俺たちの仕事だ。改札からここまで来る途中に爆弾を仕掛けさせてもらった。出来るだけ急いだ方がいい」

「爆弾っ！？ 下田さんの指示ですか？」

「その上からだ。扉のロックが解除された今、感染者が出口に近付けばイグマ細胞の存在がマスコミに流出する。だからその前にこの水憐島を爆破し、証拠を隠滅するんだとさ」

「そうか、上らしいな。……分かった」
友は素直にその言葉に甘んじ、先へ進むことにした。

全身が熱い。火で、肉体を蝕む小さな天敵の所為で。己の体を苛む痛みに苦しむ中、横谷晶子は悠樹たちが遠くの方へと去りつつあることを知った。

何処へ行く？ 私をこんなにしておいて、この計画の、私の全てを無駄にしておいて、何処へ行く？

全ては上手く行くはずだった。

広と天野の計画を利用し、「あの男」の望みを果たすことで、自分分は自由になるはずだった。

それが、たった一つのミスで。悠樹を殺せなかった所為で、台無しになってしまった。

お前が、お前の所為で……！

炎に歪む景色の中、じつと悠樹の姿を視界に納める。

何故お前が助かり、私が死ななければならない。……許せない。お前は、お前だけは……

「ビョオオオオオオオッー！」

「何！？」

突然炎が割れた。男がそう思ったときだった。晶子は大声で唸り、廊下を飛び出すと、焼夷弾を持った男の頭を踏み潰し、一目散に悠樹へと突撃した。

「なっ！」

「きゃああ！」

友と西川が背面からの突然の急襲に驚く中、悠樹は感覚で彼らよ

りもコンマ数秒早くその動きに反応し、晶子の突き出した右前足を紙一重でかわした。声を発する間もない、まさに一瞬のことだった。「ぐああっ!？」

「あぶしゅっ!」

悠樹たちが先へ進もうとしていた廊下の前に立っていた二人の男が、その一撃で頭を碎かれる。

「う、上だ! 急げ!」

一歩前に足を踏み出していたら、自分は死んでいた。そのことに流石の友も声を上擦らせる。だが必死に冷静さを維持し、辛うじてそう叫んだ。出口へ一直線に繋がる廊下は晶子が塞いでおり、あとは来た道に戻るか一階へと進むしかない。その中でもっとも近い道は真横にあった階段だ。悠樹たちが晶子から逃げるには一階へ進むしかなかった。

三人が焦りながら階段を駆け上がってゆくと、晶子はその場に残った他のイミュニティーの男たちには一切目もくれず、階段を破壊しながら上へとよじ登っていった。

「どうなってるんだ?」

後に残った者たちはただ不思議そうにその光景を見た。

三人が一階に辿り着くと同時に、真後ろからけたたましい轟音になる。晶子が足場を碎きながら階段の中腹まで到達したのだ。

「おい全然役に立たねえぞ、あいつら!？」 晶子の奴普通にこっちに来てんじゃねえか!」

イミュニティーのメンバーが晶子を殺してくれる。そう考えていた悠樹は、彼らの醜態に怒りの表情を浮かべた。

「晶子は何故私たちを追って来るの!? 今更私たちを殺しても意味がないのに……」

「このままだと俺たちここに爆破される……!」

先ほどの男の言葉を思い出し、友は悔しそうにそう言った。

「マジで爆破なんかするのかよ。そんなことしたらここで起こった事件の調査が何もできねじゃねえか。大体、地下にあるなんたらドメインとかいうのから、感染源が拡散しちまうだろ」

「イグマ細胞は海水では感染能力が著しく落ちます。海の成分は血とほぼ同じですから」

「つまり、晶子が俺たちだけを狙っている以上、生き残るにはここから出口までの間にあいつを倒すしかない。残り数十メートル、まさに生きるか死ぬかの瀬戸際だ」

「くそ、管理室から逃げた意味がねえじゃねえか！」

悠樹は走りながら壁を叩いた。

「増援組が晶子を食い止めると思っていたんだ。仕方がないだろ。今更文句を言っても意味は無い。今考えるべきは、どうやって晶子を倒すかだ」

「ちっ……」

一体この状況でどうやって倒すというのだろうか。悠樹にはその方法が全く思いつかなかった。

角を曲がると水槽で出来たトンネルが見えてくる。悠樹が始めて魚人と戦ったあの場所だ。前に見たときと同じように、小魚が無数に泳ぎ回っている。

悠樹はトンネルを潜りながら、ここでの騒動を思い出した。

腹を押さえ、もがき苦しむ哀れな男。

何も知らずその男の身を案じる自分。

魚人化した男に覆いかぶされた時は死を覚悟した。本当に死ぬと思った。

だが、大助と敏がそれを救ってくれた。あれほど横暴な態度を取っていた自分の命を。

人魚に胸を貫かれ、苦悶の表情を浮かべ死んだ父。誰一人見取る者も無く、たった一人でこの世をさった弟。

二人の無念さを考えると胸が苦しくなる。

「……いいぜ。こんなところで死んで堪るか。俺は生きると誓ったんだ。何が何でも、絶対にあの馬鹿女を殺してやる」

ここまで来て、ここまで生き延びて、むざむざと死んで堪るか。悠樹は拳を強く握り締めた。

獲物を追って、駆ける。

水中にいるかのような錯覚を抱かせる美しい水槽のトンネルをめちゃくちゃにし、足元に散らばる無数の死体を掻き分け、ただ走る。「ビョオオオオオオオ」

出口の一步手前、お土産を販売する店舗が立ち並ぶ広場に晶子はとうとう到着した。

ようやく追いついた哀れな三人に、勝ち誇ったような顔を向ける。抗イグマ剤。焼夷弾。度重なる攻撃で体中に無数のダメージを負ってはいたが、横谷晶子は弱ることなくその四肢を伸ばした。

「ドヤ顔してんじゃねえよ。ここで死ぬのはお前だ。俺たちじゃない」

その顔を、しり込むことなく悠樹は強く睨んだ。

「長引くと、外にいる連中が私たちは死んだと判断し、爆薬のスイッチを押してしまいます。短期で倒さなくては。向こうからも晶子の姿は見えているはず」

もう逃げ場のない状態に微かに体を震わせながら、西川がそう言った。

晶子にしても、悠樹たちにしても、もう後がない。

ここで相手を素早く殺したものが、「生」を掴み取ることが出来る。

その場にいる誰もが本能的にそれを実感していた。

「フアランクスだ」

晶子を眼前に納めながら友が呟く。西川と悠樹は事前に教えられた通り、行動に入った。

紀元前五世紀頃、スパルタ軍の兵団は僅かな兵力で敵軍隊を蹴散らすために、一つの戦法を生み出した。

突撃だ。

隊員を縦にずらりと並ばせ、まるで槍のような形に整列し、その状態で突撃を行った。これはその形状からフアランクスと呼ばれ、スパルタ軍が多くの戦いで勝利を納めた理由の一つとなっている。

かつて怪女王と呼ばれた大型感染体と遭遇した際に、友はこの手段を取る事で見事相手を倒していた。晶子の今の形状は怪女王に繋がるところがある。そのことから、友はこの戦法を使用することを決めたのだ。

短時間で、かつあの複腕の攻撃を回避しつつ晶子の上半身を攻撃するにはこの手しかない。頼むぞ、悠樹！

先頭に並びながらそう願う。

友の考えた方法は次のようなものだった。

まず、自分と西川が晶子の前に立ち向かい、足を止めさせ、攻撃を引きつける。その隙に悠樹が自分たちの背を利用し、上に飛び上がり晶子の頭部を攻撃する。まさに怪女王を倒した時の動きそのままの戦法だ。

晶子はこちらの奇妙な動きに警戒心を抱いたのか、三人の立ち位置が変化している間何も攻撃をしてこなかった。

通常の感染者とは違い、赤鬼を初めとする人工感染者には知能を残しているという特徴がある。

感情や気分に任せ、猛進しようとする本能をその知能が引き止めるのだ。

侍同士が立会いをする最中のように、全員の額に緊張が走る。

友、西川、悠樹はこの水憐島という血に染まった牢獄から出るた

めに。

晶子は己の恨みを晴らすためだけに。

それぞれが相手を補足し、向かい合った。

「ビヨオオオオオオオ！」

「行くぞ！」

高音楽器と低音楽器を一齐に鳴らしたような晶子の声を合図に、友は走り出した。順に西川、少し離れて悠樹と続く。

一步一步進むごとに、晶子の声が、姿が大きくなる。

死の気配が、悪寒が肥大化する。

だが今ここで晶子を倒さなければ、後がない。その思いが、足の筋肉を動かし続けた。

晶子が前足を持ち上げ始める。

その動きが、スローモーションのように悠樹の目に映る。

完全に晶子の足が持ち上がる前に、友がその攻撃領域へと侵入した。

続けて西川も入る。

晶子は後ろ足だけで体を支えると、左右の前足を小さく振り下ろした。

大振りでないことから背後の悠樹を意識しているのだと悟った友は、その注意を自分に向けるために、敢えて相手の懐に飛び込み、叩きつけるようにナイフを差し込む。しかし晶子はその痛みを無視し、佳代子の頭の横から血が噴出そうとも一向に構うことなく、友の胸を蹴り飛ばした。

先の戦いで肩を痛めていた友はその衝撃に耐えることが出来ず、後ろへと吹き飛ぶ。

これで残ったのは未だこの場所から遠い悠樹と、晶子の目の前にいる近接戦闘に不慣れな西川だけだ。

全滅

友の頭に咄嗟にその言葉が浮かぶ。

悠樹が晶子の眼前に辿り着く頃まで、西川は生き残ることが出来

ない。

そうなれば、悠樹自身も晶子の上半身に辿り着くことが出来ずに頭を砕かれ、地に伏すこととなる。

生と死。

生者と死者。

時間と空間。

極限状態の中で、この戦いの結末と、仲間の命の安否を決める決断が友に強いられた。

前方では西川が、後方では悠樹が、自分が指示した役割をこなそうと、動いている姿が感じられる。

コンマ数秒、いや、一―二秒の間に、体を起こしつつも友は己の持つ脳をフル回転させた。

友を退かしたことで余裕が出来た晶子は、左前足を突き出すように伸ばし、西川を倒そうとする。

悠樹は友が退かされたということにも構わず、彼を信じてただ真っ直ぐに晶子目指して大地を踏みつける。

中衛としての責任が重く押し掛かる中、友はその才能を―パーセントの無駄も無く活用させた。

「悠樹いい！」

両手を前に交差し、悠樹の前へと突き出す。

悠樹は友の感覚を理解し、殆ど本能的にそれに足を架け、宙へと飛んだ。

辛うじて晶子の攻撃を避けた西川の目に、その姿が映る。

そんな、あの距離からじゃ届かない！

「西川さん、背中を！」

動揺する西川の耳に、友の言葉が響いた。
ガッ！

悠樹は西川の肩と背の間に足を置くと、それを利用してさらに高く、高く跳ねる。

「ビィ ユ オ オ オ オ オ オ オ オ……」

断片的に聞こえる晶子の声の壁を突き破り、悠樹はその頭目の前へと飛び出した。

ズオオオオオオと、無数の複腕が視界の中に飛び込んでくる。晶子の腕が早いのか、悠樹のナイフが早いのか、その一瞬で勝負は決まる。

親父、敏…… 力を貸してくれ！

二人の死に顔が甦る。

母さん！

無意識のうちに、悠樹は心の中でそう叫んでいた。

「時間だ。押せ」

大きなテントの中。カチツと音が鳴った腕時計の針を見て、下田が部下に命じた。

ブルーグレー、紺色の軍服を着た部下は頷くと、何かのレバーを一気に下げる。

その瞬間、けたたましい音と共に、大きな爆発が起こった。

<第十九章> 赫牢の外へ（後編）

<第十九章> 赫牢の外へ（後編）

水憐島。

先代のイミユニティー・イグマ部門総合代表、横谷辰巳よこやたつみによって
一大権力を手に入れた島。

横谷家の力の象徴であり、財の、権力、研究の全てがある場所。
そこが今、激しく燃えていた。

宇宙ステーションのような屋根は崩れ落ち、壁はボロボロに剥がれと、その様相は数時間前ここに建っていたものとは到底思えないほどだ。

正面入口となる改札前には飛び火を受け火炎を立ち上らせている
テントがいくつかあった。

陸と水憐島を繋ぐ橋の上から多くの男たちがそれを覗く。紺色の
隊服が象徴のイミユニティーの面々だ。

先頭には僅かにちよび髭を生やした中年の男が立っており、短く
纏めたその髪が風に揺れていた。

「下田さん、テントが……」

中年の男に残念そうな目を向け、横に立っているサングラスをか
けた若い男が顔を伏せた。

「気にするな。水憐島を爆破したのはバイオハザードの証拠を隠滅
するためだ。目の前にあるテントが燃えないのは不自然だろ。俺た
ちが爆発することを知ってたのがバレちまう」

サングラスの男とは全く逆の満足げな顔をあげ、下田はそう言っ
た。

「本当に爆発する必要があったのですか？」

「今回は実際に中の様子を見てきた生存者が多数いるからな。最初

のパニックに生き延びた奴、何とか脱出してきた奴。そいつらが居る以上、毒ガスやウイルスで死体を燃やしましたなんて戯言、マスコミも信じねえだろ？ 被害者の遺族から亡骸の要求とかもありえるしな。だからそういった面倒を除外するためにも、爆破が一番合理的で都合がいいんだよ」

「はあ、そうなんですか……」

サングラスの男は納得がいかないように下田を見た。

「ですが、感染者たちのデータはどうするんですか？ 魚人や鼠魚とかいう奴です。あ、あと人魚とか色々居たらしいですけど」

「心配ない。先ほど上から爆破の命令が来た時に、その件についても教えられた。どうやら、水憐島の職員の中にこちらのスパイが居たらしい。その男が横谷晶子の研究データを全て事前に流していたそうだ。つまり、今回の事件に対する俺たちの役割は、向こうの研究体の存在実証と性能検査ってことさ。いつもながら、俺たちをゴミとも思わない反吐のする計画だぜ」

「し、仕方が無いですよ。それがこの国の為になるんですから。下田さんだって命令どおりに行動してたじゃないですか」

「まあ、今のところはな」

下田は頭の後ろを手で掻き、横を向いた。

「それより、こっだけ派手に破壊しておいて事件後の処理はどうする気なんだ。あれから上の連絡はあったか？」

「あ、はい。つい今しがた入った連絡なんですけど、それについてはちよつと不可解な内容で……」

「言ってみろ」

「そのままの言葉でいいですよ、『問題ない。間もなく全ての意味がなくなる』だ、そうです。どういうことですか？」

両手を左右に開き、クエスチョンマークを頭の上に浮かべる男を他所に、下田はその言葉を噛み締めた。

「全ての意味がなくなるね……何だか妙に深そうな言葉だぜ」

真意は分からなかったが、その言葉に背筋をぞつとさせるような

危険な意味が込められていることを、本能的に理解した。何かとてつもないことが起きるような、そんな気配を感じる。

「まあ、いい。俺は暗号とかは苦手だしな。そういうのはあいつの得意分野だ。奴に聞いてみるとするか」

しばらくうーん、唸ると、下田は諦めたように溜息を吐いた。人より大きな目で瞬きをし、背後に並んでいる無事だったテントの一つへと向った。

中に入るとサングラスの男に向けていたときとは違って、明るい顔でそこにいる人物に笑いかける。

「よお、友。今度の地獄はどうだった？」

「…… 最悪でしたよ」

苦笑い交じりに、友は微笑んだ。

晶子の腕は予想よりも早かった。

ナイフが胸を突くよりも前に、悠樹の体を捉えたのだ。

「くそ、離せ！」

悠樹は駄々っ子をしている子供のように腕を振り回し暴れたが、

晶子はそれを無視し、悠樹の体を高く上げた。

さすがに無茶すぎたか……！

現状では他に手が無かったとはいえ、友はこの戦法のリスクを大いに知っていた。知っていたにも関わらず、踏み切った。悠樹の意思を、強さを信じていたから。

超感覚を持つものなら、何とかしてくれるかもしれない。

いつの間にか、かつての相棒と悠樹を重ね、そう思っていたのだ。「コレデ、オオワリ、ヨ……！」

人間の言葉を放つのがしんどらしく、かなり不自然な話し方で晶子が優越の表情を作る。

この人間は自分の計画を、念入りに練って、練ってやっと実現させた計画をぶち壊してくれた。

思い切り苦痛を与えてながら死を迎えさせてやる。そう思い、悠樹の四肢へ残りの腕を伸ばそうとした。

友と西川がいくら頑張ろうと、この高さに上げた悠樹を助けることなど出来はしない。まさに自分だけの独壇場だ。

倒そうとして昇ったはずの高さが、不幸を呼ぶ。

この事実が、張り詰めていた晶子の心を僅かに躍らせた。

友と西川はまだ諦めてはいなかったが、晶子から受けたダメージと複腕の妨害もあり、中々悠樹に近付くことが出来なかった。

悠樹の死。

それで満足する。それで決着が着く。晶子はそう確信していた。

充血した真つ赤な目で悠樹を見つめると、晶子は口を真横に開いて笑った。悠樹が怯えて自分を見ることを、泣き叫ぶことを期待し、「いくら家族の仇を打つと豪語しようとも、お前も結局は自分の命が一番大切なんだ」そう訴えるように。

だが、悠樹は、決して怯^{ひる}みはしなかった。

この窮地にして尚、じつと晶子を強い眼差しで見つめ続ける。

この目……どこかで見た覚えが……？

晶子はその瞳を困惑した顔で見つめると、ある男の言葉を思い出した。

『俺は何のとりえもないただの一、事務員だ。本当ならお前とは全くつりあわない。だけどこうなったからには、どんな苦難が待っているともお前を大切に一緒に過ごすよ。この言葉に嘘は無い。結婚してくれ』

誰かを守ると、助けると誓った強い意志の籠った目。大助と敏の

ことを思う悠樹の目が、一瞬操の目に見えた。

「うつ……………！？」

ズキリと頭に痛みが走る。晶子の動きが僅かに止まった。本当に僅かな、一瞬だけの時間。だけどそれが命取りとなった。

「……………！」

友はその機を活かし、悠樹の右腕、ナイフを握る手を拘束している腕に向って、己のWASP KNIFE^{ワスプナイフ}を投げつけた。

緑色の肉を裂き、骨に衝撃を与え、高速でそれは飛ぶ。

「ビョオオッ！？」

悠樹は腕が自由になった刹那、発揮できる最大の筋力を使い、晶子の心臓を己の刃で穿った。

「……………っ食らええ！」

イグマ細胞に感染した者の特徴である、黒い血が、晶子の心のように濁ってしまった血が、胸と背から弾き出される。

「ツビアアアアアアアアアア……………！」

自らの死を認めることの出来ない絶望と、全てを台無しにされた怒り。

晶子は心の醜さをさらけ出すように、無様に惨めったらしく、大きな声を上げた。

多くの死に満ちたこの島中に、その声だけが伝わり、広がる。まるで事件の終焉を知らせる曲のように。

夜の訪れを合図する鐘のように。

長く、長く、それは響いた。

漆黒の血を撒き散らして倒れる晶子を眺めながら、悠樹は仇を討てたことに対する喜びと、何故か満足に喜ぶことの出来ない喪失感に襲われ、受身を取ることも出来ずに床の上へと落ちた。

そしてそのまま立ち上がるうとはせずに、じつと横になる。

「何してる悠樹、走るぞ。早くしないと爆破される！」

そんな悠樹を友は強引に起こし、肩を担いだ。崩れ落ちた晶子には全く構おうとしない。無力化した相手に興味はないのだろう。彼

らしい反応だ。

西川と友に支えられるように出口目指して進む中、悠樹は首だけを動かし、晶子を見た。

まだ息があるのか、恨むような、^{すが}縋るような視線をこちらに向けている。

自分の家族を殺した憎むべき存在。もつとも許せない相手。

そのはずなのに、何故か悠樹にはその晶子の姿が哀れで非常に可哀想なものに見えた。

「あばよ、横谷晶子」

最後にそう呟くと、悠樹は二度と振り返ることは無かった。

「おい、お前ら、急げ！ 爆破の許可命令が降りたぞ」

ガラス扉が大きく開け放たれた正面改札に近付くと、同時に拡声器に強化された大声が聞こえてくる。友はその声の主にすぐ気がついた。

「下田さんか。相変わらず威圧的な声だな」

友にとって下田は西川と並び、信用できる数少ない人間だ。自然と頬が緩くなる。

「彼らもようやく追いついたみたいですね」

背後に姿を見せた増援部隊を見て、西川が少し怒ったような声でそう言った。

もう、首を上げることが出来ない。

頬を、唇を、髪を汚す黒い血を眺めながら、晶子はようやく己の死を実感した。

初めて抱く恐怖に全身を震わせる。

「……嫌、よ……死にたくない。何で私がここで……私はただ、自由になりたかっただけなのに……」

腕を出口に向って伸ばそうとするも、力が入らず地面に落ちた。

「だ、誰か。た、助けて……！ 操さん、広……柳い……！」

緑色の皮膚を涙で濡らし、必死に哀願する。

だが、彼女に救いの手が差し伸べられることは無かった。

彼女が救いを求めた相手は、全て彼女自身が葬りさっていたから。最初はただ、周りから寄せられる過度の期待に答えたかった。操を見返したかっただけだった。

自分はこの島のシンボル。象徴。

期待を裏切ることとは出来ない。

二度と夫が他の女に現を抜かすことが無いようになりたい。そう願っただけだったのだ。

たった一度の、一つの間違い。

デガウス・ジェイルの注入。

それが彼女の運命を狂わせた。彼女の家族を、この水憐島中の住民を地獄へと引き込んだ。

いや、正確にはデガウス・ジェイルの所為ではない。彼女の破滅は彼女自身が引き起こした因果。

自分の心で操を繋ぎとめるべきだった彼女は、仲を戻そうとする彼を否定し、己の美を追求した。

自分から離れようとする彼と弟を強引に引き込み、同種という鎖で拘束しようとした。

彼女の間違いを正確に挙げるのならそれはただ一つ、中を見ようとはせずに、その外の殻だけに固執したことだ。

外見など所詮遺伝や偶然の産物による不安定な要素。時代や場所によってその価値も趣向も変わる。

自分の外見を猛信し、それに縋りついていた彼女は最後までそのことに気がつかなかった。

死を迎える今となつてすら。

刻一刻と爆破の時間が迫る中、彼女、横谷晶子はただ必死に考えていた。

何故操が、広が、自分を見捨てたのか。

何故自分はこんな運命を迎えたのか。

何故、悠樹は最後にあんな表情をしたのか。

ただそのことだけを、ずっと考えていた。

夜空が視界一杯に広がる。

休憩所の人ごみに耐えることが出来なくなつた悠樹は、配られた毛布を体に纏わせると、一人テントの外へと出た。

あの地獄から、牢獄から抜け出せた。一日ぶりに広い空を目にすることで、ようやくそのことを事実として実感してくる。

そして当然のように、家族を失つた喪失感も。

ふらふらと歩きながら橋の縁に向つた。まだ燃え続けている水憐島の火で、周囲は明るい。何かに躓くことも無く、すぐに手すりの前に辿り着いた。

たった一日で何もかもが変わってしまった。

家族との再会。

そして死。

後悔は島の中で何度もしていた。

自分がここで働いていたから、この悲劇がおきたのだから。

今悠樹の心を満たしている感情は別のものだ。

それは深い、深い悲しみ。

もう、微笑んでくれる母も、自分のことを殴ってくれる父親も、一生懸命助けてくれる弟もいない。

この世界でたった一人。悠樹はえも言えぬ寂しさを抱いていた。家族はただの血の繋がり。最小レベルのコミュニティの一つ。自分と血が繋がっているから、自分が生んだから、小さい時からよく知っているから。それだけで人は子供を他者とは区別し、大事に扱う。

生まれたときはどの人間にも大差はないというのに。

母が死に、一人で生きることを誓ったとき、悠樹はそう思っていた。家族を捨てたつもりだった。

だが、たった一日再会しただけで、あの日の覚悟が、思いが、決意が吹き飛んでしまった。

何故か塩水の味がする汗が、大量に瞼の裏から溢れてくる。

「あゝ……くそ。海の上に居る所為で、汗までしょっぱくなっちゃった」

別に誰かが見ているわけではないのだが、言いわけするようにそう呟いた。

横谷晶子は死んだ。

全ては終わった。

もう、怖がることも、ビクつくこともない。なのに、悠樹は手すりに縋りつくようにしゃがみこむと、子供のように体を震わせた。いくら割り切ろうとも、いくら決別しようとも、一度家族としてコミュニティを形成した以上、その思いは消えることはない。

家族とは友人でも同僚でもない。本心から、素の自分で接する事の出来る数少ない存在。

今になって。全てを失って。初めて悠樹はその大切さが分かった。

「悠樹」

どれくらいそうしていたのだろうか。いつの間にか、背後に友が立っていることに、悠樹は気がつかなかった。

「な、何だよ……！」

恥ずかしそうに袖で臉を擦り、前を見たまま聞き返す。

「今回の業績からお前のイミューニティー入りが決定した。戦闘員だ。しばらくは、俺の部下という形で行動することになる」

「あ、そう」

「嫌がらないのか？」

あまりにもあっさりな悠樹の反応に、友は驚いた。じつと金髪が生い茂る後頭部を見つめる。

「もうどうだっていいんだよ。俺には帰るところも、行く所もなくなっちまった。お前らの好きにすればいいだろ」

「悠樹……」

大助と敏を救えなかったことは、半分は自分の所為でもある。友は困ったように言葉を積らせた。

このままでは悠樹が壊れる。とつさにそう感じる。

ここで慰めの言葉を言っても、大した意味はない。友はかつての自分の気持ちから、今もつとも悠樹に必要な言葉を思い起こした。

「横谷晶子はただの一部だ。イミューニティーの上にはあいつのような人間が何人もいる。そいつらがのうのうと居座っている限り、本当の意味でお前の敵討ちは成功したことにはならない」

「……ああ？」

「奴らは権力が続く限り、何度も同じことを繰り返すだろう。お前が本当にあの二人の敵を討ちたいと思うのなら、そいつらを今の地位から引きずり下ろす必要がある。特に、六角行成とかな」

動物は己の本能にしたがって生き、本能によって死ぬ。だが人間は己の人生に目標を定め、意味を求める。本来は何の意味なども定義されていないそれに、価値を作り、支えとして生きるのだ。

友は目標を与えることで悠樹を救おうとした。生きる意志を甦らそうとした。まだお前には役目があると、生きる意味があると知らせることで。

「知るかよ。実際に親父たちを殺したのは晶子とあそこにいた化物だろ？ そんな上のことまで考えてたらきりがねえよ」

悠樹は疲れたように溜息を吐いた。

「おい、悠樹……」

このままでは不味い。友はなんとか悠樹が立ち直れるように説得しようとした。

心配そうに腕を伸ばす。

悠樹はその手を払いのけ、立ち上がった。思わず友は動きを止める。

「でも、まあ……そいつらの思い通りに動くつてのも癪だな。俺は横谷晶子とは、お前らとは違う」

「どうする気だ？」

友は訝^{いぶか}しがるように悠樹を見た。

「……取りあえず、そいつらの顔を見て判断するさ。気に入らなかつたら殴って終わり、気に入っても親父たちの恨みを晴らす為に殴る」

「どっち道殴りたいのか」

「じゃなきゃ、気分が晴れねえんだよ。俺は敏のように穏やかには出来ない。皮肉なことに、暴力的なとこだけはあの馬鹿親父に似ちまった」

「いや……皮肉なもんか。お前は立派にあの人の強さを受け継いだんだ。殴りたければ、思いっきりなぐればいい。ただそのときは」

友は爽やかな笑みを浮かべ、言った。

「俺にも殴らせろ」

それを聞いた悠樹は一瞬目を大きく空けて止まったが、すぐに大きな声を出して笑い出した。

「はははははっ！ 何だよそれ、お前らしくねえな」

「俺が善意でこの組織に身を置いていると思っっているのか？ 俺がここにいる理由はお前と同じだ。かつて目の辺りにしたような犠牲者をもう、出したくは無い。ただそれだけなんだ」

まだ笑い続けている悠樹とは正反対に、真面目腐った顔でそう言うのと、友は背を向けた。

「ん？ どこに行くんだ？」

「事後報告があるからな。多分、お前も後で呼ばれるだろう。俺は既にイミユニティーの一員だから、報告もしっかりしたものでないとヤバいんだ。先に行かせて貰う」

「はあ……色々と面倒なんだな」

悠樹は舌を伸ばし、苦い物を食べた直後のような顔をした。

その顔を呆れた目で見つめると、友は歩き出した。

もう、心配する必要はないか。あいつは強い。これで、大丈夫だ。

きつと立ち直ってくれる。そう信じ、一步一步進んでいく。

「あ、！ 友。あなたの携帯に着信がきてますよ」

イミユニティー用の休憩室から出てきた西川が、友に気がつき携帯電話を渡していた。

「あれ？ これ……メールですね。態々持ってこなくても良かったのに」

「え、メールでした？ 着信が長かったからてつきり、すいません」

「何で西川さんが謝るんですか。気にすることはないですよ。ありがとうございます」

謝る西川に恐縮し、友は慌てて礼を言った。

「それより、西川さんは体の調子はどうですか？ 結構傷を負っていたようだけど」

「私は全然大丈夫ですよ。あなたや悠樹と比べて殆ど接近戦をしていませんからね。心配しないで下さい」

「そうですか。良かった。西川さんに何かあったら、下田さんと一

対一で接する機会が激増しますからね。仲間としてはともかく、上司として俺、あの人の威圧的な態度が苦手なんだ」

「そっという意味ですか」

何故か西川は呆れるような視線を友に向けた。

「じゃあ、一応携帯は渡しましたよ。私はあなたの苦手な下田さんに呼ばれているので、もう行きます。あとの会議でまた会いましょう」

そっというと、西川はあっさりとその場を後にした。気のせいかし肩を落としているようにも見える。

「さて、誰からのメールだ？」

友はその場に立ち止まったまま、携帯を開き、画面を見た。

吉田亜紀と書かれている。

「そうか、今日の仕事のことは言ってなかったな。心配させてしまったか」

セミシヨートの茶髪をわしわしと掻くと、友は困ったように携帯を閉じた。

「さあ、早くしないと報告に遅れる」

そのまま早足で歩き出す。

気の所為か、その表情は携帯を開く前よりも明るくなっていた。

夜空を見ながら、悠樹は晶子の最後の姿を思い出していた。

酷く心細そうで、か弱そうな、あの泣きそうな顔を。

今でも晶子は憎い。

絶対に許すことは出来ない。

だが、最後の表情を見てから、悠樹の中にもうひとつの感情も生

まれていた。

晶子に対する哀れみと、悲しみ。

敏の佳代子に対する最後の思いがまだ残っているのか、晶子自身の感情を共感で知ったからか、何にしても、そういった感情があるということだけは事実だ。

彼女もまた被害者の一人だったということを何となく理解する。

悠樹は先ほどの友の言葉を繰り返した。

「俺にも殴らせろ……か」

イミュニティーは、イグマ細胞は多くの人間の命を奪った。

最初に遭遇したサラリーマンの男。

水憐島を訪れていた人々。

父、大助。

イミュニティーのメンバーたち。

そして、敏。

全ての元凶と思われた晶子もまた、被害者の一人だった。

この因果を、この連鎖を止めなければならない。

柄にもなく悠樹はそう思った。

「何か変な気分だぜ。敏の奴、魂までも俺に乗り移ってきたんじゃないねえだろうな」

水面に映る自分の顔を見つめ、目を細める。

自分はずっと牢獄に居た。

母が死んだあの時から。

憎しみと言う名の概念に囚われ、血の記憶に苛まれた。

まるで真っ赤に染まった赫牢の中に居るように。

でも、それも今日までだ。何が大切な、何が大事な。今の自分にはかつて見えなかったものがよく見える。

悠樹は泣きそうな気持ちを耐え、心を沈めると、水面に映る自分に向って己の新しい決意を誓った。

「この腐ったシステムを、この組織を動かしている奴らには報いを受けて貰わねえとな」

最後に、その顔の横に反射している月と、その本体を見上げ悠樹は呟いた。

「なあ、親父」

<第二十章>エピローグ（前書き）

それでは、毎回のことながら次作の宣伝ということで。

尋獄3（GENESIS CRADLE）

ディエス・イレ対イミュニティー決着。

イミュニティーへの総攻撃を行う直前、ディエス・イレの本部は突如謎の部隊の襲撃を受け壊滅した。

誰もが予想だにしなかったその事件から二日後。

黒服の総帥である白居と、イミュニティーの代表である六角に繋がりにあることを知った巳名截（ノ曲直悟）は、六角が所有する屋内人工都市「常世国」へと来ていた。

ディエス・イレの壊滅。六角と白居の関係。

調査を進めるうちに、截は行方不明となっていたある人物の姿を目にする。

ディエス・イレのボス。東郷大儀だ。

そしてそれを境に、常世国のあちらこちらから無数の感染者があらわれ出し始める。

東郷を止めるべく奔走するうちに、截は懐かしい二人の人間と再会する。

そしてその出会いは、彼らの運命を、未来を。ひとつの方向へと導いていた。

最終章前編、尋獄3（GENESIS CRADLE）

どうか投稿時にはこちらにもよろしくお願い致します！

< 第二十章 > エピローグ

< 第二十章 > エピローグ

水憐島から少し離れた海岸。島と直結している橋から見て、斜め数百メートルにあるこの位置に、丁度水から這い上がった一人の男がいた。

男の名前は岸本源一。今日一日の事件をその身で体験した一人だ。付けていたマスクを外し、背負っていた潜水具を脱ぎ捨てると、一仕事終えたかのように彼は大きな伸びをした。

あの時、悠樹たちが阿修羅を倒した直後。岸本は魚人の集団に襲われ、死んだ。少なくとも、悠樹たちからはそう見えていた。

だが、彼は死んでなどいなかった。彼のことを良く知っている人間ならば、彼がそんなことで死ぬわけがないことは分かりきっているだろう。

彼は「計画的」に彼らの死角に己の身を滑り込ませ、ワザと死の瞬間を悟られないようにし、それを偽造した。魚人が覆いかぶさった瞬間、死んだのは彼ではなく、魚人自身だった。

彼は、岸本は、本来ならば最後まで生存者たちと一緒に行動するつもりだった。だが、途中であることに気がつき、態々実力や姿を偽ってまで潜入していた努力を捨てた。

そして横谷広に仕掛けていた小型盗聴器から知った潜水具を利用し、こうして島を脱出したのだ。

髪の毛を結んでいた紐を解き、長めの髪を垂らす。そしてそこに染み込んだ水を切っていると、目の前に明かりが点いた。

二台の黒いバイクだ。

「遅かったな」

岸本は両手を腰に当て、不機嫌そうにバイクの持ち主たちを見る。

「こつちにも色々であつたんだよ。大体、お前に手助けなんか必要ないだろ。らしくない」

声をイラつかせながら、その内の一人、若い男が文句を言った。
「クスクス、お前たちが来ないからまんまと草壁に逃げられた。殺すつもりだったのに」

作つたような笑顔をその男に向けながら、岸本は腕を組む。

「はあ、何言つてんだ？」

先ほど文句を言つた男とは別のバイクの主が、透き通るような綺麗な声で聞き返した。

「何でもないさ。それで、色々あつたて、どういうことだ？」

「キツネ。あんたがディエス・イレに売っぱらつた博士が、紀行園で一大事件に巻き込まれたんだよ。この馬鹿が勝手にそれを助けに向つたんだ」

「高橋博士が？」

綺麗な声の主、翠の言葉で岸本は、いや、キツネは意外な事実を始めて知つた。

横谷広は草壁が別の仕事をしていると言つていた。僕から逃げたことを隠すためのでたらめだと思つていたが、あの女の姿が何処にも見えなかつたのはその所為か？……まあいい。

「面白そうだな。後で詳しく教えてくれ」

何が起きようとも、自分の企みを阻害することは出来ない。今回駒として利用した横谷晶子のように、全ては自分の思うがままだ。

キツネは誰に見られるとも無く口元を緩めると、静かに背後の水憐島を振り返つた。

「そう、全ては十五年前のあの時から」

悪魔よりも悪魔らしい、ニヒルな笑みを浮かべながら。

全てを知り尽くしているかのような目で。

燃え盛る水の牢獄を、嘲るように見つめた。

<第二十章>エピローグ（後書き）

ご読了ありがとうございます。

尋獄3の執筆は他の小説の修正が終了次第、行います。

投稿時には是非そちらの方も読んで見て下さい。

それでは、ここまで読んでくれた皆さん。

本当にありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7261g/>

尋獄E1 (DEGAUSS JAIL)

2010年10月8日12時47分発行